

は、同等の敵に男の背、驕馬の臀を見せざりき。今爾朝早く便ちいかんぞ心怖ちたる。爾（朝氣鋭、晝氣惰、暮氣歸と孫子あるは、惟法）爾をかく心怖づるを知りたれば、合屯の人に（曰へり、今早朝にして情歸の氣甚きなり）もあれども、爾の母を古兒別速を伴れ來て軍を治めしめざらんや。（親征録昔君父亦年可汗勇戰不回。士背馬後未嘗使人見也。今何怯邪果懼之何不令菊兒八速來。この譯は、簡にして質なり。元史は修飾を加へ「先王戰伐勇進不回。馬尾人背不使敵人見之。今爲此遷延之計得非心中有所懼乎。苟懼之、何不令后妃來統軍也」と改め、頗る雅馴なる文とな）嗟惜けくも可克薛兀撒卜喇黑に老いられたり。いかにも我が軍の法度は怠慢になれり。忙豁勒の天時氣運とぞ爲れるに非ずや。嗚呼、懦き塔陽、臆病の如くのみあり、爾と云ひて、その箭筒を打ちて別れ驅け去れり。

塔陽罕の奮進

その時塔陽罕怒りて言く「死ぬる命、苦む身は、すべて一つなるぞ（苦まんよりはは）。しかあらば戦はん（明人死的性命辛苦的身軀都一般。您那般說呵、咱迎去與他厮殺）と云ひて、合池兒の水より動きて、塔米兒河（水道提綱の他米爾河）に沿ひ行きて、斡兒桓河を渡りて、納忽の崖の東の裾を過ぎ、察乞兒馬兀惕に到りて來つる時、成吉思合罕の斥候見て、「乃蠻到りて來つ」と云ふ報を致したれば、この報を致さるゝと、成吉思合罕勅あるには「多きよりは多く、少きよりは少く損失になるぞ（多き乃蠻には死傷多く、寡き蒙古には死傷寡からん）」と云ひて、「彼等の迎へに出馬して、彼等の斥候

逆戦の救



叢行き海立  
合ひ鏖戦ひ

乃蠻の退き  
蒙古の進み

を逐ひて、軍を整ふるに、叢の如き行きを行きて、海の如き立合ひを立合ひて、鏖の如き戦ひを戦はん」と云ひ合へり。(叢行きは、廣がり行くこと、海立合ひは、廣がれる陣立、鏖戦ひは、烈き突撃なり、黒韃事略に、其行軍常恐衝伏、雖偏師亦必先發精騎四散而出、登高眺遠、深哨一二百里間、掩捕居者行者、以審左右前後之虛實、と云へるは、即ち謂はゆる叢行きなり、其陣利野戰不見利不進、動靜之間、知敵強弱、百騎環繞可裏、萬眾千騎分張、可盈百里、と云へるは、即ち謂はゆる海立合ひなり、摧堅陷陣、全藉前鋒、衽革當先、例十之三、と云ひ、又交鋒之始、每以騎隊徑突敵陣、一衝纒動、則不論眾寡、長驅直入、敵雖十萬、亦不能支、) かく云ひて、成吉思合罕自ら先鋒となりて、合撒兒に中軍を整へさせて、斡惕赤斤那顔に従馬を整へさせたり。乃蠻は、察乞兒馬兀惕より退きて、納忽の崖の前なる山の裾に縁りて立ちき。かくて乃蠻の斥候を我等の斥候は逐ひて、納忽の崖の前

塔陽罕札木  
合の問答

人肉にて養  
へる四狗

なる彼等の大中軍に遇ふまで逐ひて到りき。かく逐ひて到れるを塔陽罕見て、札木合はそこに乃蠻と共に出陣して來合ひて、そこに居て、塔陽罕は札木合に問ひけり。「彼等はいかに。多き羊を狼追ひて圈に到るまで追ひて來るが如きは、これらはいかなる人かかく追ひて來ぬる」と問へり。札木合言はく「我が帖木眞安荅、四つの狗を人の肉にて養ひて、鎖つけて繋ぎて、居るなりき、彼等、我等の斥候を追ひて來ぬるは、彼等なるぞ。彼等四つの狗は、銅の額あり、鏖の嘴あり、錐の舌あり、鐵の心あり、環刀の鞭あり、露を喫みて、風に乗りて行く、



躍り繞る兀  
嚙兀惕忙忽  
惕

彼等殺合ふ日は、人の肉を喫ふ、彼等。到り合ふ日は、  
 人の肉を糧とす、彼等。鎖を解かれて、今繫がれずして  
 居るを喜びて、かく涎垂れ來ぬ、彼等」と云ひき。「それら  
 四つの狗、誰誰はそれらか」と云へば、「者別、忽必來二人、  
 者勒篋、速別額台二人、それら四人なり」と云ひき。塔陽罕  
 言はく「但それらの下人より遠く立たん」と云ひて、退り  
 引きて、山を負ひて立てり。その後より躍りて繞りて  
 來ぬるものどもを見て、又塔陽罕は、札木合に問ひき。  
 「彼等はいかに。朝に放てる駒、母の乳を嘔ひて、母の廻  
 りを疾く走る駒の如く、いかにぞかく繞り來ぬる、彼等」

貪る鷹の如  
き帖木眞

と問ひき。札木合言はく「彼等は、鎗ある男を追ひて、血あ  
 るもの(生きた)を剝ぎに剝ぐ、環刀ある男を逐ひて倒し  
 て殺して、財を剝ぎ取る、兀嚙兀惕忙忽惕と云はる、彼等。  
 今「繫がれ」ずして居るを「喜びて、かく躍りて來ぬ、彼等」  
 と云ひき。それより塔陽罕言はく「但しかあらば、それら  
 の下人より遠く立たん」と云ひて、又退り山に登り立て  
 り。その後より來ぬる、貪る鷹の如く涎垂れて前みて  
 來ぬるは、誰なる」と、塔陽罕は、札木合に問ひき。札木合  
 言はく「この來ぬるは、我が帖木眞安荅。彼の總身は、銅  
 にて鍛へられたるもの、錐を刺すに隙開無く、鐵にて



大蟒の如き  
拙赤合撒兒

疊みあげたるもの、大針を刺すに隙間無き我が帖木眞  
 安荅、食る鷹の如く、かく涎垂れ來ぬるのみ。見たりや、汝  
 等乃蠻の眾は「忙豁勒を見れば、子羊の蹄皮も餘さじ」と  
 云ひたりき。汝等見よ」と云へり。(親征録に「汝等見案荅舉止英異乎。乃蠻語嘗有言「雖駁革去皮猶食不捨」豈能當之」と云へるは、この語を譯して修飾を加へたるに似たれども、文は甚だ蹇拙なり。元史に「乃蠻初舉兵視蒙古軍若殺癩羔兒意謂蹄皮亦不畱今吾觀其氣勢殆非往時矣」とあるは、親征録の文に似ずして、却て秘史の文に似たり。蓋元史のこの條は、親征録に據らずして、大德七年に成れる太祖實錄に據り、その實錄は、修正秘史の文を辭通) この言につき、塔陽罕言はく「但畏山に登り立たん」と云ひて、山に登りて立ちけり。又塔陽罕は、札木合に問ふに「又その後より厚く(大衆を)來ぬるは、誰なる」と問へり。札木合言はく「訶額命額客は、一

人の子を人の肉にて養ひてありき。三尋の身あり、三歳の頭口を喫ひ、三重の甲を被て、三匹の強牛を拽きて來るぞ。箭筒ある人を都てを嚙むとも、喉を碍へられず。全き男を呑むとも、心臟に障らず。怒れば、昂忽阿(箭の名)の箭を拽きて放てば、山を越えてある十人廿人の人を穿つほどに射る。鬪ふ敵を曠野を隔ててあるものを客亦不兒(箭の名)の箭を拽きて放てば、連ぬるほどに穿つほどに射る。(明)將人連穿透。大に拽きて射れば、九百尋の地に射る。減く拽きて射れば、五百尋の地に射る。人人より違ひ、古咧勒古(蟒の一種)なる蟒に生れたる拙赤合撒兒と



肝ある幹惕赤斤

云はるゝは、彼なるぞ」と云ひき。それより塔陽罕言はく「但然あらば、山の高みを争はん。上へ登れ」と云ひて、山に登り立てり。又塔陽罕は、札木合に問ふに「彼の後より來ぬるは、誰なる」と云ひき。札木合言はく「彼は、訶額命額客の末の子幹惕赤斤、肝ありと云はるゝなり。早く睡り曉に起き、黒闇よりも後れたること無く、立處よりも後れたること無し」と云ひき。塔陽罕言はく「然あらば、山の頂の上に上らん」と云ひけり。

札木合の心がはり

札木合は、塔陽罕にこの言をかく言ふと、乃蠻より離れ、別れて出でて、成吉思合罕に報告を入れて遣るに、

乃蠻の潰敗

塔陽の虜はれ古出魯克の走り諸部落の降り

「安荅に言へ」とて言ひて遣るに「塔陽罕は、我が言に昏みて、上り争ひ驚きて上れり。口にて殺されて、怕れて山に登り上れり。安荅戒慎せよ。彼等は、山に上れり。この人どもは、逆ふる氣色なし。我こそは、乃蠻より離れたれ」と云ひて遣りき。成吉思合罕は、日晚になられて、納忽の崖の山を取巻き軍立して宿れり。その夜乃蠻は、窺れ動かんとし、納忽の上より墜ちて、上に上に重なり合ひて、骨髪を碎き倒れ合ひて、爛木ノロキの如く立つまで壓し合ひて死に合ひけり。その明朝塔陽罕を窮めて拿へたり。古出魯克罕は、別に居たるにより、僅の人にて背



古兒別速の  
召され

き動きて、追驅けらる、時、塔米兒河に駐營しけり。その  
 團營を立てかねて、動きて走りて出でて去れり。乃蠻の  
 民の部落を阿勒台山の前に窮めて收めたり。札木合と  
 居たる札塔蘭、合塔斤、撒勒只兀惕、朶兒邊、泰赤兀惕、翁吉喇  
 惕等、そこに又降りり。(元史は火力速八赤の言を叙べたる次に、太陽罕  
 怒即躍馬索戰、帝以哈撒兒主中軍、時札木合從  
 太陽罕來、見帝軍容整肅、謂左右曰云云、遂引所部兵遁去、是日帝與乃蠻軍大戰、  
 至哺禽、殺太陽罕諸部軍、一時皆潰、夜走絕險、墜崖死者不可勝計、明日餘眾悉降、  
 於是朶魯班塔塔兒哈答斤散只兀四部亦來降と云へり、これは太祖實錄と親征錄即  
 ち聖武開天記とに本づきて、修飾を加へたるものにて、文は甚だ雅健なれども、事  
 實は原本秘史と稍違へり、來降の部落の名にも誤りあり、塔塔兒の諸部  
 は前に已に殲滅せられたれば、この中に加はらざる方事實なるべし)塔陽の  
 母古兒別速を成吉思合罕は、伴れ來させて言はく、汝は、  
 忙豁勒の氣息惡くと云ひて居らざりしか。今いかで來

篋兒乞惕の  
勦討

ぬる、汝」と云ひて、成吉思合罕は娶りけり。  
 その鼠の年秋、合喇答勒忽札兀兒(合喇答勒の源、親征錄)迭兒惡河  
 源(別喇津塔兒河)に篋兒乞惕(親征錄、朶兒乞部、元史、朶里乞部)の脫黑脫阿別乞(親征錄、元  
 史、脫脫)と成吉思合罕對陣して、脫黑脫阿を動かして、撒阿哩客  
 額兒に彼の人民住具部落を虜へたり。(この撒阿哩原は蒙古  
 に似たり、塞北には同名の地甚だ多し、親征  
 錄には迭兒惡河源不刺納矮胡之地とあり)脫黑脫阿は、忽都赤刺溫な  
 る子どもと、僅の人にて、身を以て逃れて出でたり。か  
 く篋兒乞惕の民虜へらる、時、豁阿思篋兒乞惕(卷二卷三の  
 元注、思篋兒  
 乞惕、親征錄、兀  
 花思、朶兒乞部、  
 元史)帶兒兀孫(親征錄、  
 元史)は、息女忽蘭合屯  
(親征錄、忽蘭哈敦、元  
 史、后妃表、忽蘭皇后)を成吉思合罕に見せまつらんとて伴れ

朶亦兒兀孫  
の女忽蘭合  
屯の拜謁



て來ぬるに、路にて軍士どもに妨げられて、巴阿嚙の  
 納牙那顔(卷五なる你出古揚 巴阿嚙の納牙阿)に遇ひて、答亦兒兀孫言く「この息  
 女を成吉思合罕に見せまつらんとて來ぬ、我」と云ひき。  
 そこに納牙那顔言く「汝の息女を我等俱に見せまつら  
 ん」として止めけり。止むる時、答亦兒兀孫に「汝獨にて往  
 かば、路にて軍士ども亂るゝ時に、汝をも活さず、汝の  
 息女をも亂すべし」と云ひて、三日三夜止めけり。そこよ  
 り忽闌合敦と共に答亦兒兀孫を率ゐて、共に納牙那顔  
 は、成吉思合罕に致せり。それより成吉思合罕は、納牙に  
 「いかんぞ妨げて居たる、汝」とて、甚だ怒りて、嚴しく仔

納牙阿の忠  
謹

細を問ひて、「法にあてん」とて問ひつゝある時、忽闌合  
 敦言はく「納牙阿は言ひき。成吉思合罕の大官人なり、我  
 は我等俱に汝の息女を合罕に見せまつらん。路にて軍  
 士ども亂さん」とて勧めけり。今納牙阿より別なる軍士  
 どもに遇はば、亂に「又は」正に入りけんか(明譯)若不遇著  
 納牙留住阿、如今也不知如何。この納牙阿に遇ひたる  
 は、我等の幸となれり。今納牙阿を問ひ給ふに、合罕恩賜  
 せば、上帝の命にて父母の生みたる皮膚を問ひ給は  
 ば」と奏さしめけり。納牙阿は、問はるゝ時、合罕より外に  
 我が面は向ふこと無くあるぞ。外國の民の腮美(合察兒)き



女子妃合屯合兒合、臀節好き駟馬に遇へば、「大君のもの「それ」も」と云ひて居りしぞ、我合屯合兒合これより外合屯合兒合に我が心あらば、死な  
 ん、我」と云ひき。成吉思合罕は、忽蘭合敦の言上を善く  
 として、その日に便ち審べ試みれば、忽蘭合敦の奏し  
 たるに違はずして、成吉思合罕は、忽蘭合敦を恩賞して  
 愛みたり。納牙阿の言違はずして、「成吉思合罕は善くと  
 して、「實の言ある「人」なりき」と云ひ、「大なる勾當を委ね  
 ん」として恩賞せり。

成吉思汗實錄卷の七終り。

成吉思汗實錄卷の八。

幹歌歹の妻  
となる朶唎  
格捏

峯の寨の攻  
撃

成吉思汗の  
長追

篋兒乞惕の民を虜へて、脱黒脱阿別乞の太子忽都の  
 合秃惕（合屯の復稱）秃該朶唎格捏二女より朶唎格捏（元史后妃表）脱列  
 哥那六皇后乃馬真氏、追諡昭慈皇后をそこに幹歌歹合  
 罕（卷六の翰闐歹）に與へたり。篋兒乞惕の半の部眾反きて、峯の  
 寨（語蒙）台合勒豁兒合（語譯山頂寨子、文譯台合勒山寨、親征錄泰安寨、元史秦寨寨）に據りき。そこに  
 成吉思合罕ありて、鎖兒罕失喇の子沈白（親征錄赤老温拔都の弟闐拜）を  
 官人として、左手の軍にて、寨に據れる篋兒乞惕を攻  
 めさせに遣りぬ。脱黒脱阿は、忽都赤刺温なる子どもと  
 共に、僅に身をもて背きて出でたるを、成吉思合罕追驅



額兒的失河  
不黑都兒麻  
河の解

けて、阿勒台山の前に冬籠りて、牛の年(我が元久二年乙丑、宋泰和五年、西紀一二〇五)春、阿唵嶺により越えて往けば、乃蠻の古出魯克罕は、部眾を取られて、かく背きて出てたるに  
より、僅の眾にて、篋兒乞惕の脱黑脱阿と二人合ひて、額兒的失河の「渌水なる」不黑都兒麻河の源に會りて、軍を整へて居りき。(額兒的失河は、親征錄元史太祖紀に也兒的石河、憲宗紀に葉濟斯河、西域水道記には額爾齊斯河、露西亞の地圖には伊兒齊斯河とあり、上流の二源を庫伊兒齊斯喀喇伊兒齊斯と云ふ。庫は黃喀喇は黒なり、二水合ひたる後、喀喇伊兒齊斯と云ふ。阿勒泰山の東南幹山の西南麓の諸水を合せて、齋桑諾爾に入り、諾爾より北に流れ出でてより伊兒齊斯河と云ふ。不黑都兒麻河は、西域水道記の布克圖爾瑪河にして、露西亞の地圖には布合塔兒瑪河とあり、科布多の西北なる阿勒泰山頂の西麓より出で、北緯四十九度の北を西に流れて、伊兒齊斯河に入る。蒙古地方より布合塔兒瑪の源に往くには、科布多河の上流なる索果克河の源より阿兒古特嶺の南端を踰ゆる路順なれば、阿唵嶺は、即ち阿兒古特嶺などの古名なるべ

脱黑脱阿の  
戦死

し) 成吉思合罕到りて對陣したれば、脱黑脱阿はそこに  
流箭に射られて倒れき。彼の子どもは、彼の骸を取り  
かねて、彼の身を持ちて去りかねて、彼の頭を断ちて  
持ちて去りき。そこに乃蠻篋兒乞惕共に會りて對陣す  
る能はずして、逃れ動く時、額兒的失河を渡る時、溺れて  
多數を水に死なすめき。僅に出でたる乃蠻篋兒乞惕は、  
額兒的失河を渡り畢へて、離れ動きけり。乃蠻の古出魯  
克罕は、委兀兒台(卷三なる畏忽惕また委兀惕、親征錄元史畏吾兒、唐の回紇八里城、今の濟木薩の稍北にあり、その地は、天山の南北に跨れり。布合塔兒瑪河の源より委兀兒の地に往くには、その河に沿ひて西に下らずして、喀喇喀巴河に沿ひ南に下りて、喀喇伊兒齊斯河を渡り、猶南に)合兒魯兀惕を過ぎて、(合兒

乃蠻の古出  
魯克罕の奔  
竄



脱黑脱阿の諸子の奔竄

魯兀惕は、親征録元史本紀に哈刺魯、地理志に柯耳魯、即ち唐書の葛邏祿に於て、國は今の伊犁の西北にありき、委しくは卷十一に言ふべし。撒兒答兀勒の地に垂河に居る合喇乞答惕の古兒罕に合ひに往きけり。篋兒乞惕の脱黑脱阿の子ども忽都合惕、赤刺温が頭となれる篋兒乞惕は、(忽都合刺温は、前に見えたり、忽都合は、速不台惕は、下文に合勒とあり、元史巴而朮阿而忒的斤の傳には「脱脱之子火都赤刺温馬札兒秃薛干四人」とありて、合惕又は合勒に似たる名なし、元史類編に親征記を引きて、脱脱の四子の名を挙げたるは、巴而朮の傳と同くけれども、今の親征録には、只脱脱之子四人」とありて、その名なし、洪鈞の別喇津を譯したるには、忽都合刺温、赤攸克、呼圖罕、蔑兒根とあり、その呼圖罕を多遜は庫圖罕と書けり、不喇惕、撈乃迭兒は、別喇津を引ききて、脱克塔の六子の名を挙げたるに、呼圖罕を呼勒圖罕と書けり、合惕は、呼圖罕又は庫圖罕の下略にて、下文の勅は誤寫ならんか、) 康鄰を欽察兀惕を過ぎ去りけり。(康里欽察の名は、元史に屢見えたり、康里は、漢代里とも云ひ、阿喇勒湖の北、今の乞兒吉思曠野の地に居りし人種なり、欽察は、下文には正しく乞卜察克ともあり、康里の西隣にて、今の露西亞の南部、佛兒夏河の左

蔑兒乞惕の誅滅

右に廣がり、) そこより成吉思合罕は回りて、阿喇嶺により越えて舊營に下馬せり。沈白は、峯の寨に據れる篋兒乞惕を窮めき。そこに篋兒乞惕をば、成吉思合罕勅あり、彼等の皆殺しを殺さしめて、(皆殺しを行はしめての意なり、) 彼等の残れるをば、軍士どもに虜へさせたり。又先に降りたる篋兒乞惕は、舊營より反き起りき。舊營に居たる我等の家人ども、彼等を敗りき。そこに成吉思合罕勅あるに「聚りて居らしめんと云ひしに、彼等只反きけり」とて、篋兒乞惕を各に盡くるまで分けさせたり。

鐵車の勅

その牛の年、成吉思合罕勅ありて、速別額台を鐵の



搜討の譬

車にて（親征録には以鐵裹車輪とあり、洪鈞は以鐵釘密布於車輪、庶行山路不易壞と譯せり）脱黑脱阿の忽都合勒、赤刺温等なる子どもを追はしめに遣る時、速別額台に成吉思合罕勅ありて宣らするには「脱黑脱阿の忽都合勒、赤刺温等なる子どもは、去り驚きて回り射合ひて、套竿を帯びたる野馬、箭に中れる鹿となりて去れり。彼等を、翅あるものとなりて、飛びて天に上らば、汝速別額台は、海青となりて飛びて捕へずや。土撥鼠となりて爪にて爬ひて地に入らば、鉄となりて鑿りて尋ねて追ひ上げずや。魚となりて騰吉思の海に入らば、汝速別額台は、旋網拖網となりて撈ひて收めて取らずや、

遠征の心得

汝（何秋濤の朔方備乘に、この條の明譯文を約め、篋兒乞吾深仇也。敗而て下の如く極めて簡古なる漢文に譯せり）遠遁、如馬帶竿、如鹿負箭。若飛、汝作鷹鷂。若入穴、汝作鋤。若入海、汝作網、與汝鐵車、以堅汝志。又高き峠を越え、寛き河を渡りに遣りぬ、汝を地の遠きを想ひて、軍の馬ども瘦せざるに撫れ。糧を盡さざるに惜め。駟馬瘦せ畢へば、撫るとも成らず。糧盡し畢へば、惜むとも成らず。汝等の路に獸多くあるぞ。過ぎんと思ひて行く時は、軍の人を獸に勿走らせそ。限無く勿圍獵せそ。軍の人に糧を添へ、櫓蓋となれとて圍獵せば、限りて圍獵せよ。（櫓蓋の蒙語汪格古、解り得ず、明譯に従へり。獸の皮にて作る天幕の屋なるべし。）限ある圍獵より外



は軍の人の鞍の鞅レリグイを勿ナ繋カけさせそ。轡カを搭カけず口クチを  
 聞シめずして行ユけ。かく定め合アひて行ユけば、軍の人馬ヒトウマを  
 驅カることいかで出來キん。かく定サめて、便スナハち法度ハフドを越コゆる  
 ものを拿トラへて打ウて。我等ワレラの勅トトを越コゆるものを、我等ワレラに認ト  
 めらるゝ如ゴトきものを、我等ワレラに與アへておこせよ。我等ワレラに認ト  
 められざるあまたをば、只シそこに便スナハち斬キらゝめよ。河カハの  
 あなたに相アヒ離ハナれん、汝等ナンテラ只道理グワリによりて行ユけ。山ヤマのあな  
 たに相アヒ別ワカれん、汝等ナンテラ外ホカをば別コトに勿ナ想オモひそ。長生トコヨシの上ウツカ帝ミカド  
 に力チカラ勢イキホヒを添ツへられて、脱ト黑ク脱ク阿アの子コどもを手に入イれ  
 ば、我等ワレラに持セち來クるまでも何ナニあらん、そこに汝等ナンテラ棄スてよ

赦すべからざる深き讎

と勅トトありき。速別額台スベツベツに又マタ成吉思合罕言チンギスハカンへらく「汝ナンテを出シユラ  
 征イせさするは、我ワレ小チホシき時に、三つの篋ケツ兒ルキ乞キ惕トの兀都亦惕ウツドイテイ  
 に不フ兒罕ルカン合勒敦カレドンを三たび繞ウラらせて怕オソれさせられたり  
 き、我ワレかゝる讎アタある民タタを今又イマ口舌クチシタを放ハナちて去サりき。長ナガ  
 き梢コメに深フカき底ソコに到イり合アへよ（明）我欲教ワレカクセシト你追到極處ニオヒテイカラハナノトコロニ」と  
 て、追オはゝむる極端イキマテまで、鐵テツの車クルマを造ツクりて、牛ウシの年トシ出征シユツセイ  
 せゝめたり。我等ワレラを背處カゲにありても對面マツカヘの如ゴトく、遠トホき（額赤捏）に  
 ありても近チカきが如ゴトく思オモひて行ユかば、上ウヘなる天アマツカミ帝ミカドにも  
 祐護ユゴせられんぞ、汝等ナンテラ」と勅トトありき。（この鐵車の勅は、卷十なる速  
別額台の篋兒乞惕を窮むる處  
に書くべきものなり。親征録も喇失惕の史も、速別額台の鐵車の遠征をこの年よ  
り十二年後なる丁丑の年に載せたり。卷十なる速別額台の遠征は、年を掲げざれ



ども、即ち丁丑の役なるべし、蒙古人は、年を繰るに、十二支の象のみを用ひて、十千を用ひざり、故に、年紀誤り易し。秘史の作者は、この勅を牛の年と記憶したるに由り、偶誤りて十二年前の牛の年、即ち太祖（即位の前年なる乙丑の年に載せたるなり。）

從士に捕はれたる札木合

〔成吉思合罕は〕乃蠻、篋兒乞惕を窮め畢へたれば、札木合は、乃蠻と居りてそこに部眾を取られたれば、但五人の從者ある賊となりて、儻魯山（元史地理志の唐麓嶺、阿勒泰山の湯努山）の上に上りて、獐羊を殺して焼きて喫ふ時、そこに札木合は、從者どもに言ひき、「誰が子どもぞ、この日獐羊を殺してかく喫へる」と云ひき。その獐羊の肉を喫ひ居る間に、五人の從者は、札木合を手に掛けて捕へて、成吉思合罕の處に伴れ來ぬ。札木合は、從者どもに捕

不忠の臣の誅せられ

へて來られて、合罕安荅に白さく「黒き老鴉は、黒鴨眞鴨を捕へたり。下郎の奴は、君に手を致したり。大君なる我が安荅は、いかにぞ差らん。青き忽刺都（鳥の類の名）は、孛兒臣莎那（鴨の名）を捕ふると爲れり。奴なる家人は、本の主を圍みて襲ひて捕ふると爲れり。賢き我が安荅は、いかにぞ差らん」と言へば、札木合のその言につき、成吉思合罕勅あるには「正主の君に手を致せる人をいかにぞ存らせられん。かゝる人は、誰にか伴とならん。正主の君に手を致せる人をば、その族に至るまで斬らしめよ」と勅ありき。すぐ札木合の面前にて、彼を手に掛けた



舊友を憐む  
成吉思汗の  
寛厚

る人どもを斬らゝめて與へたり。成吉思合罕は、札木合  
 に言へとて言はく「今我等二人合へり。伴とならん。片方  
 の轅となり合ひて過ぎたれば、別になり離れんと思へ  
 り。汝今一つに合ひ住みて忘れたるを心附け合ひて、睡  
 りたるを覺し合ひて住まん。別れて外に行けども、福あ  
 り吉事ある我が安苔なりき。實に死合ふ(戰)日には、心  
 心を痛めたりき。汝外に別れて行けども、殺し合ふ日  
 には、肺心を痛めたりき。汝いつと云へば、客喇亦惕の  
 民と合刺合勒只惕の沙漠に戦へる時、王罕なる父に言  
 へる言を告げておこせたるは、汝の恩なるぞ。又乃蠻

札木合の慚  
悔

の民を言にて死なゝめ、口にて殺して恐れさせたる  
 を比較せよと云ひて、報告を汝のおこせたるは、恩と  
 なりゝぞ」と

言へば、札木合言はく「先の日小き時に、豁兒豁納黑主  
 不見に罕安苔と共に安苔と云ひ合へる時、消化れざる  
 食物を食ひ合ひて、忘れざる言を言ひ合ひて、衾を  
 分け合ひて住まれゝぞ。傍の人に唆されて、横の人に  
 戳かれて、離れ畢へて、緊要ある言を言ひ合へり(言ひ合へ  
 るを守ら  
 ず)とて、黒き面皮を剥かれたるより、近づきかね、罕なる  
 安苔を暖かき顔を見る能はずして行きたるぞ、我忘ら



思の外に潔  
き姦雄の末  
路

れざる言を言ひ合へりとして、赤き面皮を剝かれたるよ  
兀格思 兀古列勒都 忽刺安 兀卜赤克迭  
 り、長き心ある安苔を誠の顔を見る能はずして行き  
兀兒亮 兀年  
 たるぞ、我今我が罕安苔恩賜して、我を伴とせんと云  
 ひき伴となるべき時に、伴とならざりき、我今安苔は、  
 圓なる國を平げたり。外國どもを併せたり、爾罕の位  
脱歇里該 合哩 合亮惕合  
 は、爾に定れり。天下今定になれる時、伴となりて何の  
 助とならん、我却て安苔の黒き夜の夢に入らん、我明き  
 日に爾の心を苦めん、我爾の領の蝨、爾の底襟の刺と  
札合 札興温  
 ならん、我寛厚なる嫗あるなりき、我安苔より攜れんと  
阿魯昔  
 思へる頃に病になられたりき、我今この生涯に、安苔

命を知り命  
に安トたる  
札木合の善  
言

我二人の關係に由りて出づる日より没る日に至るま  
 で我が名は到りたるぞ。安苔は、賢明なる母あり、生得  
 俊傑に生れて技能ある弟どもあり、勇猛なる侍に七十  
 三の驕馬にて侍はるゝこととなりて、「我は」安苔に勝  
 たれたるぞ。我は、母父より幼くて後れて、弟ども無く、  
 我が妻は話好き(蒙) 朶抹黒赤(どもりくち吃口には非ず、我等の幹沙別  
 哩周詩の謂はゆる婦有長舌維厲之階)  
 にて、頼なき従者あり、かるが故に上帝より命ある安苔  
 に勝たれたるぞ。安苔恩賜せば、我を疾く逝なせば、安苔  
 心を安めんぞ、爾安苔恩賜して殺さるむるには、血を  
 出さず殺さるめよ。(血を出さず殺すとは、首を斬らず、袋に入れて絞め  
 殺すことを云ふ。絞めらるゝは斬らるゝよりも苦しか



情あり義あり禮ある處分

るべけれども、首の離れざるを幸とするなり。蒙古の舊俗に死にて臥さば、  
 皇族の罪ある者を殺すには多くこの特典を用ひたり。死にて臥さば、  
 我が死骸は高き地にて永く遠く爾の子孫の子孫に  
 至るまで護りて與へん。幸はふる「鬼」となるぞ。我。根原の  
 別なる生殖あるものなりき。我。(札答喇氏は、字端察兒の裔に非ず、  
 孛兒只斤氏と異なるが故に、根原  
 異なりと) 許多の生殖ある安答の威靈に壓されたるぞ。我。  
 我が言へる言を忘れず、晩く早く想ひて語り合へ。今我  
 を疾くせよ」と言へば、これに依り彼の言に成吉思合  
 罕言へらく「我が安答は、外に行きても、我等を口一杯  
 に謂ひ(譏)て命に害を彼の考へたることを聞かざり  
 ぞ。學ばるゝ人なりき。「然れども」彼肯かず(明譯)是可有

學的人、他不肯活、待教他死。死なゝめんと云へば。卦  
 に入らず。(已むを得ず、殺さんとして占トすれば、殺すべしと云ふこと、卦に現れ  
 ず、蒙韃備録に凡占ト、吉凶進退殺伐、毎用羊骨扇以鐵椎火椎之、  
 看其兆、圻以決大事、類龜ト也。と云ひ、黑韃事略に其占筮、則灼羊之枚、子骨驗其  
 文理之逆順、而辨其吉凶、天棄天子、一決於此、信之甚篤、謂之燒琵琶、事無纖粟、必  
 占、占不再四、不已と云へるは、蒙古のト法なり、耶律楚材の傳に) 理由なく命  
 も「帝每征討、必命楚材ト、帝亦自灼羊胛以相符應」とあり。) 理由なく命  
 に害を爲さば善からじ。重き道理ある人なり。この必  
 ず(このは理由に、必ず  
 は言へに掛かる。) 彼の「殺さるべき」理由を言へ。「前に擲  
 只答兒馬刺、台察兒二人の馬羣を奪ひ合ひたる故に、札  
 木合安答、汝は、直に敵對して來て、答蘭巴勒主惕に戦ひ  
 て、者咧捏の隘に追ひ入れて、我をそこに怕れゝめざり  
 しか、汝。今伴とならんと云へば、肯かず、汝の命を愛め



ば、從はざりき、汝」と言へ。今汝の言により、血を出さず  
 逝なせん」と言へ」と云ひて、「血を出さず逝なせて、彼の  
 骨を面前に勿棄てそ。善きに取れ」と勅ありき。札木合  
 をそこに逝なせて、彼の骨を取らゝめたり(明仍以禮  
 厚葬了)。

幹難河の源  
 なる二たび  
 の即位  
 九脚の白纛

かく毛氈の帳裙ある國民を平げて、虎の年(我が土御門  
 天皇建永元  
 年丙寅、宋の寧宗開禧二年、金の泰和六  
 年、西紀一二〇六年、太祖四十五歳の時)、幹難河の源に聚會して、九  
 つの脚ある白き纛を立てて、(親征錄元史みな九旂の白旗とあり、  
 喇失惕を洪鈞の重譯したるにも九  
 脚の白旗とあれども、洪鈞は之を打消して、白き馬の尾九つを旂とせるにて、旗  
 に非すと云へり、脚とは、白旂の垂れたるを云へるにて、旂に非ず、蒙古源流に、九人  
 の烏爾魯克即ち九猛將の稱ありて、親軍九隊の帥を云へり、訶渥兒斯は、これに依り  
 て「大なる纛を建て、白旂九つを重ねて繋けて、九烏爾魯克を表したるなり」と云へ

二次即位の  
 考證

り、されども九烏爾魯克の稱は、他の書に更に見えざれば、信難し。阿不勒嘎自の  
 書に「蒙古は九の數を尙ぶが故に、贈物にも九を用ふ。その制は、突兒克より出で  
 たり」とあれば、白旂の九つなるも、た  
 だめでたき數を用ひたるなるべし。**成吉思合罕に罕の號をそこ  
 に奉れり。**(これにて成吉思汗は、二たび合罕の位に陞れり。元史本紀に「元年丙  
 臣、其上尊號曰成吉思皇帝」とあり。錢大昕の秘史の跋に「當太祖幼時、勢甚微弱、  
 賴王罕、札木合二人、假以徒隸、羽翼漸成、始立名號。紀但云「丙寅歲、羣臣上尊號曰  
 成吉思皇帝、不知成吉思罕之號、蓋已久矣。其後遣使請責案、彈火察兒等、謂昔者吾  
 國無主、汝等推戴吾爲之主者、正指此事也。先稱合罕者、一部之主、後稱皇帝、乃爲  
 羣部之主、豈可略稱罕一節而不書乎」と云へるは、洵に卓見なり。但錢氏は、前後の  
 名號を合罕と皇帝とに分けたれども、この丙寅の即位も皇帝と稱したるにはあ  
 らで、前と同トク合罕と云へるなり。親征錄元史のみならず、宋人の記録などにも、  
 成吉思皇帝とあるは、當時蒙古に仕へたる漢臣等の漢譯したるに本づきたるに  
 て、蒙古にてしか稱したるには非ず。先後の合罕の異なる所は、先には蒙古部の主  
 となり、今は迭列該(天下)の主、即ち眞の合木渾合罕となるなり。すべて創業開國の  
 君にして二たび即位の禮を行へるは、珍き事に非ず。晉の代の羣雄には、初に天  
 王の位に即き、後に皇帝の位に即きたる人甚だ多し。後魏の道武帝は初に魏王と  
 稱し、登國と建元し、後に皇帝となれり。遼の太祖は、初に契丹可汗の位を嗣ぎ、後に  
 天皇王となりて神冊と建元せり。清の太祖は、初に金國汗の位に即き、天命と建元



太祖建元の追定

し、太宗その位を継ぎ、天聰と改元し、後に大清國皇帝となりて、崇徳と改元せり。これらは、みな初に小國の主となり、後に大國の主となれるにて、成吉思汗の二たびの即位もその類なり、また初の即位は、合罕とは稱すれども、金朝に貢賦を納め、金の封爵を榮とし、小國の主なることを自らも認め居れども、後の即位に至りては、天下の主となれる積りなれば、元史にこの寅の年を太祖の元年と立てたるは、至當の事なり。されども建元と云ふ事は、蒙古人の知れることに非ず。この寅の年より後も、秘史と喇失惕の史とは、十二支の象を用ひ、親征録は、甲子を用ひて、元年二年など云へることなし。黑韃事略に其正朔、昔用十二支辰之象、今用六甲輪流、皆漢人契丹女真教之。若韃之本俗、初不理會得、只是草青、則爲一年、新月初生、則爲一月、人間其庚甲若干、則倒指而數幾青草」と云へり。彭大雅のこの書を著せるは、太宗の時なるに、その言猶かくの如くなれば、太祖の朝に建元の事なきこと知るべく、この年を太祖の元年と名づけたるは、後の世に、大方は世祖の朝に、追定したる事なるべし。また蒙古源流に「戊戌年、特穆津年十七歲、布爾德哈屯甫十三歲、遂爾匹配、特穆津年至二十八歲、次己酉、于克魯倫河北郊、即汗位、稱索多博克達青吉斯汗」とあり。孛兒帖を娶れる年と初の即位の年とにつきては、源流の外に據るべきものなし。孛兒帖の十三歲は、秘史に「帖木真より一歲大きく」とあるに違へれども、帖木真十七歲の初婚は、蒙古の早婚の風俗にしては事實なるべし。克魯倫河の北郊とは、不兒罕嶽の前なる桑古兒小河の舊營を云へるなれば、この即位は、初の即位にして、幹難河の源の大會に非ざること論なし。源流の叙事は、荒誕の説に富みて、その紀年も誤り多けれども、この二事だけは、幸に秘史の闕漏を補ふに足れ

太祖の初婚初立の年

木合黎の王號

り。然るを洪鈞の「源流固爲囁語、秘史亦屬妄談」と云へるは、何たる放言ぞや。木合黎に國王の號をそこに又賜ひたり。(國號無の王爵なり。元史木華黎の傳に「丁丑八月、詔封太師國王、承制行事、贈誓券黃金印、曰子孫傳國、世世不絕」)

者別の西征

とあり。丁丑は、太祖十二年なり。親征録蒙古集史は、皆十三年戊寅の事とすれば、修正秘史に然あり。にて、原本秘史の作者は、こゝにても虎の年を十二年前のに誤れるに似たり。然れども元史百官志に「太祖十二年、以國王置太師一員」とあるは、國王は前よりありて、それをその年に太師にいたるが如くも聞ゆれば、修正秘史は却て誤りて十二年後の虎の年といたるも知るべからず。者別を、乃蠻の古出魯克罕を追はしめ、そこに又出征せしめたり。忙豁勒の國を定め畢

佐命の功臣

へて、成吉思合罕勅あるには「國を立て合ひ行ひ合ひたる者(諸共に國を立て事)には、千を千として、千戸の官人を

蒙力克

任して、恩賜の言を言はん」と勅ありき。千戸の官人を任し名させらるは、蒙力克額赤格(見裕壇氏、察喇合額不干の子、卷一より見えたり。親征録には蔑力也赤可とあり)



字幹兒出

り元史忠義傳には伯八の祖父) 字幹兒出(阿魯剌惕氏、納忽伯顔の子、四傑の一、明里也赤哥、晃合丹氏とあり)

木合黎

爾朮、阿兒剌氏、納忽阿兒蘭の子とあり、蒙古) 木合黎國王(札剌亦兒氏、帖列格赤源流には阿爾拉特、博郭爾濟諾顔とあり)

豁兒赤

子、四傑の一人、卷四より見えたり、元史本傳に木華黎、札剌亦兒氏) 豁兒赤(即ち豁兒赤、孔溫窟阿の子とあり、蒙古源流に札拉伊爾の摩和賚とあり)

亦魯該

不干、巴阿喇氏、卷三) 亦魯該(功臣の第五に列する程なれば、名高き人なるべきに、三より見えたり)

主兒扯歹

兒は功勞多き人なるに、功臣の中に見えざるも訝し、卷十に阿兒孩合撒兒を阿兒孩とのみ書き、親征錄元史本紀にも阿里海とあるを見れば、この亦魯該は、阿兒孩の誤りにあらずやと思はる、蒙古字にては、アとイと形混らはしく、カイとガイとも誤り易し)

忽難

赤台、兀魯兀台氏とあり) 忽難(格你格思氏、卷三) 忽必來(巴魯剌思氏、四狗の一人、親征錄元史太祖紀に)

者勒篋

者勒篋(兀魯罕氏、札兒赤兀歹額不堅の子、四狗の一人、卷二よりは虎必來とあり)

秃格

には兀良罕、哲里馬、蒙古源流に) 秃格(即ち統格、札剌亦兒氏、帖列格赤伯顔の孫、赤は烏梁庫特の濟勒墨とあり)

迭該

り) 迭該(別速惕氏、卷三) 脫纒(即ち脫命扯兒必、晃豁壇氏、蒙力克額赤格の子、卷七

脱纒

赤哥の子とあり) 汪古兒(即ち翁古兒、乞顔氏、巴兒壇、巴阿秃兒の孫、蒙格秃乞顔

汪古兒

出勒格台(即ち赤勒古台、速勒都思) 孛囉忽勒(即ち孛囉兀勒、宣懿太后の養子、

孛囉忽勒

元史本傳に、博爾忽、許兀慎氏とあり、錢大昕の考異に、元明善の淇陽忠武王の碑には許慎氏に作り、字朮魯神の河南淮北、蒙古軍都萬戶府の増修公廡の碑には旭申氏に作り、と云ひ、輟耕錄の蒙古七十二氏の中には、忽神と書けり、その名も、太祖) 失

失吉忽秃忽

吉忽秃忽(即ち失乞刊忽都忽、塔塔兒の人、宣懿太后の養子、卷四より見えたり)

古出

古出(即ち曲出、篋兒乞惕の人、宣懿太后) 闊闊出(別速惕氏、宣懿太后の養子) 豁兒

豁兒豁孫

豁孫(卷十に豁兒合孫とあり、元史撒吉思の) 許孫(元史列傳に哈散納、怯烈亦氏

忽亦勒答兒

人あり、その文は卷六の注に引けり、許孫は) 忽亦勒答兒(即ち忽余勒答兒、忙

失魯孩

え、元史本傳に畏答兒、忙兀氏、畏翼の弟とあり、食貨志に、慍里答兒薛禪ともあり、合刺合勒只惕の戦に傷を負ひて已に死にたれば、このたびの任命は、贈官にして、卷九なる勅語に依れば、千戸の職は) 失魯孩(元史麥里の傳に、麥里、徹兀臺氏、祖雪里、その子孫に襲がせたるなり)



者台

水以功授千戸とある雪里堅（即ち哲台忙忽惕氏卷三より見えたり卷三はこの失魯孩の轉なるべし）者台（即ち哲台忙忽惕氏卷三より見えたり卷三はこの帖木眞即位の條に哲台多豁勒忽徹兒必兄弟二人箭筒を帶べりとあるは、哲台徹兒必多豁勒忽徹兒必二人と云ふべきを略きたるなり、その後文に多歹扯兒必は奴婢を統ぶとあるは、別なる人の如く聞ゆれども、卷七なる扯兒必六人任命の處に多歹扯兒必多豁勒忽扯兒必と連）塔孩（即ち塔乞速勒都思氏赤勒古台の弟、卷三より見え、元史阿塔海の傳に「阿塔海、遜都思人祖塔海拔都兒、驍勇善戰、嘗從太祖同飲黑河水、以功爲千戸」とあり）察合

塔孩

察合安豁阿

安豁阿（即ち捏兀歹察合安兀注、捏兀思氏又赤那思氏、卷三より見え、蒼蘭巴勒主惕の戰に死にたり、これも贈官にして、卷八なる勅語に依れば、その子納囉

阿刺黑

阿刺黑（你出古惕巴阿囉氏、失兒古額禿額不堅の子、卷五に見脱幹哩兒にその職を襲がせたるなり）阿刺黑（元史伯顔の傳に「伯顔蒙古八隣部人、曾祖述律哥

鎖兒罕失喇

鎖兒罕失喇（速勒都思氏、四傑の一人なる赤老温の父、卷二より見え、蒙古源流

不魯罕

不魯罕（元史忽蘇勒都斯の托爾干沙喇とあり、九十五の千戸の中に赤老温の）不魯罕（林失の

合喇察兒

合喇察兒（忽林失、八魯刺解氏、曾祖不魯罕罕刺、事太祖、從平諸國、充八魯刺

闊可擲思速亦客禿

闊可擲思（巴嚕刺思氏、速忽薛禪の子、卷三にも見え、卷十にも見ゆ）闊可擲思（即ち闊闊擲思、巴阿囉氏、卷三に見

乃牙阿

乃牙阿（即ち納牙阿、你出古惕巴阿囉氏、失兒

冢率古出古兒

冢率（即ち種索、卷三に見えたり、卷三の譯文）古出古兒（即ち窟出古

巴刺幹囉納兒台

巴刺幹囉納（迭該の弟、卷三に見えたり、卷九の勅語に依れば、古出古兒は）巴刺幹囉納（札蒼喇惕の木勒合勒忽と二人にて一つの千戸となれるなり）

蒼亦兒

蒼亦兒（元注思篋兒乞惕の蒼亦兒兀孫、

木格

木格（卷十に蒙客とあり、元

不只兒

不只兒（元史に布智兒と書きて、短き

兒傑拔都の子にして、父子ともに太祖に事ふと云へり、脱脫里台も塔塔兒なるべし、憲宗紀に憲宗即位の初「以牙刺瓦赤不只兒某某等充燕京等處行尙書省事」とあり



蒙古兀兒  
朶羅阿歹  
孛堅  
忽都思  
馬喇勒  
者卜客  
余嚕罕  
闊闊  
者別  
兀都台

る不兒兒は、即ちこの人にして、本傳には「憲宗以布智兒爲大都行天下諸路也可  
札魯忽赤、印造寶鈔」とあり。大都は即燕京、札魯忽赤は斷事官なり。世祖紀に「憲宗命  
斷事官牙老瓦赤與不兒兒等、總天下財賦于燕」とありて、不兒兒等の濫刑を世祖  
の責めたることを記せり。昔里鈴部、布魯海牙、月乃合三人の傳には皆卜兒兒と書  
り。蒙古兀兒（卷十に蒙客）朶羅阿歹（外には）孛堅（元史忽都の傳に忽都、  
事太祖備宿衛云云とある字罕なるべ）忽都思（巴嚕刺思氏、忽必來の弟、卷三に  
兀羅帶氏は、輟耕錄に兀羅歹とあり。）馬喇勒（外には）者卜客（札刺亦兒氏、帖列格禿伯顏の子、古溫兀阿の弟、卷四  
に與へたりと云ひ、親征錄に健河の會の前に、哈撒兒その麾下哲不）余嚕罕（元  
史に  
奧魯赤の傳に祖朔魯罕とある人か、朔魯罕は、札刺亦兒の人にて、父）闊闊（元史に  
豁火察と共に太祖に事へ、朔魯罕は、後に野狐嶺の戰に戰死せり。）者別（別速惕  
惕より降附せる闊闊の傳あれども、世祖の時卒して年僅に四十とあれば、この闊  
闊には非ず。闊闊不花の不花を略きたるにもあるまじく、元史に「闊闊不花者、按攤脫  
脫里氏、爲人魁岸有膂力、以善射知名」とありて、太祖太宗に事へ）兀都台  
の一人、卷四より見えたり。蒙古源流には伊蘇特の哲伯諾顏とあり。元史  
には紀傳處處にその名見ゆれども、專傳なく、洪鈞の哲別補傳甚だ佳し。）

巴刺扯兒必  
客帖  
速別額台  
蒙可哈勒札  
忽兒察忽思  
苟吉  
巴歹  
乞失里黑  
客台  
察兀兒孩  
翁吉闌  
脫歡

（外には）巴刺扯兒必（即札刺亦兒の巴刺、薛扯朶抹黑の子、阿兒孩合撒兒の弟、  
刺な）客帖（卷十に）速別額台（兀嚙罕氏、四狗の一人、卷三より見えたり。元史速  
忽魯渾の弟とあり。蒙古源流に）蒙可哈勒札（忙忽惕氏、忽亦勒答兒の子なり。  
は、珠爾濟特の蘇伯格特依とあり。）蒙可哈勒札（元史畏答兒の傳に、其子忙哥  
とあり。哈勒札は、一種の稱號にして、元史忽林失の傳なる不魯罕罕割の罕割に同  
ト。親征錄の忙兀部、木哥漢札、太宗紀の蒙古漢札、別喇津の譯せる木勒格哈兒札は、み  
な蒙可哈勒札）忽兒察忽思（外には）苟吉（卷十二に「官人掌吉」と云ふ人あり。  
の異文なり。）巴歹（卷一にその名見え、その事は卷五に見えたり。親征錄元史本紀には把帶、木  
は皆只同僚とせり。巴歹）乞失里黑（斡囉納兒氏、卷一に巴歹と共にその名見え、  
の傳に啓昔禮、長春の西游記に吉息利答刺汗とあり。）客台（兀嚙兀惕氏、主兒扯歹の  
に郡王迄忒、黑韃事略に紇忒郡王とあり。）察兀兒孩（即ち察兀兒罕、兀嚙罕氏、札  
篋の弟、卷三に見え、卷六には察忽兒罕、親征錄には抄兒寒とあり、卷十にも見ゆ。）翁吉闌（外には）脫歡（四傑の一人  
征錄には抄兒寒とあり、卷十にも見ゆ。）



帖木兒

篋格秃

合答安

抹囉合

朶哩不合

亦都合歹

失喇忽勒

倒溫  
塔馬赤  
合兀囉  
阿勒赤

勒の子にはあらずや。元史に「博爾忽、許兀慎氏、事太祖、爲第一千戶、歿於敵、子脫歡、襲職」とありて、脱歡の千戶となれるは、字囉忽勒の戰死したる後の事なるが如く、なれども、博爾忽の傳は、疏略の最甚きものなれば、脱歡を襲職と書きたるも誤りなくとは定むべからず。

帖木兒(多遜の史に、庫余克汗(定宗)の

崩したるのち、阿勒塔克山に諸王の聚會したる時、皇后兀古勒該米失より喀喇闊魯木の總管たりし帖木兒を遣りて會議に預らしめたりとあるは、この帖木兒なるべし。

篋格秃(卷十二に、蒙格秃とある人ならん。元史別見怯不花の傳に「曾祖怯怯達へ」)合答安(即ち合答安、朶哩合、塔兒忽惕氏、)抹囉合(外には)朶哩不合(卷十に亦多)失

合(卷十に朶兒別惕の朶兒伯多黑申、元史に朶魯伯)亦都合歹(忽歹とあり)失

喇忽勒(客喇亦惕氏、元史也先不花の傳に「也先不花、蒙古怯烈氏、祖曰失刺斡忽勒、兄

自結納、後兄弟四人、皆率部屬來歸。太祖以舊好遇之、特異他族、命爲必闌赤長、朝會燕饗、使居上列」とあり、失刺斡忽勒は、即ちこの失喇忽勒なり、功臣の中に怯烈哥

の見えざるは、早く倒溫、塔馬赤、合兀囉(この三人も)阿勒赤(元史速不

死にたるなるべし。)倒溫、塔馬赤、合兀囉(外に見えず)阿勒赤(台の傳

脱撒合  
統灰歹

脱不合  
阿只乃

秃亦迭格兒  
薛潮兀兒

者迭兒

幹刺兒駙馬

輕吉牙歹  
不合駙馬

り) 脱撒合(桑昆の子秃撒合と音近)統灰歹(これも分らず、元史列傳に「鎮

祖、同飲班朱尼河水、與諸王百官大會兀難河、上太祖尊號、曰成吉思皇帝」とあれ

ば、鎮海は功臣に列すべき人なるに、見えず。この人は、本田姓なりとの説もあり

て、長春の西游記に田鎮海と云へり、これに依りて強ひて考ふるに、本統灰歹と) 脱

不合(客喇亦惕氏、失喇忽勒の兄なり、前)阿只乃(元史列傳の按竺邇と音似たれ

世世雲中に居り、父黜公は金の羣牧使となり、辛未の歲、その牧せる馬を驅りて太

祖に歸たりとありて、辛未は、この年より五年後なれば、この阿只乃に非ず。太祖

に従ひ、黒河の水を飲み、元史に傳ある幹) 秃亦迭格兒(これも)薛潮兀兒

の初に、卯温都兒山の前を過ぐる王罕の軍を見出たる) 幹刺兒古喇堅(古

堅は、駙馬なり、この) 輕吉牙歹(幹勒忽訥兀惕氏、)不合古喇堅(札刺亦兒氏



忽哩勒

每隨侍焉」とあり。抹歌は、即ちこの不合なり。元史木華黎の傳には、帶孫ありて不合なく、不合の駙馬となれるを見れば、元明善の東平忠憲王の碑に「親連天家、世不婚姻」と云へるは、誤れり。札刺亦兒は、字兒只斤の同族に非ず。忽哩勒（斡難河の戰その皇室と婚したる人少きは、他に故ある事なるべし。）

阿失黑駙馬

の一將、親征録に忽憐、喇失惕の史に忽哩勒、巴哈都兒と云ひて、戰敗れて乃蠻に奔れる人と名同トけれども、蒙古の功臣に列することはあるまじ。憲宗の元年に前の阿勒赤即ち阿里出等と同トく、諸王を誘ひて亂を爲せりとして誅せられたる曲憐は、この忽哩勒なるべし。阿失黑古咧堅（後文に塔

合歹駙馬

該阿失黒の管する阿答兒斤云云とあれば、阿合歹古咧堅（元史公主表延安公失黒は、速勒都思の塔該と同族なるべし。）

公主、適哈答駙馬」とある。哈答なるべし。親征録癸酉西南征の役に「怯台、哈台二將圍中都」とあり。その怯台は、兀魯兀惕の客台にして、哈台はこの合歹なり。また本書卷十

二太宗の時に、合歹は、宿衛の番直の官人八人の中に加はれり。また多遜の史に、庫余克汗（定宗）疾ありて、政事は大臣鎮海喀答克二人に委ねたりしが、忙古汗（憲宗）即位の初、諸王叛を謀りて、黨與の誅せられし時、二人も殺されたりとありて、憲宗紀にも、諸王を亂に誘へりとして誅せられし諸臣の内に合答あり。合答は、即ち哈答に

赤古駙馬

て、又即ち合歹なるべし。火魯公主は、公主表に誰の女とも云はず。食貨志に「大雷公主」と云ふ人あり。錢大昕の考異に「大當作火、即火魯也」と云へり。赤古古咧堅（親征録赤渠駙馬、元史太祖紀駙馬赤駒、太宗紀駙馬赤苦、公主表鞏國公主位の處に「禿滿倫公主、適赤窟駙馬」とありて、何帝の女とも何姓の人とも

云はざれども、喇失惕額丁の史には、太祖の第四の女禿馬命は、翁吉喇惕の阿勒赤那顔の子赤古古兒干に嫁きたりと云へり。阿勒赤は、德薛禪の子、光獻皇后の弟、元史に國舅按陳那顔と云へる人にして、赤古は、按陳の長子、幹陳納陳等の兄なるべし。又蒙韃備録に「三公主曰阿五、嫁尙書令國舅之子」と云ひて、その尙書令のことは、

阿勒赤駙馬

「按赤那邪、見封尙書令、爲成吉思正后之弟」とあれば、太祖の女にして阿勒赤の子に嫁きたるものあるを證すべし。洪鈞曰く「特薛禪傳、但言按陳子幹陳、尙睿宗女、必是史官失載、阿五異名無考、或備錄有訛字」と云へり。阿勒赤古咧堅なる三つの千戸の翁吉喇惕氏（親征録に弘吉刺部安赤那顔三千騎、元史太宗紀に按赤那顔、成宗紀元禪の傳に曰く「子曰按陳、從太祖征伐、凡三十二戰云云、歲丁亥、賜號國舅、按陳那顔云云、丁酉、賜錢二十萬緡、有旨、弘吉刺氏生女、世以爲后、生男、世尙公主、每歲四時、孟月、聽讀所賜旨、世世不絶」と云ひ、公主表魯國公主位も「魯國大長公主也、速不花、睿宗女也、適皇國舅魯忠武王、按陳那顔子、幹陳駙馬、魯國公主薛只干、太祖孫女、適幹陳弟、納陳駙馬」より始まりて、阿勒赤の皇女を娶れることは、元史に見えず。されども多遜の史に「阿赤の本の名は答兒吉古兒干なりしが、人は皆阿赤那顔と云ふ」とありて、阿赤は即ち阿勒赤、古兒干は即ち古咧堅なれば、國舅の號を賜はれる前は、古咧堅と呼ばれて、太祖の駙馬なりしを、本傳も公主表も書き漏せるなり。）

不禿駙馬

不禿古咧堅なる二の千戸の亦乞咧思氏（即ち不圖、卷三より見え濁水の誓に與り、親



阿刺忽失的吉惕忽哩駙馬

征錄に亦乞列部孛徒駙馬二千騎、黑韃事略に撥都駙馬とあり。元史本傳に「孛徒、亦乞列思氏善騎射、太祖妻以皇妹帖木倫、皇妹薨、復妻以皇女火臣別吉」と云ひ、公主表昌國公主位の處に「昌國大長公主帖木倫、烈祖女、適昌忠武王孛徒、主薨、繼室以太祖女昌國大長公主火臣別吉」と云へり。帖木倫は、卷一卷二にも喇失惕の史にもみな帖木倫とあり。火臣別吉は、卷五に豁眞別乞、親征錄に火阿眞伯姬、喇失惕の史に長女火眞別吉とあり。蒙韃備錄に「成吉思皇帝女七人、長公主曰阿眞驚拽、今嫁豹突駙馬」とある。阿眞驚拽は即ち豁眞別乞、豹突は即ち不禿なり。

汪古惕の阿刺忽失的吉惕忽哩古

喇堅なる五の千戸の汪古惕氏（この名は、卷六より見えて、今始めて古喇堅と稱せり。元史本傳に曰く）既平乃蠻、從下中原、復爲嚮導、南出界垣。太祖置阿刺兀思、別吉忽里、歸鎮本部、爲其部眾、昔之異議者所殺、長子不顏昔班併死之。其妻阿里黑、攜幼子孛要合、與姪鎮國逃難、夜遁至界垣、告守者、縋城以登、因避地雲中。太祖既定雲中、購求得之、賜與甚厚。以其子孛要合尙幼、封其姪鎮國爲北平王。鎮國薨、子聶古台襲爵、尙睿宗女獨木干公主、略地江淮、薨于軍。孛要合幼、從攻西域、還封北平王。尙阿刺海別吉公主、公主明睿、有智略、車駕征伐、四出、嘗使留守軍國大政、諮稟而後行、師出無內顧之憂。公主之力居多」と云ひ、公主表趙國公主位の初に「趙國大長公主阿刺海別吉、太祖女、適趙武毅王孛要合」とあり。然るに蒙韃備錄には「二公主曰阿里黑、百因、俗曰必姬夫人、曾嫁金國亡臣白四部、死、寡居、今領白韃韃國事、日逐看經、有婦女數千人、事之、征伐、斬殺、皆自己出」と云ひ、多遜の史には「成吉思汗、第三の女阿刺海別吉を

阿刺合別乞再醮の説

阿刺合別乞三醮の説

阿刺忽失的斤忽哩に妻せんとしたるを、年老いたりとして辭みて、兄の子鎮古に妻せられんことを願ひ、阿刺海は鎮古に嫁ぎて、訥古台を生み、訥古台は拖雷の女を娶れり」と云へり。洪鈞思へらく「據孟珙言、則元史所謂留守、乃是掌汪古部事、非太祖本部。太祖西征、幹赤斤居守、元秘史西游記可證、別無阿刺海居守之語。作此傳者誤會也。史言孛要合幼、從征西域、歸乃封王尙主、而孟珙之使蒙古、作蒙韃備錄、在辛巳歲、正太祖在西域、追札闌丁之時、不應即云公主夫死、寡居、今案西域書之鎮古、即鎮國之訛、訥古台、即鎮國子聶古台、尙睿宗女、語同元史。反覆推求、必是公主先適鎮國、夫死、遂自領汪古部事、繼而夫弟從弟孛要合、自西域還、復尙公主、鎮國子聶古台爲公主出、而孛要合之三子、則公主進、姬妾以生。西域書但言其前、元史但言其後、而蒙達備錄、則適當其中、蒙古不諱再醮、理宜然也」として、三書の異なる處を巧に解釋せり。又黑韃事略に蒙古の十七頭項の名を擧げて、その一人なる白厮馬の原注に「一名白厮卜、即白韃、僞太子、忒沒眞、僞公主阿刺罕之前夫」とあり。洪鈞はこの文を引ききて、公主再醮の確證とす。白厮卜、即白四部、亦即史之鎮國、何以二名、不得其考」と云へり。洪鈞又曰く「西域書謂太祖欲以女適阿刺兀思、別吉忽里、辭以年老、請以兄子訂婚、阿刺兀思之兄、先爲汪古部主、汪古部爲金守、長城邊界、兄死、弟嗣、而金主仍禮遇其兄子、蒙達備錄所以云金國亡臣也。汪古之義、爲邊牆、云是契丹語、蓋即金語。史言金源氏、暨山爲界、阿刺兀思以一軍守其衝要、語同。西域書紀阿刺兀思死難之故、與元史異、語繁不載。又云阿刺海別吉年歲、在窩闊台拖雷之間、則是太宗妹睿宗姊」と云へり。洪鈞の此等の説は、考證甚だ精にして、確なり。余これに依りて、猶考ふるに、阿刺海別吉は、秘史卷十なる阿刺合別乞にして、前に鎮國



九十五の千戸

に嫁ぎたるのみならず、猶その前に阿刺忽失に嫁ぎたるべく、多遜は、阿刺忽失の辭みたることを云へども、辭みたらんには古喇堅即ち駙馬と呼ぶべき筈なく、卷十に阿刺合別乞を汪古惕に與へたりとあるは、阿刺忽失に與へたるなり。蒙韃備録に阿里黑百因とあるは、即ち阿刺合別乞の訛なれば、元史に阿刺兀思の妻阿里黒と云へるは、即ちこの阿里黒、又即ち阿刺合なり。蒙古は再醮三醮を諱まざるのみならず、父死してその後母を妻とす、兄死してその嫂を妻とするは、匈奴突厥を初として、塞北の俗皆然り。李要合は、蓋阿刺合の生めるには、あらで、前妻の子なるべし。阿刺忽失の殺されたる時は、李要合なほ幼かりし故に、阿刺合は夫の姪なる鎮國に嫁ぎ、鎮國死して後に我が子の如き李要合を夫とすたるなり。蒙古源流に滿都古勒汗の寡婦滿都該徹辰哈屯は、節を守りて他族に嫁がず、夫の從曾孫(姪の孫)なる達延汗を育ててその哈屯となれる奇談あり。漢人ならば、瀆倫と云ふべきことを蒙古にては貞烈とするほどなれば、阿刺合の三醮などは珍しきことに非ず。然るに、閔復の駙馬高唐王闊里吉思(阿刺忽失の曾孫)の碑に至りては、曾祖母と祖母と同一人なりとは直書しかねて、阿刺忽失の妻をば曾祖妣阿里黒、李要合の妻をば祖妣皇曾祖妣阿刺海別吉と書きて、別人の如くし、阿里黒は何姓とも誰の女とも云はず、只まぎらかせり。元史の本傳は、全くこの碑文に本づける故に、筆執れる人も、阿里黒の即ち阿刺海なる) 林の民より外なる忙豁勒の國の千戸の官人を成吉思合罕の名ざりたる九十五の千戸の

八十八の功臣

功臣の恩賞

官人成れり。

(林の民とは、斡亦喇惕乞兒吉速惕などを云ふ。卷十に見ゆ。阿勒赤、不禿、阿刺忽失、的吉惕忽哩の三人は、三人にて十の千戸となりたれば、千戸は九十五なれども、功臣は八十八人なり。明譯に「除駙馬外、復授同開國有功者九十五人爲千戸」とあり。駙馬を除くも九十五人も、皆譯誤りなり。又元史

朮赤台の傳に「朔方既定、擧六十五人爲千夫長」とある六は九の誤寫又は) 誤刻にして、これも千戸の數九十五なるを功臣の數と誤解したるなり。

古喇格惕(駙馬なる古)

と一處なる人人

に(この句の意、明かならざるが爲に、明の譯人は、駙馬を除きて九十五の功臣ありと誤解せり。蓋この句の意は、駙馬を込めたる諸功臣にと云ふことにて、功臣の外なる駙馬を加へてと云ふことには非ず。)

又成吉思合罕勅あり「この名ざりたる九十五の千戸の

官人に千戸を任したるその内にて功ある者に恩賞

を與へん」として、成吉思合罕勅あり(この句は、原本にては、功ある

の間、起れる錯誤ならん。今假にこゝに移し)「孛斡兒出木合黎等の官人どもをおこせよ」と宣ふ時に、房の内に失吉忽禿忽



失吉忽秃忽  
の愛だれ

居りき。「喚びに往け」と失吉忽秃忽に宣へば、失吉忽秃忽  
 申さく「孛斡兒出木合黎等は、誰より多き功をなすけん。  
 誰より多き力を與へけん。恩賞を賜はらんには、我いか  
 に少き功をなさざりき。いかに少き力を與へざりき、  
 我。搖車エウレンヤにある時より爾ナガイコトの高き闕タカの裏ウチに下領シタアジにかく  
翰列該髻ヒゲ生ふるまで長けて、他アガくは思はざりくぞ（他心を懐か、ざりくぞ）  
 我ワレ内股ウチマタに尿壺ネウコを用ひくナガイコトより爾ナガイコトの金コガネの闕シヤキの裏ウチに住み  
阿剌て口クチに髻ヒゲかく生ふるまで長けて、違へるを踏フまざりく  
阿嬰ぞ、我ワレ脚アシの處トコロに臥フさせて子コとく育ソダてたるぞ、我ワレを前マヘに  
關勒臥フさせて弟オトとく育ソダてたるぞ、我ワレを今我イマワレにいかなる恩賞オンシヤウ  
迭兀赤連

太祖の温諭

をか賜はらん」と申しき。その言につき、成吉思合罕は  
 失吉忽秃忽に宣はく「第六の弟オト（宣懿太后の第六子）に非ずや、  
 汝ナシヤは末の弟オトなる汝ナシヤに、恩賞は弟どもの分前ワラマヘに依り分  
 け合はん。又汝ナシヤの功イサヲの故ユエに九次の罪ツミに勿罪ナなひそ」と  
 勅トクありき。「長生トコヨの上帝アマツカミに祐タスけられて普アマネき國民クニミを服レタガへ  
 てある處トコロにて、汝ナシヤは視る目メ聽く耳ミミとなりて、普アマネき國民クニミ  
 を母ハハに我等ワレガに弟どもに子どもに分民ブンミン（分け與へ）の名ナに  
 て、毛氈マウセンの帳牆チヤウシヤウある「民」を分けて、板イタの門カドある「民」を離ハナし  
亦思該て、割附ワリツけて與へよ。誰ナニガも汝ナシヤの言コトバに違チガひ勿ナ爲セそ」と勅トクあ  
亦思該りき。又失吉忽秃忽に「普アマネき國民クニミの盜ヌスビトを懲コラして、誑ナシゴトを白アラハ



斷事官

して、殺すべき理あるをば殺し、罰ふべき理あるをば罰へ」として、普き上等の札兒忽(最も高き斷事、即ち最高裁判)を任給へり。

(黑韃事略の徐霆の補證に「韃人本無字書云云。其俗淳而心專。故言語不差。其法說謊者死。故莫敢詐偽。雖無字書自可立國。」また「霆見其一法最好。說謊者死」とあり。説は詐偽なり。札兒忽を掌る者を札兒忽赤と云ひ、漢語に譯すれば斷事官と云ふ。失吉忽秃忽は初任の斷事官なり。馬祖常の撰れる月合乃の碑に「國朝天造之始。總裁庶政。悉由斷事官」と云ひ、元史百官志一に「元太祖起自朔土。統有其眾。部落野處。非有城郭之制。國俗敦厚。非有庶事之繁。惟以萬戶統軍旅。以斷事官治政。刑任用者。不過一二親貴重臣耳」と云ひ、元史紀事本末に「太祖時。設官甚簡。以斷事官爲至重之任。位三公上」ともあり。又百官志三に「國初未有官制。首置斷事官曰。札魯忽赤。會決庶務。凡諸王駙馬投下。蒙古色目人等。應犯一切公事。及漢人姦盜詐僞。蠱毒厭魅。誘掠逃驅。輕重罪囚。及邊遠出征官吏。每歲從駕。分司上都。存留住冬諸事。悉掌之」とあるは、漢地を并せた。又「普き民の割附を割附ける後の職掌をも兼ね擧げたるなり。）」

又「普き民の割附を割附けるたる事を裁斷を裁斷したる事を青き迭卜帖兒(青)に書物に書きて記録して、子孫の子孫に至るまで、失吉忽秃必赤克迭卜帖兒列

青冊

失吉忽秃忽の謙讓

忽の我に謀りて論ひて、青き書物白き紙に記録したるを勿改めそ。改むる人は罪あるとなれ」と勅ありき。失吉忽秃忽言はく「我が如き末の弟は、一樣に齊等に分前をいかんぞ取らん。恩賜せば、土の牆ある城より賜はらん事を合罕の恩賜にて知しめせ」と奏しけり。(土の牆とは、乞塔揚唐兀惕などの都邑を云ふ。羽柴秀吉の海外にて領地を賜はれ」と信長公に申したるに意同じ。)この言につき「己が身を汝は斟酌せり(身の程を善く考へたり)。汝知れ(自ら取りて支配せよ)。」と宣へり。失吉忽秃忽は、己にかく恩賜せしめ了へて、出でて孛斡兒出木合黎等の官人を喚びて入らしめけり。そこに成吉思合罕勅ありて、蒙力克額亦格に宣はく

蒙力克の功



「生るゝと共に生れたる、長くると共に長けたる、福ある慶ある汝、汝の功助は、幾ばくもありぞ。その内王罕額赤格、桑昆安荅二人、我を賺して喚びたる時、往く間に蒙力克額赤格の家忽赤命に宿りたれば、蒙力克額赤格、汝止めざりせば、渦ある水忽赤命の裏に紅なる火の裏忽赤命に入れらるるなりぞ。彼の功を善く想ひては、子孫の子孫に至るまでいかんぞ忘られん。彼の功を想ひて、今坐次は、この隅の根忽赤命に坐ゑて、年に月に議りて給與賞賜を汝に與へん。侍奉きて過さん、子孫の子孫に至るまで」と勅ありき。

人臣の極位

孛斡兒出の功

少年の義侠

又成吉思合罕は、孛斡兒出に宣はく「小さい時に、韋毛の驢馬八匹を盗まれて、路に三たび宿りて追ひて行ける時に遇ひ合ひたるぞ。汝そこに言はく「艱みて來つる伴に伴なはん」と云ひ、家忽赤命に父にも話なく、騾馬の乳を擠り居たるに、その大皮桶皮斗忽赤命に野にて蓋して、尾脱の栗毛馬忽赤命を放たしめて、我を脊黒の青馬忽赤命に乗らしめて、汝自ら速き淡黄色の馬忽赤命に乗りて、その馬羣をば主なく放ちて、急ぎて野より便ち我と伴忽赤命なひて、又三たび宿り追ひて、韋毛の驢馬どもを盗みたる團の處忽赤命に到れば、團の邊忽赤命に立てるを奪ひて追ひて逃げて將ち來し



ぞ、我等二人。汝の父納忽伯顔は「富人にて」ありき。(明譯に「你父納忽伯顔有家財」とあるを見れば、原文ありきの上に脱文あるならん。)汝は、彼の獨子、何を知りてか我に伴なひたりし。(譯「你父納忽伯顔有家財、只你一子、爲甚肯教與我作伴」とあるは、原文の「心の傑れたるにより伴なひたるぞ、汝」)(閩復の撰れる廣平王玉昔帖木兒の碑に「祖博爾朮、諡武忠、武志意沈雄、善戰知兵、太祖聖武皇帝在潛義均同氣、初要兒斤部卒、盜吾牧馬、武忠共往追之、時年十三、知其寡不敵、乃爲出奇從旁夾擊之、寇捨所掠而去」とあるは、即ちこの事にして、元史博爾朮の傳は、この碑に據れり、要兒斤は、秘史) その後想ひて行きて、我は別勒古台を遣りて、伴とならんと云へば、汝は拱脊の栗毛馬に乗りて、青き毛衣を馬に駄けて、伴となりに來つれば、三つの箴兒乞惕、我等の處に來て、不見罕を三たび繞ら

氈裘の雨覆

しめたる時、共に繞りたるぞ、汝又その後塔塔兒の民に荅闌捏木兒吉思にて對抗して宿りたれば、雨は晝夜斷えず霖降りたる時、夜我を睡らせんとて、毛氈の表衣を覆ひたるにより、我が上に雨を漏らさず、夜盡くるまで立ちて、片方の足を只一度換へたりき、汝の傑れたる效なりぞ。(元史博爾朮の傳に「嘗潰圍於怯列、太祖失馬、博爾朮累騎而馳、頓止中野、會天雨雪、失牙帳、所在臥草澤中、與木華黎、張氈裘以蔽帝、通夕植立、足蹟不移、及旦、雪深數尺、遂免於難」とあるは、閩復の廣平王の碑に據れるなり、潰圍於怯列とは、合刺合勒只惕の戰を云へるにて、累騎の事は、幹闊台と字囉忽勒との事を誤り傳へたるなり、氈裘の覆ひの事も、塔塔兒との戰を客例亦惕とく、雨を雪とく、字幹兒出一人を木合黎と二人とくたるは、皆傳聞の異辭なり) それより外は、いかで汝の傑れたること、を言ひて盡さん。字幹兒出木合黎二人は、我が善き事を



右手の萬戸

ば行くまで拽きて、我が善からぬ事は立つまで止めて、この位に到らせたり。今眾の上に坐に坐て、九度の罪に勿罪なひそ。孛斡兒出は、右の手の阿勒台山に凭れる萬戸を知れ」と勅ありき。(蒙語) 箴迭は、本の義は知るにて、管するに同ト古の知太政官事今の府縣知事などの知も、同ト意なり。管する意に用ひたる箴迭を知ると譯したるは、皆古言のくるなり。

木合黎の神告

又木合黎に成吉思合罕宣はく「我等、豁兒豁納黑主不見なる忽秃刺罕」を戴ける部眾の踊りける繁れる樹の下に下馬したれば、木合黎に皇天の神告を告げ給へる言明なる故に、我そこに古温豁阿(卷四なる古温兀阿)を想ひて、木合黎に言を了へたりき。(約束を定めたりき。この事は、前に見えず。豁兒豁納黒の下馬は、札木合と同居せる時なり。この言に依

左手の萬戸

れば、木合黎等は、その頃已に太祖と内約ありて、その後主兒勤の亡びたる時、先約に従ひ服屬したるなり。) それに依り坐に上りて坐りて、木合黎の子孫の子孫に至るまで眾民の國王となれ」とて、國王の號を賜ひたり。「木合黎國王は、左の手の合喇温只敦に凭れる萬戸を知れ」と勅ありき。(合喇温只敦の所在確ならず。王罕の少き時叔父に逐はれて逃げ込みたる合喇温の隘は、薛涼格河の邊にありて、これと異なり。巴勒主納の水飲の時、太祖を尋ねて合喇温只敦の嶺どもを合撒兒の辿りたるは、この山なるべし。興安嶺の山脈の内なる一峯の名なるべしとは、誰も考ふることなれども、孛斡兒出の阿勒台山と對して擧げられたるを見れば、興安嶺の一峯の名には非ずして、興安嶺全體を呼べる舊き名なるべし。闕復の廣平王の碑に「國初、官制簡古、置左右萬夫長、位諸將之上、首以武忠居右、東平忠武王居左、翊衛長極、猶車之有軸、身之有臂、電掃荒屯、鼙奠九土、挂天之力競矣」と云へり。武忠は孛斡兒出、忠武は木合黎なり。)

豁兒赤の識言

成吉思合罕、豁兒赤に宣はく「識言して、明、你曾說先兆的言語、我が年少くあるより今まで久しく濡るゝに



約 三十妻の舊

濡れ合ひ寒きに寒え合ひて、福の神となりて行きたるぞ、汝。豁兒赤は、かの時に言はく「讖言實とならば、上帝に心に適はれば、我に三十人の妻有らせよ」と云ひき、汝。今實なる(讖言實となりたる)故に、恩賜して、これらの降れる民の好き婦人を好き處女を見て、三十人の妻を選びて取れ」と勅ありき。又豁兒赤に三千の巴阿嚙の上に、塔該(即ち速勒都)、阿失黑(即ち阿失)二人と共に、阿答兒斤の赤那思(阿答兒斤は、篋年土敦の第五子なる合赤温の子阿答兒歹より出でたり。赤那思は、喇失惕額丁に據れば、察喇孩領忽の子なる堅都赤那兀嚙客真赤那の裔なり。赤那思氏分散して阿答兒斤に屬し居たる故)、脱斡列思、帖良古惕(脱斡列思は、卷十に、阿答兒斤の赤那思と云へるなり)を合せ萬と

集史に秃刺思とあり、帖良古惕は、卷十に田列克、親征錄に帖良兀、集史に帖連郭惕とあり、共に謙河の源に居たる林の民

林民の萬戸

なして、豁兒赤知りて、額兒的失河に傍へる林の民に至るまで營盤を自在に營盤して、林の民を鎮むべく、豁兒赤萬戸を知れ」と勅ありき。「豁兒赤に相談無くては、林の民は、とにかくに勿行ひそ。相談なくて行ふものをば、何ぞ猶豫はん」と勅ありき。

主兒扯歹の合刺合勒只惕の戦功

又成吉思合罕は、主兒扯歹に宣はく「緊要なる汝の功は、客喇亦惕と合刺合勒只惕の沙漠に戦ふ時、愁へて居る時、忽亦兒答兒安答は、口を開きたるぞ。彼の従事を、主兒扯歹汝は、従事したるぞ。従事する時、主兒扯歹汝は、突進して只兒斤を、秃別干を、董合亦惕を、忽哩失列門(卷六の豁)



高山の遮護

哩失)を、千の侍衛を、緊要なる軍を、都てを敗りて、大中軍に到りて、桑昆の紅き腮を兀出馬(名箭の)にて射たる故に、長生の上帝に門の手綱を引開けられたるぞ。桑昆に傷けずあらば、いかにかもなりけん、我等。主兒扯歹の緊要なる大い功にそれは做りたるぞ。かくて離れて合勒合河に沿ひ起つ時、主兒扯歹を高さ山の遮護の如く思ひて行きたりき、我。かく去りて、巴勒主納の湖に水飲みに到りたるぞ。さて巴勒主納の湖より出馬する時、主兒扯歹を先鋒とて、客咧亦惕に出征して、皇天后土に力を添へられて、客咧亦惕の民を窮めて虜へたり。緊要な

第二次の戦功

亦巴合別乞を賜ふ時の勅諭

る國を滅されて、乃蠻、篋兒乞惕は、顔色を挫きて、立ち合ひ(對陣)かねて散らされたるぞ。篋兒乞惕、乃蠻を散らしたる戦の内に、客咧亦惕の札合敢不は、二女の女の縁に依り、己の従ふる部眾にて圓全住みたりとぞ。二たび敵になり離れたるを、主兒扯歹誘ひて、計略にて札合敢不を離れ畢へたるを手に掛けて拿へて事了へたりとぞ。かくて札合敢不の部眾を二たび滅し虜へたり。主兒扯歹の第二次なるその功は、かくありとぞ」と宣ひき。殺し合ふ日に、命を出したる故に、死に合ふ日に、慶戦したる故に、成吉思合罕は、亦巴合別乞(札合敢不の長女、元史尤赤台の傳)を賜ふ



御木八哈別吉木は、亦の誤阿卜哈合屯りなり、喇失惕を主兒扯歹チエダイに恩賜して與ふる時、亦巴合バカに宣はく「汝ナシを厭イトひ汝ナシの胷懷キヨウクワイなく見え容惡カラチと云はざりしぞ、我ワレ懷フコロに脚アシに入りたる列ツラに列ツラりて坐マたる汝ナシを主兒扯歹チエダイに恩賜オンシするは、大なる道理ダウリを思オモひて、主兒扯歹チエダイの戰タケふ日に楯タテとなりたる、敵テキなる人ヒトに防マぎとなりたる、離ハナれたる部眾ブシウを聚アツめたる、散チりたる部ブ眾シウを纏ムめ合アひたる彼カレの功イサヲを考カンガへて、汝ナシを與アツへたり。久キウ後スエ我が子孫シソンは、我等ワレラの位ウチに坐マて、かくの如ゴトき功イサヲをなせる道理ダウリを想オモひて、我が言コトバに違カガひなさず、子孫シソンの子孫シソンに至イるまで、亦巴合バカの位ウチを勿斷ナクちそ」と勅トありき。又成吉

遺念の賚臣

四千の兀嚕兀惕の長

思合罕シカハンは、亦巴合バカに宣はく「札合敢シャカガン不フなる汝ナシの父チは、汝ナシに二百人ニヒヤクニの賚臣サシチを、(蒙引者思、婦人の嫁ぎに隨ひ往きて仕ふ)汝ナシに阿失黑帖木兒アシクテムル厨子カシバ、阿勒赤黑アルシク厨子カシバ二人フタリを與アツへてありき。今兀嚕兀惕ウルウルの民タメに汝ナシ往ユくには、遺念カクとして我ワレにその賚臣サシチより阿失黑帖木兒アシクテムル厨子カシバを一百人イチヒヤクニを與アツへて往ユけ」と宣シひて取トれり。又成吉思合罕チンギスカハンは、主兒扯歹チエダイに宣はく「亦巴合バカを汝ナシに與アツへたり。四千の兀嚕兀惕ウルウルを汝ナシ知りて居ウらずや」とて恩賜オンシして勅トありき。(元史朮赤台の傳に「朮赤台始從征怯列亦、自罕哈啓行、歷班真海子、間關萬里、每遇戰陣、必爲先鋒、帝嘗諭之曰、朕之望汝、如高山前日影也、賜嬪御木八哈別吉引者思百、俾統兀魯兀四千人、世世無替」と云へるは、この文の意を約めたるなり。高山前日影は、高き山の遮護の誤り引者思は、賚臣の蒙語を正しく音譯せり。)



成吉思汗實錄卷の八終り。

忽必來の力

成吉思汗實錄卷の九。

又成吉思合罕は、忽必來に宣はく「力ある項、力士の

臀を壓けてくれたるぞ、汝此等忽必來者勒篾者別速別

格台（即ち速別額台）汝等四人の狗を、思ふ處に向けて遣れば、到

れと云ふ處に岩を碎き、引けと云ふ處に崖を破り、光

る石を碎き、深き水を斷切りたりとぞ、汝等忽必來者勒

篾者別速別額台、汝等四人の狗を指したる地に遣りて、

孛斡兒出、木合黎、孛囉忽勒、赤刺溫、巴阿禿兒、これら四人の

駿馬（蒙語）朶兒邊曲魯兀惕（元史木華黎の傳に與博爾朶博爾忽赤老溫事太祖

祖俱以忠勇稱、號撥里班曲律、猶華言四傑也）と云ひ、兵志にも同トキ文あり）戰ふ日となれば、主兒扯歹、

四狗

四駿



二先鋒

忽亦勒答兒二人を、兀魯兀惕、忙忽惕を率ゐて前に立たし

むれば、都て心安くありき、我」と宣へり。(元史木華黎の傳に、木

十功臣

きたる後丙戌太祖二十一年夏詔封功臣戶口爲食邑曰十投下、李魯居其首」と云ひ畏蒼兒博羅歡の傳にも十功臣の目見えたるはこの十人を云へるなるべし。

「汝忽必來は、軍の事務都てに長とて居らずや」とて

注意せらるる別都温

恩賜して勅ありき。又「別都温の拗けたる故に、我怪みて

行きて千戸を與へざりき。汝は彼に好くあるぞ。汝

と共に千戸となりて議り合ひて行かれん」と宣へり。又

「この後別都温に注意くるぞ、我等」と宣へり。(別都温は、即ち

都温なり。抹赤は木匠にして、名は別都温なり。)

忽難の忠勤

又成吉思合罕は、格你格思の忽難に「つきて」宣はく「汝

等、孛斡兒出、木合黎が頭たる官人どもに、朶歹、朶豁勒忽

等の扯兒賓に。この忽難、黒き夜は雄狼、明き晝は黒き

老鴉となりて、起くる時は休まさり、休む時は起きざ

り、歹き人と共に非き面して居らざり、讎ある人

と共に別なる面して居らざり、忽難、闊闊搠思二人に

相談無くして勿事を做しそ。忽難、闊闊搠思二人に相談し

て事を做せ」と勅ありき。「我が子どもの兄にて拙赤

はあるぞ。忽難は、格你格思に頭として、拙赤の下に萬

戸の官人となれ」と勅ありき。(元史世系表に「太祖皇帝六子、長朶赤

なるが、洪鈞の元史譯文證補に補傳あり、詳備せる佳作なり。明譯には、次の忽難の上に又説あり(二字)忽難、闊闊搠思、

謀臣忽難闊闊搠思

拙赤の傳となる忽難

忠直なる四臣



迭該兀孫額不干(即ち巴阿鄰の)この四人は、見たる事を諱まず、聞きたる事を匿さざりき。「云云にて」これら四人はありぞ。(これら四人の上には脱文あり明譯には)但曾聞見的事、不曾隱諱、便來對我說了(とありこの一節は明譯に「又説」とある如く、太祖の勅語なるべし。)

をさななト  
みの者勒篋

又成吉思合罕は、者勒篋に宣はく「札兒赤兀歹翁は、風匣を負ひて、者勒篋は搖車の内より「擧げられて」、不兒罕合勒敦より下りて來る時、幹難の河邊の迭里溫孛勒荅黑に「我が母」我を生みたる時、貂鼠の襁褓を與へてありき。かくて伴となりたるに依り、闕の奴、門の近習となりたるぞ。者勒篋の功は多くあるぞ。生るゝと共に

生れたる、長くると共に長けたる、貂鼠の襁褓なる根源ある、福ある慶ある者勒篋九次の罪を犯すとも刑に勿入れそ」と勅ありき。

父と別に千  
戸となれる  
脱命扯兒必

又成吉思合罕は、脱命(卷八な)に宣はく「父と子と別に千戸をいかでか知りたり、汝國民を聚め合ふ父に片方の翅となり、拽き合ひて國民を聚め合ひたる故に、扯兒必の號を與へたるぞ。今己の得たる置きたる「民」に依り己千戸となりて、秃嚕罕に議り合ひて居らずや、汝」と勅ありき。(秃嚕罕の名は、前後に見えず。脱命に兄弟多ければ、その兄弟の一人なるべし。)

艱難を共に  
せる汪古兒

又成吉思合罕は、汪古兒厨官に宣はく「三人の脱忽喇



汪古兒に屬する巴牙兀惕部  
汪古兒孛囉兀勒食物の給散

兀惕(脱忽喇温の複稱)五人の塔兒忽惕、蒙格秃乞顔の子、汝汪古兒、敝失兀惕、巴牙兀惕を率ゐ、汝等我一つの團となりて、汝汪古兒は、霧の裏に迷はざり、汝(不丹)亂の裏に離れざり、汝濡るゝに濡れ合ひて、寒きに寒え合ひて行きたり、汝今いかなる恩賞をか要むる、汝と宣へば、汪古兒申さく「恩賞を擇ば、我が巴牙兀惕の兄弟は、部落部落ごとに散りたり。恩賜せば、巴牙兀惕の兄弟を聚ら、めんと申せば、然り。かく巴牙兀惕の兄弟を聚めて、汝千戸を知れ」と勅ありき。又成吉思合罕勅あるに「汪古兒、孛囉兀勒二人は、右左の側にて汝等二人の厨

訶額命の育てたる棄兒四人

官は、食物を配る時、右の側に立てるもの、坐れるものに、巴剌温 缺けさせず、左の側に列れるもの、未なるものに、巴亦 缺けさせず、汝等二人にてかく給散すれば、我が喉噎ばず心安くあり。今汪古兒、孛囉兀勒二人は、馬に乗りて行きて、食物を多くの人に給散せよと勅ありき。「坐に坐る時は、大なる酒局の右左の側に食物を掌りて坐れ。脱命等と共に北に向ひ坐れ」と坐を告げて與へたり。

又成吉思合罕は、孛囉忽勒(即ち孛囉兀勒)に宣はく「我が母は、失吉忽秃忽、孛囉忽勒、古出、闊闊出、汝等四人を、民の營盤より地より得て、脚の處に入れて、子とし育てて養ふ

闕詳兒

闕勅

可兀赤連



合兒吉勒失喇に拖雷の

に、汝等の項を引きて、人と齊くならしめて、汝等の肩を引きて、男と齊くならしめて、子どもなる我等に伴[となり]影とならしめんとて養ひたるぞ。汝等を養へる徳に我が母に蓋幾ばくかは報い恩を廻したり、汝等。孛囉忽勒は、我に伴なひて、劇き出征に、雨の夜乏く宿らしめざりしぞ、汝。抗合ひて居る敵の處に、湯なく宿らしめざりしぞ、汝。又御祖なる父を失ひたる讎あり怨ある塔塔兒の民を屈服せしめて、讎復し怨報い、塔塔兒の民を車轄に比べて根絶しに夷ぐる時殺されたるに、塔塔兒の合兒吉勒失喇、賊となり出でて、却困窮

盗まれ

して飢ゑて入りて来て、母の處に家に入りて「善く尋ねさすること有り、我」と云ひて、「善く尋ねさすること有らば、そこに坐れ」と云はれて、明他説是尋衣食的、母親説既、是尋衣食的時、那裏坐、西邊の床の門後に端に坐りて居る時、拖雷五歳なる、外より入りて来て、却走り出でて去りたるを、合兒吉勒失喇起ちて、幼兒を腋に夾みて出でて行きて去りながら、刀を引きて抜きつゝ、行く時、孛囉忽勒の妻阿勒塔泥は、母の家に東に坐りて居りき。母叫びて「子を失へり」と云へると共に、阿勒塔泥續き合ひ走りて出で合ひて、合兒吉勒失喇の後より

勇婦阿勒塔泥の働き



哲台者勒箴  
に盗人の殺  
され

趕ひて、彼の辮髪を拏へて、次の手にて、刀を抜きてあ  
る彼の手を拏へて、扯くと共に、その刀を落しけり。家  
の北に哲台、者勒箴二人、角なき黒牛を食はんと殺して  
居る時、阿勒塔泥の聲にて、哲台、者勒箴二人、斧を執り  
て、拳を赤くして、走りて来て、塔塔兒の合兒吉勒失喇を  
斧にて刀にてすぐそこに殺しけり。阿勒塔泥、哲台、者勒  
箴三人、子の命を救へる頭功を争ひ合ひたれば、哲台、  
者勒箴二人、言く「我等無かりせば、疾く走りて到りて殺  
さざりせば、阿勒塔泥は、婦の人、いかにありけん。子の  
命に害を致したりけん。頭功は、我等のなるぞ」と云へ

頭功の争ひ

阿勒塔泥の  
となれる頭  
功

幹歌歹を救  
ひたる字囉  
忽勒

り。阿勒塔泥言く「我が聲を聞かさりせば、汝等いかで  
か來にけん。我走りて趕ひて彼の辮髪を拏へて、刀を  
抜きたる彼の手を扯きて、刀を落さざりせば、哲台、者  
勒箴二人、到りて來るまでに、子の命に害を致さずや  
はありけん」と云へり。言ひ畢へたれば、頭功は、阿勒塔泥  
のとなれり。字囉忽勒の妻は、字囉忽勒に第二の轅とな  
り、拖雷の命に功となれり。又字囉忽勒は、客喇亦惕と合  
刺合勒只惕の沙漠に戦へる時、幹歌歹は頸脈を箭に射  
られたれば、倒れたれば、字囉忽勒は、上に下り合ひて、  
凝りたる彼の血を口にて唾ひて、夜宿り合ひて、明朝



馬に乗らうめて、坐りかぬるを尻馬に乗りて、斡歌歹の後より抱きて、塞れる血を唾ひ唾ひ口の縁を赤くして、斡歌歹の命を安らかに送りて来てありき。我が母の養へる勞りたるに報い、我が一人の子の命に功となりたるぞ。孛囉忽勒は、我に伴なひて、招ぎ喚びに、聲應後れたることなかりうぞ。孛囉忽勒は、九次罪を犯すとも勿罪なひそ」と勅ありき。

女子の恩賞

別乞とせらるゝ豁兒赤兀孫翁

又「女子家族に恩賞を與へん」と宣へり。

又成吉思合罕は、兀孫翁(豁兒赤兀孫翁)に宣はく「兀孫、忽難、闊

闊擲思、迭該、この四人は、見たる事聞きたる事を諱み匿

別乞の稱號

さず告げ居たりき。心附きたる事考へたる事を語り居たりき。忙豁勒の體例には、官人の制に別乞となる法ありき。巴阿囉は、兄の子孫なりき。(巴阿囉の遠祖巴阿哩歹は、字端合必赤の兄なり)別乞の制は、我等の内にて上より「爲る法なれば」別乞に兀孫翁爲れ。別乞に戴くと、白き衣を着せて、白き駟馬に乗らうめて、位の上に坐らせて、侍きて、又年月に議りてかく有れ」と勅ありき。(別乞は、族長の稱號なり。蒙古の諸部長往別乞と稱する者あり。薛徹別乞は、合不勒合罕の長子の孫にして、禹兒斤の長なり。忽察兒別乞は、也速該の兄の子なるが故に、別乞と稱せり。兀都亦惕篋兒乞惕の脱黑脱阿別乞、その長子脱古思別乞、朵兒邊の合只温別乞、斡亦喇惕の忽都合別乞は、皆その一族の長なり。王罕に事へたる必勒格別乞も、或一族の長なるべし。但太祖の女豁眞別乞、阿刺合別乞、桑昆の妹察兀兒別乞、札合敢不の二女亦巴合別乞、莎兒合黑塔泥別乞の如く、女子にして別乞と稱するは、美稱に用ふるのみにて、族長の別乞とは異なり。又輟



耕録の白道子の條に「國俗尙白以白爲吉」とあれば、別乞の白衣を被るは、優禮に出でたるなり。黑鞋事略に蒙古の衣服の事を述べて「色用紅紫紺綠紋以日月龍鳳無貴賤等差」と云ひて、白衣の事を少くも云はざるを見れば、この優禮を受くるものは極めて稀なりなるべし。

まづ口を開きたる忽亦勒答兒の遺族の恩賞

又成吉思合罕宣はく「忽亦勒答兒安答は、戰ふ時に命を差出して先口を開きたる功の故に、子孫の子孫に至るまで孤兒の恩給を受けて居れ」と勅ありき。

札木合に殺されたる察罕豁阿の遺子の恩賞

又成吉思合罕は、察罕豁阿(卷四の察合安兀阿)の子納隣脱幹哩勒に宣はく「汝の父察罕豁阿は、我が前に慎みて、戰ひとなり答闌巴勒主惕に戰へる時、札木合に殺されき。今脱幹哩勒は、父の功にて孤兒の恩給を受けよ」と宣はれて、脱幹哩勒申さく「恩賜せば、我が捏古思の兄弟は、他の

鎖兒罕失喇父子の舊恩

部落ごとに散りたり。恩賜せば、その捏古思の兄弟を聚めてん」と申せば、成吉思合罕勅あるには「かあらば、捏古思の兄弟を聚めて、汝は子孫の子孫に至るまで知りて居らずや」と勅ありき。(捏古思氏の人、元史に見えず。只錢大昕の氏族表に「担亦捏之譚」と云へり。)

又成吉思合罕は、鎖兒罕失喇に宣はく「我を、小き時に泰赤兀惕の塔兒忽台乞哩勒秃黑兄弟に嫉みて拏へられ」たれば、そこに「兄弟に嫉まれたり」として、鎖兒罕失喇は、赤刺温、沈伯なる子どもに、合答安なる女に世話せしめて、匿して居て、我を放ちて遣りたるぞ、汝等。汝等の彼の恩



薛涼格の營  
盤自在の願

好きを想ひて、黒き夜の夢の裏に、明き晝の宵の裏に、想ひて行きたるぞ、我、汝等は、却て我に泰赤兀惕より遅く來うぞ。今我、汝等に恩賜せば、いかなる恩賜をか欲する、汝等」と宣へり。鎖兒罕失喇は、赤刺温、沈伯なる子どもと共に申さく「恩賜せば、營盤自在ならん。篋兒乞惕の地なる薛涼格を營盤とて自在ならん。又別に恩賜せば、成吉思合罕知りめせ」と申せり。その時成吉思合罕宣はく「篋兒乞惕の地なる薛涼格を營盤とて、營盤又自在なれ。子孫の子孫に至るまで、箭筒を帶ばしめて喝蓋せしめて、自在なれ。九次の罪に刑に勿入り」と勅ありき。又

直に願を言  
ひ得る許し

鎖兒罕失喇  
巴歹乞失里  
黒三人の答  
兒罕

成吉思合罕は、赤刺温、沈伯二人に恩賜して「前に赤刺温、沈伯二人の言へる言を想ひては、いかなぞ忘れん、汝等」を「赤刺温、沈伯、汝等二人、心に言ふことあらば、不足を求むることあらば、聞の人に勿語りそ。己身にて口にて我に汝等自思へることを語れ。不足を自ら求めよ」と勅ありき。又「鎖兒罕失喇、巴歹、乞失里、黒、汝等は自在なれ。又自在なるには、多き敵に馳りて、財を得たるに依りて取れ。野の獸を圍獵せば、殺したるに依りて取れ」と勅ありき。「鎖兒罕失喇」と云へば、泰赤兀惕の脱迭格の家人なりうぞ。巴歹、乞失里、黒二人と云へば、扯唵(忽闌巴阿禿兒の子也客扯唵)



の馬飼なりぞ。今は我が信臣、箭筒を帶ばりて、喝蓋せりめて、自在に快活なれ」と勅ありき。(自在なるの蒙語は) 蒼兒合刺忽、自在の特典を、蒼兒罕と云ふ、輟耕錄に「蒼刺罕、譯言一國之長、得自由之意、非勳戚不與焉。太祖龍飛、日朝廷草創、官制簡古、惟左右萬戶、次及千戶而已。丞相順德忠獻王之曾祖、啓昔禮以英材見遇、擢任千戶、錫號蒼刺罕。至元壬申、世祖錄勳臣、後拜王宿衛官、襲號蒼刺罕」とあり。 蒼刺罕は、即蒼兒罕、啓昔禮は、即乞失里黑、忠獻王は、世祖成宗の朝の名相哈刺哈孫なり。

正主を廢てかねたる納牙阿の恩賞

又成吉思合罕は、納牙阿に宣はく「失兒歌秃翁(卷五の失兒)は、阿刺黑、納牙阿なる子どもと、(即)汝等と、塔兒忽台乞哩勒秃黑を我等の處に拏へて來る時、路にて忽秃忽勒の隅に到りて、そこに納牙阿言く「正主の君をいかで廢て拏へて往かん、我等」と云ひて、廢てかねて放りて遣り

右左中の萬戶

て、失兒歌秃翁は、阿刺黑、納牙阿なる子どもと來て、そこに納牙阿必勒只兀兒(必勒只兀兒は、雲雀なり、納牙阿の號か)言く「正主の君を塔兒忽台乞哩勒秃黑を手に掛けて來ぬるに、却て廢てかねて放りて遣りて、我等は、成吉思合罕に力を與へんと來ぬ。その君を手に掛けて來なば、「正主の君を手に掛けたる人、久後いかんぞ倚信せられん、此等の「人」と云はれんと云ひき。その君を廢てかねたり」と云へば、そこに「正主の君を廢てかねたる理は、大なる道理を思ひけり」として、彼等の言を善しとて、「一つの句當を委ねん」と云ひき。今孛斡兒出に右手の萬戶を知れ(知ら)



者別速別額  
台の封戸

め、木合里に國王の號を與へて左手の萬戸を知らしめたり。今納牙阿は、中の萬戸を知れ」と勅ありき。  
又「者別、速別額台二人は、自得たる置きたる「民」に千戸となれ」と宣へり。

迭該の封戸

又迭該なる羊飼に、(卷三に、迭該は羊を牧すること見えたり。)埋れたる(明譯無)戸籍的百姓を聚めて千戸を知らしめたり。

古出古兒木  
勒合勒忽の  
封戸

又古出古兒木匠は、(卷三に、古出古兒は家車の修造を掌ること見えたり。即木匠なり。)民缺けて、こゝよりそこより收めて、札荅喇より木勒合勒忽親しきに依り伴なひき。「古出古兒、木勒合勒忽二人は、一つに千戸となりて議り合ひて居れ」と宣へり。

親衛を萬に  
満たす勅

國を共に立てたる共に艱難したる者どもを千戸の官人となりて、千を千として、千戸百戸十戸の官人を任して、「萬を」萬として、萬戸の官人を任して、萬戸千戸の官人どもに、恩賞を與ふべき者には恩賞を與へて、恩賞の勅ある者には有りて、成吉思合罕勅あるには「前に八十の宿衛あり、七十の侍衛の番士有りたりき。今長生の上帝の力にて、天地に力勢を添へられて、普き國民を匡して、獨の調度の内に入れたる時、今我が處に番直する侍衛を千戸千戸より選びて入れよ。入るゝには、宿衛箭筒士侍衛に入るゝには、萬に満たせ入れよ」



番士を選び  
弟と従士と  
を随へくむ  
る勅

と勅ありき。又成吉思合罕は、番士を選びて入るゝことを勅を千戸千戸に傳へけらく「我等の處に番士を入るるに、萬戸千戸百戸の官人の子ども、白身の人の子どもも入る時、技能あり狀好き者を、我等の前行くべき者を入れよ。千戸の官人の子どもを入るゝには、十人の従士あり、彼の弟一人を随へて來よ。百戸の官人の子どもを入るゝには、五人の従士あり、一人の弟を随へて來よ。十戸の官人(即牌子頭)の子どもを入るゝにも、白身の人の子どもを入るゝにも、三人の従士あり、亦一人の弟を随へて、初より乘馬氣力を調へて來よ。我等の

勅を越ゆる  
罪

處にて前に行かゝむることを勵ますに、千戸の官人の子どもには、十人の従士を本の千戸百戸より科斂して與へよ。その父與へたる分民あらば、彼の身自得たる置きたる人口驕馬幾ばくか有らば、昵近の分民より外にて、我等の限りたる限りに依り科斂して、かく科斂して整へて與へよ。百戸の官人の子どもに五人の従士を、十戸の官人の子どもに白身の人の子どもに三人の従士を、只亦法に依り、彼の昵近の分民より外にて、只かく科斂して與へよ」と勅ありき。「千戸百戸十戸の官人眾の人、我等の此の勅を致さゝめて、聞きて



ありながら越えたる人は、罪あるとなれ。我等の處に番直に入れられたる人にて避けて爲らざる人、我等の前に行くことを難うとせば、別なる「人」を入れて、その人をば罪なひて、眼の陰(眼力の及ばざる處)に遠き地に遣れ」と勅ありき。「我等の内裏に前に行きて學び合はんと云ひて我等に来る人を勿妨げそ」と宣へり。

千宿衛の長也客捏兀囉

成吉思合罕の勅ありたるに依り、千戸より選びて、百戸十戸の官人の子どもも、その勅に依り選びて出て来て、「前に八十の宿衛あり」を八百に爲りたり。「八百の上に千に満たせよ」と云へり。宿衛に入る者を勿

妨げそ」と勅ありき。「宿衛には也客捏兀囉長となりて、千夫を知りて居れ」と勅ありき。(宿衛を也客捏兀囉統べて」と譯すべきなれども、統ぶるの蒙語

阿合刺は、阿合即長となると云ふ義なる故に、「宿衛を」の「を」を「に」と改めたり。下皆これに準ふ。也客捏兀囉は、何人なるか知らず。見裕壇の蒙力克額赤格の子にてや

「前に四百の箭筒士を選びたり。選びて「箭筒士に者勒篋の子也孫帖額長となりて、秃格の子不吉歹」と議り合ひて居れ」と云へり。(也孫帖額は、憲宗紀に葉孫脱とあり、憲宗即位の

伏誅とあり。者勒篋の子孫の顯れざるは、也孫帖額の誅せられたるが爲ならん。秃格は即卷四なる統格、木合黎の從弟にして、九十五の千戸の第十に列せり。その子不吉歹は、太祖に代りて許婚の饗に赴きたる不

合台と音近けれども、同トキか否か知らず。)侍衛と共に箭筒士の班に入り合ふ時、也孫帖額は、一班の箭筒士に長となりて入れ。不吉歹は、一班の箭筒士に長となりて入れ。豁兒

箭筒士四班の長也孫帖額不吉歹豁兒忽答忽刺ト刺合



千箇筒士の  
長也孫帖額

八千侍衛の  
長八人  
幹格列扯兒  
必

不合

阿勒赤歹

忽答黑は、一班の箭筒士に長となりて入れ。刺卜刺合は、  
一班の箭筒士に長となりて入れ。(裕兒忽答黑は、卷十二にも見え、刺卜刺合は、卷十二に刺巴勒合とあり。)箭筒を帶ふるものに、侍衛の班班に貼く。箭筒士に、  
かく長となりて入らせよ。箭筒士を千に満たせて、也孫  
帖額長となりて居れ」と勅ありき。

前に幹格列扯兒必と入りたる侍衛の上に千に満た  
せて「孛斡兒出の親族より幹格列扯兒必(孛斡兒出の弟)は知れ」と  
宣へり。「木合里の親族より不合(木合里の弟)は一千の侍衛を  
知れ」と宣へり。亦魯該の親族より阿勒赤歹に「一千の侍  
衛を知れ」と宣へり。(阿勒赤歹は、卷六に見えたる合赤温の子阿勒赤歹と名同トけれども、異なる人なり。元史憲宗紀に按只解

朶歹扯兒必

朶豁勒忽扯  
兒必

察乃

阿忽台

阿兒孩合撒  
兒

とあり、憲宗即位の年、葉孫脱等と共に「二千の侍衛を朶歹扯兒必知  
れ。一千の侍衛を朶豁勒忽扯兒必知れ」と宣へり。「二千の  
侍衛を主兒扯歹の親族より察乃知れ。一千の侍衛を阿  
勒赤の親族より阿忽台知れ。(阿勒赤は、即阿勒赤古喇堅、元史の國舅史に見えず。たゞ特薛禪の傳に、按陳の弟火忽と云へるは、甲戌の年に哈老温、遼東塗河、潢河の間、火兒赤、納慶州の地を住所として賜はれること見ゆ。その火忽は、阿忽台の訛略に)一千の侍衛を阿兒孩合撒兒はあらずや」  
一千の選びたる勇士を知りて、多くの日は侍衛となれ。戦ふ日は  
前に立ちて勇士となれ」と勅ありき。(卷八なる九十五の千戸の處に、亦魯該は阿兒孩ならんと云ふ疑ひを陳べたれども、こゝに亦魯該の名ある) 千戸千戸より  
續きに又阿兒孩合撒兒あるを見れば、同ト人とも思はれず)千戸千戸より  
選びて來つるもの、八千の侍衛となれり。宿衛は、箭筒士



萬の番士よ  
りなれる大  
中軍

番直の宿老  
四人不合阿  
勒赤歹朶歹  
朶裕勒忽

番士の點檢

と共に二千となれり。三つ(宿衛、箭筒、士侍衛)并せて「萬の番士となれり。成吉思合罕勅あるには我等の身に貼ける萬の番士を勵まうて大中軍となり居れ」と勅ありき。

又成吉思合罕勅ありて、侍衛の四班の宿老たる者に任し「不合は、一班の番士を知りて、番士を整へて入れ。阿勒赤歹は、一班の番士を知りて、番士を整へて入れ。朶裕勒忽は、一班の番士を知りて、番士を整へて入れ。朶裕勒忽は、一班の番士を知りて、番士を整へて入れ」として、四班の宿老を任して、番直に入る勅を傳へ「番直に入るには、番直の官人、己の處に番直する番士を點

缺勤の罰

勅の言ひ聽  
かせ

檢して、番直に入りて、三たび宿り合ひて、代り合へ。番直ある(番直に當れる)人番直を脱さば、その番直を脱したる番士に三つの筈を與へよ。その番士又二たび番直を脱さば、七つの筈を與へよ。又その人身に病なく、番直の官人等に相談なく、又その番士三たび番直を脱さば、三十七の筈を與へて、我等の處に行くことを艱くとしたれば、「眼の陰に遠き地に遣らん」と勅ありき。(番直の宿老、蒙語に客失)  
昆幹脱古と云ひ、元史兵志には法辭之長とあり、輟耕錄に曰く、國朝有四法辭、大官、法辭者、分宿衛供奉之士、爲四番、番三晝夜、凡上之起居飲食諸服御之政令、法辭之長皆總焉。「番直の宿老は、第三第三の番直に(當番の三日)この勅を番士に聽かせよ(明掌護衛的官人、凡換班時、將



宿老番士の  
同等

這言語省會一遍。聽かせずば、番直の宿老罪となれ。勅  
を聽きてありて越えば(犯さば)勅の旨に依り、番直を脱さ  
ば、番士は罪となれ」と勅ありき。番直の宿老は、長とな  
られたりとのみ云ひて、同等に入りたる我が番士を我  
に相談無くて勿責めそ。法度を動さば、我に告げよ。斬ら  
しむる理あるならば、我等は斬らしむるぞ。打たる、理  
あるならば、臥さしめて打つぞ。長となれりとのみ云ひ  
て、同等の我が番士を己が手足を致して答打たば、答  
の報に答を亦、拳の報に拳を亦回さん」と宣へり。

千戸より上  
にある番士

又成吉思合罕勅あるには、外に居る千戸の官人より

我が番士は上に在るぞ。外に居る百戸十戸の官人よ  
り我が番士の家人は上にあるぞ。我が番士に、外に居  
る千戸ども、同等となりて並びて、我が番士と殴り合は  
ば、千戸の人を罪せん」と勅ありき。

箭筒士侍衛  
厨官の勤方

又成吉思合罕勅ありて、班班の官人どもに勅を傳ふ  
るには、箭筒士侍衛等、番直に入りて、晝の行ひを各その  
道道に行ひて、日の光あるに宿衛に譲りて、外に出で  
て宿れ。我等の處に夜は宿衛宿り居れ。箭筒士は箭筒  
を、厨官は器皿を宿衛に渡して去れ。外に宿れる箭筒士、  
侍衛、厨官は、我等湯を飲むまで、聚馬處に坐りて、宿衛に



宿衛の勤方

届けて、湯を飲み畢へば、箭筒士は箭筒の處に、侍衛は坐の處に、厨官は器皿の處に復り合へ。班班に入る者は、只只道理に依りこの體例に依りかく爲せ」と勅ありき。一日落ちたる後、斡兒朶の後より前より越え行く人を拏へて、宿衛は拏へて宿りて、明朝宿衛は彼の言を聞け。宿衛は番直に代り合ふには、その符を渡して入りて來よ。代りて出づる宿衛も、渡して出でて去れ」と宣へり。宿衛は、夜斡兒朶の周圍に臥して、門を壓へて立てる宿衛は、夜入る人をば、その頭を打割り、その肩を落つるほど斫りて去げよ。急ぎの話ある人夜來なば、宿衛

宿衛の威嚴

に話して、帳房の北より宿衛と一處に立ちて話さしめよ」と宣へり。宿衛より上の坐には、誰も勿坐りそ。宿衛より言なくては、誰も勿入りそ。宿衛の上を誰も勿行きそ。宿衛の閒を勿行きそ。宿衛の數を勿問ひそ。宿衛の上を行く人を宿衛は拏へよ。閒を行く人を宿衛は拏へよ。數を問へる人をば、宿衛は、その人を、その日乗れる驢馬、鞍あり轡あるを、被たる衣服ごめに宿衛は取れ」と勅ありき。額勒只吉歹は、信任ある人なるに、夕に宿衛の上を行けるありて、宿衛にいかんぞ拏へられけ

る。(額勒只吉歹は、合赤温の子阿勒赤歹、即世系表に按只吉歹とある人と名似たれども、異なる人なり。後文にも元史にも屢見ゆ。八十八功臣の中には見えすか



の名前の内に阿勒赤と云ふ人あり、餘り名の聞えぬ人なり、阿勒赤吉歹の吉歹を脱したるに、あらずやとも疑はる。

成吉思汗實錄卷の九終り。

老宿衛

成吉思汗實錄卷の十。

成吉思汗合罕宣はく、雲ある夜、我が天窓ある房の廻りに臥して、靜に睡らうめて、この位に到らせたる老功の我が宿衛星ある夜、我が帳殿の房の周圍に臥して、蒲團の内を驚かさざり、慶ある我が宿衛は、高き位に到らせたり。變動し居る風雪に、顛かゝ居る冷氣に、瀉ぎ居る雨に、我が編壁ある房の周圍に休を爲さず立ちて心を安からうめたる誠の心ある我が宿衛は、快活なる位に到らせたり。亂れ居る敵の中に、我が土堤ある家の周圍に、瞬もせず勸めて立ちたる頼ある我

成吉思汗實錄卷の十

三八三



大侍衛

老勇士

大箭筒士

愛撫すべき  
萬の番士

が宿衛、樺皮の箭筒を動し爲せば後れて立たざり快  
兀亦勒孫 忽必思 掃只惕 忽見  
 く行く我が宿衛、慶ある我が宿衛どもを老宿衛(老功の宿衛士)  
 と云へ。幹歌列扯兒必と入りたる七十の侍衛どもを大  
 侍衛と云へ。阿兒孩(即ち阿兒孩合撒兒)の勇士どもを老勇士と云へ。  
 也孫帖額、不吉歹等の箭筒士どもを大箭筒士と云へ」と  
 勅ありき。

「我が九十五の千戸より身に貼く近臣に選びて來  
 つる萬の親近なる我が番士を、久後我が位に坐りた  
 る子ども、我が子孫の子孫は、この番士を遺念の如く  
 想ひて、怨みくめず、善く扱へ。この萬の番士を我がめ

宿衛の掌る  
雜務

でたき福の神と云ひて居らずや」と宣へり。

又成吉思合罕宣はく「幹兒朶の侍女(蒙語)扯兒賓幹乞惕(侍從)

の家(蒙語)格倫可兀惕(家の子)駱駝飼(蒙語)帖篋額臣(元史兵志に「牧駱駝者曰帖蔑赤」と)

り牛飼(蒙語)忽客臣(蒙語)を宿衛は取締めて、幹兒朶の房車を

調へよ。燾鼓朶囉(明本語譯には下とあ)鎗を宿衛調へよ。器皿

をも宿衛調へよ。我等の飲物食物を宿衛支度せよ。稠き

肉の食物をも宿衛支度して糞よ。飲物食物不足となら

ば、支度せられたる宿衛に尋ねよ」と宣へり。箭筒士に飲

物食物を配るに、支度したる宿衛に相談無くて勿配り

そ。食物を配るに、まづ宿衛より始めて配れ」と宣へり。



宿衛の軍を  
出さざる理  
由

「斡兒朶の房に入り出づるを宿衛整へよ。門には宿衛の門者(蒙語)額兀迭臣(蒙語)家に倚りて立て。宿衛より二人入りて大酒局を執りて居れ」と宣へり。宿衛より營盤官(蒙語)嫩秃兀臣(蒙語)行きて斡兒朶の房を下せ(据るつ)と宣へり。「我等鷹使ひ圍獵する時、宿衛は我等と共に鷹使ひ圍獵しに行け。車に「獲物の」半を分けて置き」と宣へり。(元史兵志に「預怯者分冠服弓矢食飲文史車馬廬帳府庫醫藥卜祝之事悉世守之雖以才能受任使服官政貴盛之極一日歸至內庭則執其事如故至於子孫無改非甚親信不得預也」とあり)

又成吉思合罕宣はく「我等の身、軍に出でずば、宿衛は、我等より外に軍に勿出で」と宣へり。「かく云はれ

宿衛の陪審  
また難務

て、勅を越えて宿衛を嫉みて軍を出すものあらば、軍を知れる扯兒賓罪あるとなれ」と勅ありき。「宿衛の軍はいかんと出されざると云へるぞ、汝等。宿衛は、但我等の金の命を守るなり。鷹狩圍獵に行く時、働き合ふなり。斡兒朶を預けられて、起つ時靜なる時車を調ふるなり。我が身を守りて宿ること容易からんや。家車大老營を、起つ時居る時調ふること容易からんや。かく重き離れ離れの働きあることを云ひて、「我等より外に別に軍に勿行き」と云へるは、かくあるぞ」と宣ひき。

又勅あるには「失吉忽秃忽の裁斷に、宿衛より「人を



斡兒朶の右  
左前なる箭  
筒士侍衛の  
屯營

出して「裁斷を共に聽け」と宣へり。「宿衛より箭筒弓甲器械を調へて配り合へ。驕馬を調へて綱索を駄けて行け」と宣へり。「宿衛より扯兒賓と共に段匹を配れ」と宣へり。「箭筒士侍衛の營を告ぐる(定む)には、也孫帖額不吉歹等の箭筒士、阿勒赤歹、斡歌列、阿忽台等の侍衛は、斡兒朶の右の邊に行け」と宣へり。「豁兒忽答黑刺卜刺合等の箭筒士」不合、朶歹、扯兒必、多豁勒忽、扯兒必、察乃等の侍衛は、斡兒朶の左の邊に行け」と宣へり。「阿兒孩の勇士どもは、斡兒朶の前に行け」と宣へり。「宿衛は、斡兒朶の家車を調へて、斡兒朶の前の左の邊に行け」と宣へり。

殿中を監視  
する朶歹  
兒必

合兒魯兀惕  
の降附

(明譯には帳殿根前左右とあり、原文左の下に右)「許多の番直する侍衛を、斡兒朶の周圍、斡兒朶の家僮を、馬飼(語蒙)阿都兀臣(羊飼(語蒙)豁你臣、元史兵志に「牧羊者」曰「火你赤」とあり)駱駝飼、牛飼を、常に朶歹、扯兒必、氣を付けて居れ」と任し給へり。「朶歹、扯兒必は、常に居て、斡兒朶の後より、枯草を喫ひて、乾糞を焼きて行け」と勅ありき。(末の一語は、掃除せよとの意なるべきか、確ならず。朶歹、扯兒必は、一千の侍衛の長にて、番直の宿老、即ち四怯薛長の一人となり、兼ねて殿中監の職務をも執れるなり。この職務は、太祖始めて合罕となれる時、家の内の婢僕どもを統べんと云へるに同じ。)

忽必來那顏に合兒魯兀惕を征けさせたり。合兒魯兀惕の阿兒思闌罕は、忽必來に降り來ぬ。忽必來那顏は、阿兒思闌罕を率ゐ來て、成吉思合罕に見えさせたり。敵對せ



合兒魯黒の異文

喀牙里克の君を兼ねる合兒魯黒罕

ざりきとて、成吉思合罕は、阿兒思闌を恩賞して、一女を與へんと勅ありき。(合兒魯兀惕は、合兒魯黒の複稱、唐書の葛邏祿なり。葛邏祿は、鐵勒諸部の一にして、唐の世に北庭の西北金山の西に居り、その盛なる時は碎葉、怛邏斯の諸城をも有ちしが、宋の世に至りて國衰へ、西遼の屬國となれり。烏古孫仲端の北使記元史鐵邁赤の傳に合魯、親征録太祖紀沙全の傳儒學伯顔の傳に哈刺魯、哈刺解の傳に哈魯、也罕、的斤の傳に匣刺魯とあり。輟耕録の色目三十一種の中には哈刺魯とも匣刺魯とも書けり。珀兒沙の亦思塔黑哩の書には喀兒列怯、普刺諾喀兒闌尼の紀行には科囉刺と云へり。元史地理志の西北地附録には柯耳魯とありて、經世大典の圖に、柯耳魯は阿力麻里即ち阿勒馬里克今の伊犁の西北に載せたり。親征録に「辛未春、上居怯綠連河時、西域哈刺魯部主阿昔蘭可汗來歸、因忽必來那顏見上」とあり。元史も、太祖六年辛未の條に、この事を記せり。多遜は、主吠尼の史を譯して「突兒克喀兒魯克の酋長にして、喀牙里克的君なる阿兒思闌汗、阿勒馬里克的君なる斡匪兒、二人ともに合喇乞台の古兒汗の臣なりしが、一二一年來て成吉思汗に従ひ、成吉思汗は、阿兒思闌に宗女を與へたり」と云へり。喇失惕の記載は、祕史に同くして、只皇女をば主吠尼と同く宗女とし、阿兒思闌汗の號存すべからざるに依り、撒兒惕の號を賜へり」と云へり。合兒魯兀惕の罕は、喀牙里克的の君を兼ねたとあれば、その國は、喀牙里克的の邊、即ち巴勒喀什湖の東南にあるべし。喀牙里克は、嚙卜嚙克の紀行に喀亦刺克と云ひ、元史憲宗紀二年夏、分遷諸王於各所」の條に「海都於海押立地」とありて、太宗の孫なる海都の分

世世元の駙馬

篋兒乞惕の遺孽の勦滅

丁丑の年なる嶺河の戦

地となり、海都の亂に世祖の兵は阿勒馬里克に進み、阿刺套山を隔てて相對し居たり。大佐裕勒はその地は、今の闊帕勒に近く」と云へり。一八五七年、ある塔塔兒人は、闊帕勒の古墳より古き金環を寶石と共に發見し、その金環に突兒克字にて阿兒思闌と刻みてありしが、珍らしく掘出物なりき(露西亞の地學協會の報告、一八六七年第一編第二百九十ページ)。諸公主表に脱烈公主、適阿爾思闌子也先不花駙馬とありて、皇女とも宗女とも云はず。又表には阿兒思闌を駙馬と云はざれども、諸書みな阿兒思闌に妻せたりとあれば、これも先に阿兒思闌に配し、後にその子に配したるを、公主表は諱みて後の駙馬のみを擧げたるならん。又脱烈公主の次に「八八公主、適也先不花子忽納答兒駙馬。某公主、適忽納答兒子刺海涯里那駙馬」とあれば、阿兒思闌の後には、曾孫までも世世元の駙馬となりなり。

速別額台巴阿秃兒は、鐵の車にて、篋兒乞惕の脱黑脱阿の忽秃赤刺温等なる子どもを追ひに出征して、垂河に追詰めて窮めて來ぬ。(親征録に曰く「辛未、遣將脱忽察兒率騎二千出哨西邊戎丁丑、上遣大將速不台拔都、

以鐵裹車輪、征蔑兒乞部、與先遣征西前鋒脱忽察兒二千騎、合、至嶺河、遇其長大戰、盡滅蔑兒乞還」と云ひ、喇失惕も、この戰を記して牛の年の事と、嶺河を眞河と書けり。元史本紀は、三年戊辰の也兒的石河の戰に「討蔑里乞部滅之」と書きて、十二年丁丑には速不台の征戰を載せず。速不台の傳に曰く「滅里吉部強盛不附。丙子、帝



康鄰に奔れる忽都

會諸將於禿兀刺河之黑林間誰能爲我征滅里吉者速不台請行帝壯而許之乃選裨將阿里出領百人先行覘其虛實速不台繼進云云己卯大軍至蟾河與滅里吉遇一戰而獲其二將盡降其眾其部主霍都奔欽察速不台追之與欽察戰于玉峪敗之とあり丙子は十二年丁丑の前年己卯は丁丑の二年後に於て親征錄集史と年紀合はず多遜は、嶺河を哲姆河と書きその戰を一二一六年即ち丙子の事とせり諸書を合せ考ふるに蓋子の年に軍を出し丑の年に垂河に戰ひ卯の年に餘孽悉く平ぎたるならん親征錄の嶺河喇失惕の眞河多遜の哲姆河速不台の傳の蟾河は、秘史の垂河と同トキカ異なるか知らず霍都の欽察に奔れることは卷八にも「忽都合惕赤刺温等の篋兒乞惕は康鄰欽察兀惕を過ぎ去りき」と云ひ土土哈の傳には太祖征蔑里乞其主火都奔欽察欽察國主亦納思納之太祖遣使諭之云云亦納思答云云太祖乃命將討之とあれども西域の諸史には更にその事なく喇失惕は忽都は乞魄察克に奔らんとしたるを蒙古の軍に捕へ殺されたり」と別喇津卷一第七十三頁に云ひ多遜の史には篋兒乞惕の會禿克脫干は蒙古に逐はれ眾を率ゐて氈篤の北に走りその下に殺され蒙古はその眾を海哩哈米赤兩河の間に敗りて滅ぼせりとあれば篋兒乞惕の走りて康鄰の地に入りたるは、實らうけれども欽察に奔れりと云へるは傳聞の誤りなるべし

古出魯克罕の勦滅

者別は、乃蠻の古出魯克罕を追ひて、撒哩黑昆に追詰めて、古出魯克を窮めて來ぬ（親征錄戊寅太祖十三年本華黎國王南征の次に別遣大將哲別攻曲出律可）

古出魯克の西遼篡奪

汗至撒里桓地克之とありてその簡略なること秘史と同じ遼史天祚紀の末に西遼の興亡を附記し遼の德宗耶律大石の自立より大石の妻感天太后塔不煙その子仁宗夷列夷列の妹承天太后普速完を歴て夷列の子直魯古に至り直魯古即位改元天禧在位三十四年時秋出獵乃蠻主屈出律以伏兵八千擒之而據其位襲遼衣冠尊直魯古爲太上皇皇后爲皇太后朝夕問起居以待終焉直魯古死遼絶とあり屈出律は即ち古出魯克にしてその西遼に奔れるは親征錄主吠尼に據るに太祖三年戊辰西紀一二〇八年にあり古出魯克の西遼を篡へるは錢大昕の考證と主吠尼の史とに據るに太祖六年辛未西紀一二一一年にあり直魯古の死は主吠尼喇失惕の書に據るに國を奪はれて憂悶二年を歴て病死したるなり長春の西游記に自金師破遼大石林牙領眾數千走西北移徙十餘年方至此地云云延袤萬里傳國幾百年乃滿失國依大石士馬復振盜據其土繼而算端西削其地天兵至乃滿尋滅算端亦亡と云へり林牙は學士を呼ぶ契丹語にして耶律大石の舊官なり乃滿失國依大石とは乃蠻の古出魯克逃げて大石の立てたる國に依れるを云ふ算端西削其地とは闊喇自姆の君速勒壇抹哈篋惕西遼の舊境失兒河以南を取れるを云ふ乃滿尋滅は古出魯克の滅びたるなり算端亦亡はこの戊寅の年より二年後にあり撒哩黑昆は集史に撒哩黑庫勒とあり今は撒哩庫勒と呼び葉兒羌河の上流にあり西は直に露西亞の領地に接す古出魯克の事蹟は主吠尼喇失惕の二書に詳なり元史には只曷思麥里の傳に曷思麥里西域谷則幹兒朶人初爲西遼闊兒罕近侍後爲谷則幹兒朶所屬可散八思哈長官太祖西征曷思麥里率可散等城酋長迎降大將哲伯以聞帝命曷思麥里從哲伯爲先鋒攻乃蠻克之斬其主曲出律

曷思麥里の傳の考證



哲伯令、曷思麥里、持曲出律、首往徇其地。若可失哈兒、押兒、牽幹端諸城、皆臨風降附。とあり。谷則、幹兒、朶朶、大城の義にして、垂河、今の楚河の濱に在り。西遼の都なり。遼史、天祚紀に、虎思、幹耳朶、金史、粘割、韓奴の傳に、骨斯、訛魯朶、耶律、楚材の西游錄に、虎司、窩魯朶と書けり。或は古思を略きて、幹兒朶とのみも云へり。元好問の大丞相、劉氏、先塋の碑、元史、郭寶玉の傳に、訛夷朶とあるは、兒を夷と誤りたるなり。闊兒罕は、秘史、卷五の古兒罕、親征錄の菊律、可汗なり。遼史に記せる如く、大石林牙、即位して、葛兒罕と號してより、子孫みなその號を襲ぎたるなり。可散は、西游錄に、可傘と書き、經世大典の圖には、柯散と書きて、察赤、今の塔什干の東南に在り。露西亞の地圖には、塔什干の東南に、今も喀散城あり。曷思麥里は、者別に降れるにて、この時、太祖は、未だ親征せざれば、傳に、太祖、西征とあるは、誤れり。可失哈兒は、今の喀什噶爾、押兒、牽は、今の葉爾羌、幹端は、今の和闐なり。

委兀惕降附の使

委兀惕の亦都兀惕は、成吉思合罕に使を遣りき。事は、

親征錄、集史、元史、みな、秘史より、委、親征錄に、まづ「己巳、太祖四年春、畏吾兒國主、亦都護、聞、上威名、遂殺契丹主、所置監國、沙監」とあり。亦都護は、即ち亦都兀惕、委兀惕の王號にして、集史には、亦的庫惕と云へり。この亦都兀惕の名は、巴而朶、阿而朶、斤と云ひ、元史に傳あり。哈刺亦哈赤北魯の傳には、八兒出阿兒朶、亦都護とあり。契丹は、合喇乞塔惕、即ち西遼にして、岳璘帖穆爾の傳には、西契丹とあり。西遼の畏兀を威制したること、畏兀の叛きて、その監國を殺したる事情は、哈刺亦哈赤北魯、岳璘帖穆爾

親征錄なる亦都護降附の始末

二人の傳に見ゆ、さて親征錄に、監國を殺したる處へ、太祖の使二人至りたれば、亦都護喜び、使二人を遣り、降附の意を奏さくめき。この時、蔑里乞の脱脫より、使至りたるを、亦都護はその使を殺し、又脱脫の子四人は、父を失ひ、也兒的、石河を涉りて至りたるを、崧河にて、禦ぎ戦へり。この戦は、秘史、卷八の初にある、不黑都兒麻の戦に續きて、額兒的、失河にて、多數溺れてより、西に奔るまでの間にあり。事なり。崧河は、巴兒朶の傳に、稽河とあり、古の昌八里に傍ひて流る、昌河、即ち今の昌吉河にして、委兀惕の都城の西にあり。太祖十二年、丁丑に、速不台の戦へる、崧河、速不台の傳に、蟾河とあるものは、名同じくして、實は異なり。この戦の後、亦都護は、使四人を遣り、蔑里乞の事を告げたれば、太祖は、又前の使二人を遣り、亦都護は、復、使を遣り、珍寶方物を奉れりとあり。これらの事を、皆太祖四年の事とせり。阿

惕乞喇黑親征錄に、乞力吉思の二使の一人を阿忒黑刺と云ひ、喇失惕も乞兒吉思の二使の一人を阿惕黑刺黒と云へば、修正秘史は、委兀惕の使を乞兒吉思の使と改め 答兒伯喇失惕は、太祖の二使の一人を迭兒拜と云へり、親征錄に、初に答兒伯とあるは、兒の字を落せるなり、後に答兒班

とあるは、拜を班と誤れるなり、これも委兀惕の使を太祖の使に混らしたるなり。二人を使とて奏して遣るには、雲霽れて母なる日母の如を見たるが如く、冰解けて河の水を得たるが如く、成吉思合罕の名と聲とを

警雲開見日  
冰泮得水



金帶之星裝  
衰衣之餘縷

亦都兀惕の  
來朝貢獻

聞きて甚歡べり成吉思合罕恩賜せば金の帶の緋金よ  
り大紅衣の帛片より得ば(分與せ)爾の第五の子となり  
て力を與へんと奏して遣りき。(親征録はこの辭を二章に分け  
て辭句を増し加へ前章は亦都

護の始めて二使を遣りたる時の辭と、後章は太祖六年に亦都護の入朝したる  
時の辭とせりその前章は「臣國聞皇帝威名故棄契丹舊好方將遣使來通誠意  
躬自效順豈料遠辱天使降臨下國譬雲開見日冰泮得水喜不勝矣而今而後盡  
率部眾爲僕爲子竭犬馬之勞也」と云ひその後章は「陛下若恩賜臣使遠者悉聞  
近者悉見綴衰衣之餘縷摘金帶之星裝誠願在陛下」その言につき成  
吉思合罕恩賜して答へ宣ひて遣るには「女をも與へん。  
第五の子となれ金銀眞珠東珠金欄總金欄段匹を持ち  
て亦都兀惕來よ」と宣ひて遣れば亦都兀惕は恩賜せら  
れたりとして喜びて金銀眞珠東珠段匹金欄總金欄緞子

阿勒阿勒屯  
の下嫁

拙赤の北征

を持ちて都兀兀惕來て成吉思合罕に見えたり。(親征録は、  
來よ」と太祖云へりとは云はず太祖の使二たび往きたる時亦都護の使復至りて  
珍寶方物を奉れりとありかくてそれより二年を歴て辛未(太祖六年)の春哈刺魯  
部主阿昔蘭可汗の來朝と同じ時に亦都護來朝して彼の衰衣金成吉思合罕  
は亦都兀惕に恩賜して阿勒阿勒屯を與へたり。(元史巴而  
の傳は全く親征録に本づきたれども巳の年の使者の辭より「雲開見日冰泮得  
水」の語を略きまた辛未朝帝于怯綠連河奏曰「陛下若恩願臣使臣得與陛下四  
子之末庶幾竭其犬馬之力」帝感其言使尙公主也立安敦且得序於諸子」とあり  
て衰衣金帶の語を略きたれば亦都兀惕の辭命として秘史に載せられたる面白  
き韻文は骨拔泥縮となれり公主表高昌公主位の處に也立可敦公主太祖女適亦都  
護巴而述阿兒忒的斤」とあり可敦は安敦の誤也立安敦は即ち阿勒阿勒屯なり喇  
失惕は正后の出に  
あらずと云へり)

兔の年(我が土御門天皇承元元年丁卯宋の開禧三年金の泰和)拙赤を  
右の手の軍にて林の民の處に出征せしめたり不合



忽都合別乞の降附

幹亦喇惕不哩牙惕諸部の降附

は、嚮導して往きたり。(親征録には、この年「遺案彈不兀刺二人、使乞力吉事は、この年より十一年後なる戊寅の年太祖十三年、哲別の曲出律を滅したる次に記し、「先吐麻部叛、上遣徵兵乞兒吉思部不從、亦叛去、遂先命大太子往討之、以不花爲前鋒」とあり、集史もほゞ同じ、不花は即) 幹亦喇惕の忽都合別乞(前十一部の亂に)は、禿綿(萬)幹亦喇惕の前に降り入りて來ぬ。來て拙赤を引ききて、禿綿幹亦喇惕の處に導きて、失黑失惕に入らゝめたり。(親征録には、丁卯の年、乞力吉思部降附し、その翌年戊辰の冬、二たび脱脫曲出律を征する時、幹亦刺部長忽都花別吉等、遇我前鋒、不戰而降、因用爲嚮導、至也兒的石河云云)とありて、拙赤に降れる忽都合を脱黑脫阿征伐の軍に降れりとせり、喇失惕も同じ、洪鈞の朮赤補傳の自注に曰く「本紀、幹亦刺之降在三年、而乞力吉思之附在二年、考) 拙赤は、幹亦喇惕不哩牙惕巴兒渾兀兒速惕合卜合納思康合思禿巴思を降して、(喇失惕の書に「客姆河の上流に八河ありて、幹亦喇惕は、その左に居り、その近き東に兀喇速惕帖連郭惕客思的米なる林の民は、拜喀

乞兒吉速惕の降附

勒湖の西に居りて、幹亦喇惕乞兒吉思と鄰り合へり、また「拜喀勒湖の東に庫哩禿刺思不哩牙惕禿馬惕四部あり、都て巴兒古惕と云ふ」と云へり、巴兒渾は、即ち巴兒古惕にて、卷一にその部の人巴兒忽歹篋兒干あり、太祖紀に八刺忽とあるも、巴兒古惕なり、喇失惕は、四部の總名とすれども、こゝに不哩牙惕と並べ、擧げられたれば、一部の名にも用ひたるなり、兀兒速惕は、即ち兀喇速惕なり、合卜合納思は、元史類編なる朮赤の傳に大方通鑑を引ききて、憾哈納思とあり、親征録に憾哈思とあるは、納の字を脱せるなり、元史地理志には、憾合納、劉哈刺拔都魯の傳には、憾哈納思と書けり、その地の事は、元史譯文證補の地理志西北地附錄釋地の下に詳なり、康合思禿巴思は、知らず、) 禿綿乞兒吉速惕の處に到れば、(乞兒吉速惕は、乞兒吉思の複稱なり、多遜曰く「乞兒吉思の住める地は甚廣く、安噶喇河の西、阿勒台山の北の東よりに居り、乃蠻はその南東にあり、客姆河、客姆客姆主惕は、その境内にあり、俗は遊牧なれども、城郭もあり」と云へり) 乞兒吉速惕の官人也、迪亦納勒、阿勒迪額兒、幹列別克的斤なる乞兒吉速惕の官人ども降り入りて、白き海青ども白き驢馬ども黒き貂鼠どもを持ち來て、拙赤に見えたり。(親征録には「遺案彈不兀刺二人、使乞力吉思部、其長幹羅思亦難及阿忒里刺二人、偕我使來、獻白海青名鷹也、太祖紀には「野牒亦納里部、阿里替也兒部、皆遣



失必兒以南  
林民の降附

昔別哩亞の  
名の起り

使來獻名鷹」とありて、本書と異なり。別喇津は、喇失惕を譯して「阿勒壇不刺の二人乞兒吉思に使用し、まづ一部に至り」と云ひて、「部の名も會長の名も、文字見えず」と注し、次の一部を也迪幹命、會長を兀魯思、亦納勒と云ふ。二會厚くもてなし、阿里克帖木兒、阿惕黑喇黑二人を遣して白き獵鳥を獻れり」と云へり。錄の亦難紀の亦納里は、亦納勒の訛なり。多遜は、喇失惕を引ききて「亦納勒は、乞兒吉思にて會長を稱する號なり」と云へば、也迪亦納勒は、也迪部の會長と云ふことにて、兀魯思又は幹囉思は、その名なるべし。名の見えざる會長は、阿勒迪額兒ならん。元史は、二つともに人の名を部の名に誤れり。阿里克帖木兒は、額兒篤曼の譯に、阿里別克帖木兒とあり、即ち幹列別克的斤なり。秘史に無き一使を阿惕黑喇黑と云へるに據れば、錄の阿忒里刺は、黒を里に誤りたるにて、秘史の委兀惕の使を修正、秘史は乞兒吉思に移せるなり。

失必兒 客思的音 巴亦惕 秃合思 田列克 脫額列思 塔思 巴只 吉惕より這廂なる林の民を拙赤降して、乞兒吉速惕の 萬戸千戸の官人どもを林の民の官人どもを伴れ來て、成吉思合罕に白き海青ども白き驕馬ども黒き貂鼠どもをもて見えさせたり。(失必兒は、今の昔別哩亞なり。喇失惕は、乞兒吉思の事を述べて「その國は、阿別兒昔必

巴只吉惕は失  
必兒の西にあ  
る部落なり卷  
十一なる速別  
額台西征の條  
に注あり

幹亦喇惕の  
驕馬兄弟

兒の境に流る、安噶喇の大河まで廣がれり」と云ひ、元史玉哇失の傳に「與海都將某某等戰於亦必兒失必兒之地」とあり。篋撒列克阿刺ト撒兒(第十四世紀の前半の人)は、昔必兒即阿必兒と書き、亦奔阿喇ト沙は「乞魄察克は、北は阿必兒即昔必兒に界す」と云へり。合塔蘭地圖の北邊の薛不兒は、明に昔必兒を表せり。西紀一三九四年より一四二七年まで亞細亞の諸國に遊び、帖木兒大王の遠征にも伴ひし失勒篤別兒格の脱字勒思克より四里餘り河上に、昔必兒と云へる塔塔兒の城ありて、一五八一年に也兒馬克に取られ、その後嚕西亞人は、その名を探りて北亞細亞の總名に推廣めたり。客思的音は、親征錄に克失的迷とあり、即喇失惕の客思的米なり。田列克は、卷八に帖良古惕、親征錄に帖良兀とあり、即喇失惕の帖連郭惕なり。不喇惕施乃迭兒は、帖連古惕は、唐書の鐵勒より出でたるならん」と云へり。脱額列思は、卷八に脱幹列思とあり、即喇失惕の秃刺思なり。巴亦惕秃合思塔思、巴只吉惕は、未考へず。親征錄なる戊寅朮赤北征の條には「以不花爲先鋒、追乞兒吉思、至亦馬兒河而還。大太子領兵涉謙河、冰順下、招降不困克兒爲思、憾哈思、帖良兀克失的迷、火因亦而干諸部」とあり。亦馬兒河は知らず。謙河は、即客姆河今の也尼塞河の上流なり。不困克兒爲思は、讀み難し。恐らくは誤脱あらん。火因亦而干は、秘史には槐因亦兒堅とあり。槐因は、林の亦兒堅は、民にて、林の民なり。即諸部の統名にして、部の名に非ず。)

幹亦喇惕の驕馬兄弟



脱喇勒赤と  
哈答との同  
異

て來ぬ」として恩賜して、彼の子亦納勒赤に扯扯亦干を  
 與へたり。亦納勒赤の兄脱喇勒赤に拙赤の女豁雷罕を  
 與へたり。(喇失惕は「成吉思汗の第二の女扯扯干は、忽秃合別乞の子脱喇勒赤  
 に嫁げり」と云へり。扯扯干は即扯扯亦干なれども、脱喇勒赤は亦納勒  
 赤に非ずして、却てその兄脱喇勒赤に似たり。公主表もそれに同じく、延安公主位  
 の處に「闊闕干公主、適脱亦列赤駙馬」とあり。然らば豁雷罕の夫を亦納勒赤とする  
 かと云ふに、然らず。闊闕干公主の前に「火魯公主、適哈答駙馬」とありて、火魯は豁雷  
 罕の下略に似たれども、哈答は、亦納勒赤にも脱喇勒赤にも似ず。錢大昕の氏族表  
 は、祕史と元史とを折衷し、「哈答、一作脱劣勒赤、尙太祖孫女火雷公主、二脱亦列赤、一  
 作亦納勒赤、尙太祖女闊闕干公主」と書きたれども、哈答は、八十八功臣の内に既に  
 合歹古喇堅とありて、卷十二にも合歹あり、親征録の哈台、憲宗紀の合答、多遜の喀答  
 克などみなこの哈答なるべく、脱喇勒赤は、八十八功臣の定まりたる後に降附して  
 駙馬となれる人なれば、その別人なること明なり。然れども哈答合歹を脱喇勒赤に  
 非ずとし、火魯火雷を豁雷罕に非ずとすれば、又不都合なることあり。火魯公主は、  
 闊闕干公主と共に、公主表延安公主位の初に擧げられ、その次に公主三人ありて、  
 末に「延安公主、適延安王也不干」とあり、食貨志には「火雷公主位丙申年分撥延安府  
 九千七百九十六戸」とあり。闊闕干は、即扯扯干扯扯亦干にして、幹亦喇惕の忽都合別乞  
 の子に嫁ぎたること確なる上は、延安王の家は、即忽都合の子孫にして、火雷公主

汪古惕の駙  
馬

拙赤初陣の  
功

孛囉忽勒の  
秃馬惕征伐

は、始めてその家に嫁ぎたる人なれば、その夫は必ず幹亦喇惕の首領なるべし。然  
 らずば延安公主位を火雷公主位とも云ふべき筈なく、然らば哈答合歹は、果して  
 脱喇勒赤なるか。この疑ひは、(元史の阿剌海別吉公主) 阿剌合別乞(元史の阿剌海別吉公主) を汪古惕(汪古惕の阿剌  
 海別吉公主) に與へたり。(この事につきては、卷八に委しく論じたり。九十五  
 忽哩古喇堅) に與へたり。(この千戸を定められたる時は、まだ公主を娶らざり  
 一時なれども、後の稱號に依り古喇堅と書きたるなり。) 成吉思合罕は、拙赤を恩賞して宣  
 はく「我が子どもの兄なる汝は、家より纔に出でて、道  
 好くある(道の遠き) 往きたる地に、男駙馬を傷けず苦めず、  
 て、福ある林の民を降して來ぬ。民を與へん」と勅あり  
 き。  
 又孛囉忽勒那顔(親征録博羅渾那顔、元史太祖紀鉢魯完) を豁哩秃馬惕の民の  
 處に出征せしめたり。(豁哩秃馬惕は、卷一に見えたり。豁哩は、善と云ふ  
 美稱なれば、常には略きて只秃馬惕と云ふ。親征



勇婦孛脫灰

孛囉忽勒の殺され

録には吐麻部元史本紀には秃滿部とあり、兵志三には火里秃麻ともあり。莎豁兒死にたれば、その妻孛脫灰塔兒渾(勇婦)は、秃馬惕の民を知りて居りき。(歹都忽勒莎豁兒は、明譯文に歹都秃勒とあり、忽を秃に誤り、莎豁兒を略けり、倭勒甫の書に塔秃刺克速喀兒とあるは、音稍近けれども、刺克は、忽勒を倒にせるに似たり。親征録に都刺莎合兒とあるは、都の上歹又は塔を脱く、刺の下克の字を略けるなり)孛囉忽勒那顔到りて、三人にて大軍より前へ歩み往きて、夕暮に覺えず難き林の中に徑に依り歩みたれば、彼等の斥候に後より脅されて、徑を阻みて、孛囉忽勒那顔を拏へて殺しけり。秃馬惕は孛囉忽勒を殺せりと知りて、成吉思合罕甚く怒りて、自ら出馬せんとしたれば、孛斡兒出、木合黎二人は、成吉思合罕を止まるまで諫めた

朵兒伯多黑申の秃馬惕征服

り。却、朵兒別惕(朵兒邊の複稱)の朵兒伯多黑申(親征録都魯伯、元史朵魯伯)に任し軍を嚴に整へて、長生の上帝に禱りて、秃馬惕の民を降さんと試みよと勅ありき。朵兒伯は、軍を整へて、前に軍の行きたる、斥候の守りたる路徑の口口に、虚しき勢を張りて、紅き強牛(野牛の一種)の行きたる路に依り、軍士どもに號令し、軍の數ある(數に具はれる)人心臆せば打たんが爲に、人ごとに十の筈を負はせて、斧鑿(蒙語兀哈里、義を知鉢は、字典に音奔、平木器と)鋸鑿なる人毎の(人ごとに)器械を整へさせて、紅き強牛の行きたる路に依り、路に立てる樹どもを斷ち斫らせて、鋸らゝめて路をなして、山の上



に上りたれば、禿馬惕の民の天窗の上より、不意にて筵會して居る處を虜へたり。

撃へられたる二將の助かり

前に豁兒赤那顏、忽都合別乞二人は、禿馬惕に撃へられて、孛脫灰塔兒渾の處にそこにありき。豁兒赤の撃へられたる理由は、禿馬惕の民の女子どもは美しくあり、三十の妻を取れと勅ありたるにつき、禿馬惕の民の女子どもを取らんとて往きたるに、前に降りたる民は、却て敵となりて、豁兒赤那顏を撃へたりき。豁兒赤は禿馬惕に撃へられたりと成吉思合罕知りて、「林の民の行は、忽都合知れるぞ」と宣ひて遣りたれば、忽都合別乞

三將の恩賜

又撃へられき。「こたび」禿馬惕の民を降し畢へたれば、孛囉忽勒の骨の故に百の禿馬惕を賜へり。(孛囉忽勒の遺族に賜はりたるなり) 豁兒赤は、三十の女子を取れり。忽都合別乞に孛脫灰塔兒渾を賜へり。(親征録は、禿馬惕征伐を丁丑(太祖十二年)に移し、簡短に「是二將討平之、博羅渾那顏卒於彼」と記せり。元史は、それよりも簡略にて、たゞ「是歲、禿滿部民叛、命鉢魯完朶魯伯討平之」とありて、鉢魯完の殺されたる事も云はず。蓋四傑の一人なることに心附かざりしならん。)

母と子弟とに民の分配

成吉思合罕勅ありて「母に子どもに弟どもに民を分けて與へん」とて與ふる時國民を聚むるに艱難したるは、母なるぞ。我が子どもは、拙赤なるぞ。我が弟どもの末は、斡惕赤斤なるぞ」と宣ひて、母には斡惕赤斤



の分前ワケマヘとなして萬マンの民ミンを與アタへたり。母ハハは、不足フツソクに思オモひて聲コエをなさざりき。拙赤ヂュチチに九千クウセンの民ミンを與アタへたり。察阿チヤア歹ダイに八千ハツセンの民ミンを與アタへたり。斡歌歹オゴダイに五千ゴセンの民ミンを與アタへたり。脱雷トトレイに五千ゴセンの民ミンを與アタへたり。(元史の宗室世系表に「太祖皇帝六子、長朮赤太子、次二察合台太子、次三太宗皇帝、次四拖雷、即睿宗也、次五兀魯赤、無嗣、次六闊列堅太子」とあり。拖雷まで四人は、光獻翼聖皇后の子なり。兀魯赤闊列堅は、庶子にしてかつ幼き故に、分民なかり)合撒兒カッサールに四千シセンの民ミンを與アタへたり。阿勒赤歹アルチダイに二千ニセンの民ミンを與アタへたり。別勒古台ベレルグタイに一千五百イツセンゴヒヤクの民ミンを與アタへたり。(系表に「烈祖神元皇帝五子、長太祖皇帝、次二朮只哈兒王、次三哈赤温大王、次四鐵木哥斡赤斤、所謂皇太弟國王、斡噴那顏者也、次五別里古台大王」とあり。朮只哈兒は、太祖紀に「皇弟哈撒兒、食貨志に「朮只哈撒兒大王」とあり。表の哈兒は、撒の字を脱したり。合赤温は、早く死にたる故に、その子に民を與へたり。この阿勒赤歹も、亦魯該の親屬なる阿勒赤歹も、卷九なる額勒只吉歹とは名稍異なり。元史にも太宗紀に「按赤帶、定宗憲宗世祖紀に「按只帶」とありて、阿勒赤吉歹と云へる事無ければ、世系表なる按只

答阿哩台の處分

吉台キタイの吉キの字ジは、恐コらくは衍字ジツジならん。(卷一の答哩台斡惕赤斤、太祖紀答力台、世系表答里眞、食貨志太祖叔答里眞官人)は、客キヤク咧レ亦惕イトに與アタへたりとて「眼メの背處セウヂョに黜シツけん」と宣ノリへば、孛斡兒出ボオケルチウ、木合黎ムカレ、失吉忽秃忽シキコトコト三人言イはく「己ミが火ヒを滅メすが如ゴトく、己ミが家イヘを壞ヤブるが如ゴトく、爾ナガレコトの善ヨシき父チチの遺念イナヒは、獨ヒトリ爾ナガレコトの叔父ナガレコト殘ノコりてあるを、いかにぞ棄スてん。彼の氣キを附ツけざりしことを勿ナ想オモひ。爾ナガレコトの好ヨシき父チチの末弟オウテイに營盤イヘカの煙ケムリを立てさせ合アひて居ツれ」と云イはれて、鼻ハナより煙ケムリ搶ツくまで明アカラかに話ハナされて(意明ならざれども、明本合合思、太祖タイソウ心ココロ下シタ辛酸シンシヤン、「諾クハへり」として、好ヨシき父チチを想オモひて、孛斡兒出ボオケルチウ、木合里ムカレ、失吉忽秃忽シキコトコト三人サンニの話ハナシにて靜シヅまりたるぞ(明怒イカリ遂ツギ息クヒ了ヤリ)(好き父チチ以下シタは、叙



三弟四子の傳

に太祖の語氣として、「我」の字を末に加へたるは誤りならん。

母に幹惕赤斤に萬の民を與へて、官人どもより古出闊闕出種賽豁兒合孫(八十八の功臣の中にて第十第七第十八第三十三第十九)四人を傳けたり。拙赤には忽難蒙客兀兒客帖(功臣の第七第三十九第五十)三人を傳けたり。察阿歹には合喇察兒蒙客亦多忽歹(功臣の第二十九第三十七第六十六)三人を傳けたり。又成吉思合罕宣はく「察阿歹は、猛くあり。細なる性あるなり。闊客擲思(即闊闕擲思、功臣の第三十)は、晩く早く(朝夕)前に居て、思へる事を語りて居れ」と勅ありき。(明譯)又説察阿歹性剛。子細教闊客擲思早晚根前説話者(とあるに據れば、原文「細なる性あるなり」の「なり」は、衍字にて、「細なる性ある」は、闊客擲思に係る詞ならん)幹歌歹には亦魯格(即亦魯該、功臣)

の第五十一人)を傳けたり。拖雷には哲歹(功臣の第二十)巴刺(功臣の第三十五なる巴刺斡囉納兒台)二人を傳けたり。合撒兒には者卜客(功臣の第四十四)を傳けたり。阿勒赤歹には察兀兒孩(功臣の第五十八)を傳けたり。

晃裕塔惕に合撒兒の打たれ

晃裕塔惕(晃裕壇の複稱)の蒙力克額赤格の子ども七人ありき。七人の中に闊闕出帖卜騰格哩(闊闕出と云ふ神巫)ありき。(元史憲宗紀の初に「母曰莊聖

太后怯烈氏、歲戊辰十二月三日、生帝。時有黃忽答部知天象者、言帝後必大貴、故以蒙哥爲名。蒙哥、華言長生也」とあり。黃忽答は、即晃裕塔惕にして、いはゆる天象を知る者は、即この帖卜騰格哩なり。歲戊辰は、太祖即位の三年なれば、この晃裕壇の騷動は、三年以後に起れる事なるべし。その七人の晃裕壇は、合撒兒を黨して打ちたりき。合撒兒は、七人の晃裕壇に、黨して打たれたり」と成吉思合罕に懇へたれば、



帖卜騰格哩  
の讒言

成吉思合罕は別の事にて怒りて在せる閒に申したる故に、成吉思合罕は、怒の裏に合撒兒に宣はく「命あるものに勝たれざる人」なりき、汝（明）你平日説人不能敵（譯）いかなぞ勝たれたる、汝」と云はれて、合撒兒涙を墮し起ちて去りて、合撒兒憂へて三日來ざりき。そこに帖卜騰格哩は、成吉思合罕に白さく「長生の上帝の勅にて罕を定むる」神告を宣へり。「二次は帖木眞國を取れ」と宣へり。「二次は合撒兒を」と宣へり。合撒兒を圖らずば、「事」知られずあるぞ」と云はれて、成吉思合罕は、その夜出馬して、合撒兒を拏へに往きたれば、古出闊闊出二人は合

太祖の性急

母に怒られ  
たる太祖の  
愧懼

撒兒を拏へに往きたり」と母に告げけり。母知ると、夜便續きて、白き駱駝に引かせて黒き車にて夜通し行き、日出づる頃到れば、成吉思合罕は、合撒兒の袖を縛りて、その帽帯を褫ぎて、その言を問ひ居る處に、母に到られて、成吉思合罕驚きて母を畏れたり。母怒りて到りて車より降り、母自合撒兒の縛れる袖を解きて放し、その帽帯を合撒兒に與へて、母怒りて氣（怒氣）を壓へかね、盤脚坐て兩の乳を出して兩の膝の上のせて言はく「見たりや、汝の乳（汁乳）を飲みたる乳（房乳）は、此なり。この尋ね追ひて、胞衣を咬みたる、臍帯を斷ちたる合撒兒は、

合答倫

合兒必速

合札

灰亦



何をか爲たる。(合撒兒は、猛き野犬の名を采りて名づけたるなり。故にそ  
の野犬の猛く生れたるさまを韻語に云ひて、合撒兒の勇  
猛なるに)帖木眞は、我が此の一つの乳を盡したりき。合  
赤温、幹惕赤斤は、二人となりて一つの乳を盡さざりき。  
合撒兒こそは、我が兩の乳皆を盡して、我が胷寬にな  
るまで休まゝめて、胷を寬になしたりき。それが爲に  
技能ある我が帖木眞は、胷云云。(こゝに脱文あり、補ふこと能はず)技能ある  
我が合撒兒は、射る力技能ある故に、叛きて(語譯に交參と  
あれども、今文  
合兒不察)出でたるを鏑失射て降らゝめたりき。驚きて出  
でたるを遠箭射て降らゝめたりき。今敵の人を窮め  
たりと云ひて、合撒兒を見る(用ふる)能はざるなり、汝と云

へり。母を休まゝめ畢へて、成吉思合罕宣はく「母に怒ら  
れて、畏れも畏れたり、羞ちも羞ちたり、我」と宣ひて、「退  
かん、我等」と宣ひて退きたり。母に知らゝめず陰に合  
撒兒の民を取りて、合撒兒に千四百の民を與へたり。  
母知りて、心に「憂へ」(原文に脱ちたるを、明  
譯に依りて補へり)早く老いたる理由  
はかくあり。札刺亦兒の者卜客は、そこに驚きて、巴兒忽  
眞に入り逃れたり。

その後九種の方言ある民、帖卜騰格哩の處に聚り  
て、成吉思合罕の聚馬處より多く帖卜騰格哩の處に聚  
るとなれり。かく聚れる時、帖木格幹惕赤斤に屬へる民

帖卜騰格哩  
の横暴



は、帖卜騰格哩の處に去りき。斡惕赤斤那顔は、去りたる民を索めに莎豁兒と云ふ使を遣りき。帖卜騰格哩は、莎豁兒使に言へらく「斡惕赤斤、汝等二女使となりき」と云ひて、(この言意通せず。二女とは、莎豁兒と馬とを云ひ、莎豁兒を馬に比べ女に比べて辱めたるならんか。)莎豁兒使を打ちて、歩ませてその鞍を負はせて回らめき。斡惕赤斤は、莎豁兒使を打ちて歩ませ致せられて、明朝斡惕赤斤自帖卜騰格哩の處に往きて言はく「莎豁兒使を遣りたれば、打ちて歩ませ致せき。今我民を索めに來つ」と云はれて、七人の晃豁壇は、斡惕赤斤をここよりそこより圍みて「莎豁兒使を汝の致せたるは、善く有り」と云ひ

斡惕赤斤の泣き訴へ

て、(明譯)你如何敢差人來取百姓(とあれば原文には打消の副詞脱ちたるならん)拏へんと打たんと做さるゝに懼れて、斡惕赤斤那顔言はく「使を我が致せたるは、善からず」と云ひき。七人の晃豁壇言はく「善からずあらば、懺悔して跪け」と云ひて、帖卜騰格哩の後より跪かせけり。民をも與へられずして、斡惕赤斤は、明朝早く成吉思合罕に、起きざるに寢床の内に在す處に入りて、哭き跪きて申さく「九種の方言ある民は、帖卜騰格哩の處に聚られて、我に屬へる民を帖卜騰格哩より索めに莎豁兒と云ふ使を遣りたるに、我が莎豁兒使を打ちて歩ませ鞍を負はせて致せられて、我自



孛兒帖兀眞の概み言

索めに往けば、七人の晃豁壇に、こゝよりそこより圍みて懺悔せしめて、帖卜騰格哩の後より跪かせられたりと云ひ哭きたり。成吉思合罕、聲を出さざるに、孛兒帖兀眞は、寢床の内に起きて坐りて、衾の領にて胃を蔽ひて、斡惕赤斤の哭けるを見て、涙を墮して言はく「何をかする晃豁壇ぞ。彼等は、先頃合撒兒をも黨して打ちてありき。今又この斡惕赤斤をいかにぞ後より跪かせたる。いかなる道理か有り。況この檜松の如き爾が弟だちをかく害ひ合へり。實に又久後老木の如き爾が身傾き去らば、麻穰の如き爾が國民を誰にか知らしめ

捏古思

捏惕客勒

元年

捏兀列

帖卜騰格哩の打取り

ん、彼等。柱の如き爾が身倒れ去らば、羣雀の如き爾が國民を誰にか知らしめん、彼等。檜松の如き爾が弟だちをかく害ふ我が家人は、三人四人の我が小き弱きものども成長するまでは、いかにぞ知らしめん、彼等。何をかする晃豁壇なりし、彼等。弟だちを彼等にかく做さしめて、いかにぞ見ておはせん、爾」と云ひて、孛兒帖兀眞は涙を墮したり。孛兒帖兀眞のこの言につき、成吉思合罕は、斡惕赤斤に宣はく「帖卜騰格哩今來ん。爲し得ることをいかにも行ひ合はば、汝知れ」と宣へり。その時斡惕赤斤起ちて涙を拭ひ出でて、三人の力士を備へて



立てり。暫ありて蒙力克額赤格は、七人の子どもと来て、  
 七人皆入りて、帖卜騰格哩は、酒局の右の邊に坐ると、  
 斡惕赤斤は、帖卜騰格哩の領を拏へて、「昨の日我を懺  
 悔せしめたりき、汝試み合はん」と云ひて、彼の領を拏  
 へて門の處に拖きたり。帖卜騰格哩は、斡惕赤斤を迎へ  
 領を拏へて搏ち合へり。帖卜騰格哩の帽は、搏ち合ふ時  
 に火盤の上に落ちたり。蒙力克額赤格は、その帽を取り  
 て嗅きて懷に置きたり。成吉思合罕宣はく「出でて力士  
 の力を争ひ合へ」と宣へり。斡惕赤斤は、帖卜騰格哩を拖  
 きて出づる時、門の闕の間に先に備へたる三人の力

士迎へて、帖卜騰格哩を拏へ拖きて出でて、彼の脊梁を  
 折りて、左の邊の車の端に去てて、斡惕赤斤入りて言  
 はく「帖卜騰格哩は、我を懺悔せしめたりき。試みんと云  
 へば、肯かす。欺きて臥したり。尋常の伴なりき」と云へ  
 ば、蒙力克額赤格覺りて、涙を墮して言はく「大なる地に  
 土塊の然有りより、海なす河に小川のくかありより、  
 伴となれり、我明我自皇帝未起創之先、做伴當到  
 今日」と云ふとひとしく、六人の見豁壇なる彼の子ど  
 もは、門を塞ぎて、火盤の周圍に立ちて、その袖を挽か  
 れて、成吉思合罕恐れて迫られて、「躲れ出でん」と宣ひ



て出づれば、成吉思合罕の周圍に箭筒士侍衛等繞りて立てり。帖卜騰格哩を車の端に脊梁を折りて去てたるを成吉思合罕御覽して、後方より一つの青き帳房を持ち來させて、帖卜騰格哩の上に被はせて、「駕車に「我を」入らうめよ。起たん」と宣ひて、そこより起りたり。

帖卜の死體の失せ

帖卜(帖卜騰格哩の略稱)を被ひたる帳房の天窗に蓋して、門を壓へて人に守らせられたれば、第三の夜、日黄なる時(明將曉)、天窗開けて身ぐるみ出でけり。審むれば、實に帖卜彼の「出でたる」は、そこに審められたり。成吉思合罕宣はく「帖卜騰格哩は、我が弟どもに手足を致したる故に、

蒙力克額赤格の責められ

我が弟どもの間に、跡形なき讒言の故に、上帝に愛まれずして、命を身ぐるみ持ちて去られたるぞ」と宣へり。成吉思合罕は、蒙力克額赤格をそこに責めけらく「子どもを性行を制せず、「我と」齊しからんと思へる故に、「禍は」帖卜騰格哩の頭に到りぬ。汝等。汝等のかゝる性行を覺れるならば、札木合、阿勒壇、忽察兒等の「如き」理由あるものと做さるべきなりき。汝等」と宣ひて、蒙力克額赤格を責めて、責め畢へてさて「朝に言へるを夕に變へば、夕に言へるを朝に變へば、恥(恥づべ)と必云はれん。只前に言を定められたるぞ、彼の事を(明因在先説定免



汝死有來罷」とて、恩賜して怒を息めたり。「遠越する  
 性行を引締めたりせば、蒙力克額赤格の子孫に誰か齊  
 しき者あらん」と宣へり。帖卜騰格哩を無くなすと、晃豁  
 壇の顔色は消失せけるぞ。(こゝにて秘史正集十卷は終れり。次の二  
 卷は續集なり。卷八に虎の年丙寅の即位  
 を記してよりこの卷の初までは、功臣の恩賞、親衛の制度を定むる詔勅を列ね、次  
 に合兒魯兀惕の降服、篋兒乞惕古出魯克の勦滅、委兀惕の親附を記し、次に兔の年丁  
 卯と年を掲げて、朮赤の北征、禿馬惕の征服、皇族の分民、傅相の事を記し、晃豁壇の  
 敗滅を以て終れり。さればこの集は、太祖二年丁卯に終れるが如くなれども、古出魯  
 克の勦滅は、太祖元年に非ずして、實は十三年戊寅にあること甚確なれば、篋兒乞惕  
 の勦滅も、親征錄集史の十二年丁丑とせるに従はざるべからず。續集は、太祖六年辛  
 未の征金の役より始まりたるに、この集に已に十二年丁丑十三年戊寅の事を載  
 せたるはいかにと云ふに、そは怪むべき事に非ず。蓋この集の成れるは、征金の役  
 の起れる後なれども、征金の役は、未事竣らざりし故に、後の記録に譲りて、この  
 集には載せず。篋兒乞惕古出魯克の勦滅は、卷三の篋兒乞惕征伐より、卷五卷七の乃  
 蠻征伐より引續きたる戡定の大業なるに由り、その局を結ばんが爲に、  
 太祖騰極の續きに、年をも掲げずに十餘年後の事を附記したるなり。)



成吉思汗實錄卷の十終り。

金國征伐の  
始まり

國交の破裂

成吉思汗實錄卷の十一。(明譯本の原の名は、元朝秘史續)  
集卷一次の卷も、これに準ふ)

元太宗十二年、漠北文臣無名氏、以蒙古文委兀字續撰。

明洪武十五年、翰林侍講火原潔等、漢字音譯俗語旁譯。

日本明治三十九年、盛岡那珂通世、以和文直譯附校注。

その後成吉思合罕は、羊の年(我が順徳天皇建暦元年辛未、宋の寧宗嘉定四年、金帝衛の紹王永濟)

大安三年、元の太祖六年、西紀一) 乞塔惕の民の處に出征せり。撫州

を取りて、(撫州は、金の西京路の一州にして、張家口の外、今の鎮黃旗等四旗の牧廠の西南二十清里にありき、金國征伐の始まりの事は、元史

太祖紀に元年丙寅、帝始議伐金、初金殺帝、親咸補海罕、帝欲復讐、會金降俘等、具言金主璟肆行暴虐、帝乃定議致討、然未敢輕動也、木華黎の傳に、金之降者、皆言

其主璟殺戮宗親、荒淫日恣、帝曰、朕出師有名矣、又太祖紀に、五年庚午春、金謀來伐、築烏沙堡、帝遣進別、襲殺其眾、遂略地而東、初帝貢歲幣于金、金主使衛王允濟

受貢於靜州、帝見允濟不為禮、允濟歸、欲請兵攻之、會金主璟殂、允濟嗣位、有詔至國、傳言當拜受、帝問金使曰、新君爲誰、金使曰、衛王也、帝遽南面唾曰、我謂中原



太祖五年庚午の出兵

皇帝是天上人做此等庸儒亦爲之耶何以拜爲一即乘馬北去金使還言允濟益怒欲俟帝再入貢就進場害之帝知之遂與金絕益嚴兵爲備」と云ひ、金國志にも「大安元年敵人開金主新立而喜曰彼老儒無能不足畏也遂決意南侵」と云へり、豐端開けたる後、金國の事情は、兩朝綱目備要に「允濟遣眾分屯山後欲襲殺鐵木眞、然後引兵深入會金之乳軍有詣蒙古告其事者蒙古遣人伺之得實遂遷延不進」と云ひ、金史衛紹王本紀に「大安二年九月丙午京師戒嚴上日出巡撫百官請視朝不允是歲禁百姓不得傳說邊事」續通鑑綱目に「金納哈買住守北鄙知蒙古將侵邊奔告于金主云云金主以其擅生邊隙囚之」また蒙古數侵掠金西北之境其勢漸盛金人皇皇遂禁百姓傳說邊事」とあり、畢沅の續資治通鑑は、金史續綱目の文に據り「金承平日久驟聞蒙古用兵人情恒懼流言四起九月丙午中都戒嚴云云」既而知蒙古未嘗大舉始解嚴旋禁百姓不得傳說邊事」と書けり、諸書を參考するに蒙古の南征は實に五年庚午より始まりたれども、但鳥沙堡を取れるは親征録も金史獨吉思忠の傳承裕の傳も、皆明年辛未の事とすれば、元史の五年に載せたるは誤れり、かくて六年辛未には親征録に「秋上始誓眾南征克大水濼又拔鳥沙堡及昌桓撫等州大太子朮赤二太子察合台三太子窩闊台破雲內東勝武宣寧豐靖等州金人懼棄西京」とあり、續綱目には蒙古侵擾雲中九原連歲不休嘉定四年遂破大水濼以進金主始恐四月釋買住而遣西北路招討使粘合合打求和蒙古主不許金主命平章政事獨吉千家奴參知政事完顏胡沙行省事于撫州西京留守紇石烈胡沙虎行樞密院事以禦蒙古秋千家奴胡沙至鳥沙堡未及設備蒙古兵奄至拔鳥沙堡及鳥月營八月蒙古主乘勝破白登城遂攻西京凡七日胡沙虎懼以麾下

太祖六年辛未の親征

元史の叙事の傾倒復沓

棄城突圍遁去蒙古主以精騎三千馳之金兵大敗追至翠屏口遂取西京及桓撫州」と書けり、この文は、金國志金史本紀獨吉思忠(即千家奴)承裕(即完顏胡沙)紇石烈執中(即胡沙虎)の傳に據り、隱括したるものなれば、親征録よりは委しく、元史太祖紀よりは確實なり、只「破白登城遂攻西京凡七日」と云へるは、察罕の傳なる野狐嶺の戰に「圍白樓七日拔之」とあるを誤會して採れるに似たり、また耶律楚材の湛然居士集に進庚午元曆表あり、「歲在庚午天啓宸衷決志南征辛未之春天兵南度不五年而天下略定此天授也非人力所能及也」と云へれば、太祖の親征は、春にして秋にあらず、親征録の「秋上始誓眾南征」は、固より非にして、衛紹王紀の「大安三年四月に始めて太祖の來征を書きたるも、未是ならず、これのみは、太祖紀の六年辛未春二月帝自將南伐」と云へるに従ふべし、蓋太祖の親征は春にあり、金帝の和を求め邊に備へたるは夏にあり、西京諸州の取られたるは秋にあるなり、然るに太祖紀この二三年の間の叙事は、傾倒復沓にして、その失數ふるに暇あらず、まづ二月帝自將南伐、敗金將定薛於野狐嶺、取大水濼豐利等縣、金復築鳥沙堡、秋七月命遮別攻鳥沙堡及鳥月營拔之」とある野狐嶺の戰は、豐利等縣即撫州を取れる後にあるを、その前に記して、明年壬申に至り復野狐嶺の戰を記し、撫州を取れるは、鳥沙堡を取れる後なるを、その前に記して、明年復それを記し、鳥沙堡を拔くは、今年一たびなるを、已に去年に記し、今年に至り「金復築鳥沙堡」の一句を加へて、復記したり、その病の本を尋ぬるに、太祖紀は、親征録、金史、金國志等の諸書を雜へ採り、咀嚼融會せずして、筆に任せて列記したるに由れるなり、故に鳥沙堡を取れる事は、或書に據りて、五年春に記し、親征録に據りて、復六年秋に記せり、撫州即



野狐嶺の戰

豐利等縣を取れる事は、或書に據りて、六年春に記し、親征録に六年秋として記せる「取昌桓撫等州」をば七年春にまはせり。野狐嶺の戰は、察罕の傳の本づきたる記録に據りて、六年春に記し、親征録に六年秋として記したる「獵兒背即野狐嶺の戰」をば七年春にまはせり。獵兒背の戰に續きたる會合堡の戰は、金史承裕の傳に據り、六年八月に記し、地名も宣平の會河川として、親征録には據らず。親征録に據れば、七年宣德府を破り、次に德興府に克ちたるを、元史は、宣德府に克つを八年七月に記し、德興府を抜くをば、金國志に據りて、六年九月に記し、又或書に據りて、七年九月に記し、その異名を用ひて奉聖州と云へるは、金國志に據れるにも似たり。さて後に親征録の文を採りて、八年七月克宣德府の次に又記し、親征録の「後金人復收之、癸酉八年秋上復破之」をば削れり。重複の最驚くべきは、哲別の居庸關を破りたる事にて、金國志金史本紀に據りて、早くも六年九月に記し、八年七月に至り、親征録に據り、懷來居庸の戰を記せり。これらの重複あることを悟らずして元史を讀まば、何が何やら少も分らず、恰も諸葛孔明の「八陣變化の中に入りたるが如くなるべし」の語に依り越えて、**忽捏堅荅巴**、忽捏堅は狐荅巴は峠なり。漢名は野狐嶺と云ひ、直隸宣化府萬全縣の西北三十清里、張家口の外に在り、畿輔通志に「勢極高峻、風力猛烈、雁飛遇風輒墮地」とあり。この峠は、たい越えたるに非ず。親征録に「上之將發撫州也、金人以招討九斤監軍爲奴等領大軍、設備於野狐嶺、又以參政胡沙率軍爲後繼、契丹軍帥謀謂九斤曰、聞彼新破撫州、以所獲物分賜軍中、馬牧於野、出不虞之際、宜速騎以掩之也。」九斤曰、此危道也、不若馬步俱進、爲計萬全。」上聞、金馬

會河堡の戰

至、進拒獵兒嘴、この間に金の使石抹明安の降れることを記せり。遂與九斤戰、大破之。其人馬蹂躪死者不可勝計。因勝、彼復破胡沙軍於會合堡。金人精銳盡沒於此」とあり。九斤は、太祖紀に「紇石烈九斤、察罕の傳に定辭とあり。爲奴は、喇失惕の史に幹奴とあり。胡沙は、金史列傳の承裕なり。獵兒嘴は、野狐嶺の北の口にあり。會合堡は、金史本紀の會河堡に於て、今の萬全縣の西に在りき。金國志には、灰河、承裕の傳には、會河川、木華黎、耶律阿海の傳には、滄河と書けり。木華黎の傳は、この戰の功を專に木華黎に歸して、金兵號四十萬、陣野狐嶺北。木華黎曰、彼眾我寡、弗致死力、戰未易破也。」率敢死士、策馬橫戈、大呼陷陣、帝應諸軍竝進、大敗金兵、追至滄河、殪尸百里」と云へり。會河堡の戰は、金史本紀に「大安三年八月、千家奴、胡沙、自撫州退軍、駐宣平。九月、敗績于會河堡。」承裕の傳に「八月、大元兵至野狐嶺、承裕喪氣、不敢拒戰、退至宣平。」云云。其夜南行。大元兵踵擊之。明日、至會河川、承裕兵大潰、承裕僅脫身入宣德」とあり。宣平は、金の西京路宣德州の屬縣に於て、今の直隸宣化府懷安縣の東北にありき。撫州、野狐嶺、會河堡の戰は、親征録、蒙古集史、金國志、金史本紀諸傳みな太祖六年辛未にあるを、元史本紀は、會河の戰のみを正しく六年辛未に記し、撫州、野狐嶺の戰は、みな誤りて六年辛未七年壬申の二所に記し、速不台、石抹明安の傳は、誤りて壬申の年とす。木華黎の傳に至りては、壬申の年にある宣德、德興の戰を辛未として前に記し、辛未の年にある撫州、野狐嶺、滄河の戰を壬申として後に記せり。耶律阿海の傳に、烏沙堡、宣平、滄河の戰を辛未とすたるは、善けれども、その年の内に「癸酉、拔宣德、德興」の前、**宣德府**を取りて、（親征録に「壬申、太祖七年、遂出居庸、耀兵燕北」と書けるは、非なり）**宣德府**を取りて、（親征録に「壬申、太祖七年、遂出居庸、耀兵燕北」と書けるは、非なり）

宣德德興の攻め取り



者別古亦古  
捏克の先鋒

破宣德府、至德興府、失利引卻。四太子也可那顏、赤渠駙馬率兵、盡克德興境內諸堡而還。後金人復收之。癸酉太祖八年秋、上復破之。とあり。宣德府は金の西京路宣德州にして、元の初陞せて宣寧府とす。世祖の時宣德府と改めて上都路に隸せり。今の直隸宣化府なり。太祖のそれを破れるは未府とならざりし時なれば、府と云ふべき筈なく。喇失惕の史に宣德州と云へるを見れば、修正秘史には州とありけんを、親征録の撰者は當時の稱に依り府と書けるなり。この秘史の原本にも必ず州とありしならめど、明の譯人は、宣德府の名を聞き慣れ居たるに由り、ふと音譯を誤りたるならん。德興府は、遼の奉聖州にして、金の時德興府と改め、西京路に隸す。元の世祖の時復奉聖州とす。宣德府に隸せり。今の直隸保安州なり。四太子は、第四の皇子拖雷也。可那顏は、大官人の義にして、拖雷の號なり。赤渠駙馬は、卷八の赤古古喇堅なり。者別、古亦古捏克、巴阿秃兒二人を先鋒に遣りたり。

居庸關の禦

（この戦に者別の先に働きたる旁證として、元史耶律阿海の傳に「敕左帥闊別、略地漠南、阿海爲先鋒。辛未、破烏沙堡、慶戰宜平、大捷。滄河遂出居庸、耀兵燕北。云」とあり。古亦古捏克は、何人とも知れず。親征録壬辰（太宗四年）の處に「貴由拔都とある人ならんか。もし然らば、元史列傳に「月魯帖木兒、卜領勤多禮伯臺氏、曾祖貴裕事太祖爲管領怯憐口怯薛官」とある貴裕も、その人なるべし。多禮伯臺は、朵兒別惕にして卜領勤は、朵兒別惕の分部の名なり。）察卜赤牙勒に到りて、（漢名居庸關、今の順天府昌平州の西）察卜赤牙勒の峠を禦

縉山の戦

がれて、（昌平州の西北二十四清里に居庸の南口あり、南口より十五清里上れる所に關城あり、又八清里に上關あり、上關より十七清里に延慶州の八達嶺あり、嶺の上に城あり、元人はそれを居庸の北口と云へり。即察卜赤牙勒の峠なり。昌平山水記に「自八達嶺下視居庸關、若建瓶、若闕、井昔人謂居庸之險不在關城、在八達嶺也」と云へり。金人守禦の事は、親征録に「時金人壘山築壁、悉力爲備。札八兒火者の傳に「金人恃居庸之險、治鐵鋼關門、布鐵蒺藜百餘里、守以精銳」とあり。）そこに者別言く「彼等を誘ひて動かして來させんとそこに試みん」と云ひて回りぬ。回られて、乞塔惕の軍士ども追はんとて、河山に滿つるまで追ひて來ぬ。宣德府の背（山の）に至りて、者別後向き翻れり。奮ひて衝きて、續きて來る敵を敗れり。成吉思合罕の中軍續きて、乞塔惕を動かして、合喇乞答惕（契丹即合喇、乞丹の複稱）、主兒扯惕（女真即主兒）、主因（卷一に見えたる種族）の雄雄しく猛き軍を敗りて、察卜赤牙勒



居庸關の攻め破り

に至るまで爛木の積れる如く殺して、(親征録「癸酉上復破之」の續きに「遂進軍至懷來帥高琪將兵與戰我軍勝追至北口大敗之死者不可勝計」とあり帥の上に脱字あり元史本紀には金の行省完顏綱元帥高琪とあり高琪は、金史の朮虎高琪なりこの時金軍の總督は、完顏綱にして、完顏綱徒單鎰朮虎高琪の傳にみな綱行省事於縉山大敗」とあり高琪は、この時鎮州の防禦使にて元帥右都監を權して居たれども蒙古人は元帥と云ひたるなり懷來は、遼の奉聖州の屬縣金の德興府媯川縣元の宣德府奉聖州の屬縣今の直隸宣化府懷來縣なり錄は元代の名を以て記せり北口は、即居庸の北口なり縉山は、金の德興府の屬縣今の宣化府延慶州なり) 察卜赤牙勒の關を者別取りて、峠どもを奪ひて越えて、(この文に據れば北口より南口に出征録に「時金人塹山築壁悉力爲備上置怯台薄察等頓軍拒守遂將別眾西行由紫荆口出金主聞之遣大將與敦將兵拒隘勿使及平地比其至我眾度關矣乃命哲別率眾攻居庸南口出其不備破之進兵與怯台薄察軍合」とあれば南口より倒に北口に攻め上りたるなり怯台は、即客台八十八功臣の第五十七兀嚕兀惕の主兒扯歹の子なり太祖紀に可忒と書けり薄察は、太祖紀に薄利とあり趙柔の傳に「歲癸酉太祖遣兵破紫荆關柔以其眾降行省八札奏聞以柔爲涿易二州長官佩金符」とある八札なるべしと沈曾植は云へり紫荆口は、即紫荆關にて直隸易州の西八十清里紫荆嶺の上にあるなり與敦は、太祖紀に與屯とあり金史章宗紀衛紹王紀李英

龍虎臺の駐蹕

中都の城攻め

河北山西山東の侵掠

の傳に烏古孫兀屯とある人なるべし元史は、) 成吉思合罕は、失喇迭克に下馬せり。(失喇迭克は、漢名龍虎臺昌平州の西にあり昌平山水記に「居庸關於此」幾輔通志に「龍虎臺在昌平州西二十里」云云舊志、臺在舊縣西十里去京師百里當居庸關之南」とありこの臺は、いはゆる臺地にて樓臺の臺にあらず) 中都を攻めて、(中都は、今の清京にして、遼南京と云ひ、金中都と云ひ、元の世祖定めて京師とく俗には今も北京と云ふ蒙文には中都とあるを語譯には大都文譯には北平と書けり洪武の史臣後の名を用ひて追稱したるなり親征録に「既而又遣諸部精兵五千騎合怯台哈台二將圍中都上自率兵攻涿易二州即日拔之」とあり怯台は、即兀嚕兀惕の客台哈台は、即合歹古喇堅八十八功臣の末より第四に見えたり涿易は、皆金の中都路の屬州涿州は今順天府に隸し易州は、直隸の直隸州なり蒙古の關に入りたるは、太祖八年癸酉の秋にして、金史宣宗紀貞祐元年即太祖八年十月大元兵下涿州」とあれば、關に入りたる月に直に涿州を抜きたるに非ずまた即日二州を抜くは、いかにも速すぎたるに、喇失惕の史には涿州を攻めて二十日にて破れり」とあれば) 郡郡の城どもに軍を遣りて攻めさせたり。(親征録に「乃分軍爲三道大太子二太子三太子爲右軍、循太行而南破保州中山邢洛磁相輝衛懷孟等州棄其



定威州境抵黃河大掠而還。哈撒兒及幹津那顏拙赤解薄利爲左軍。沿東海破濼萊益等城而還。上與四太子駁諸部軍。由中道遂破雄莫河開清滄景獻濟南濱棗益都城。乘東平大名不攻。餘皆望風而拔。下令北還。又遣木華黎回攻密州。拔之上至中都。亦來合」とあり。哈撒兒は、皇弟拙赤合撒兒なり。幹津那顏は、太祖紀に幹陳那顏とあり。翁吉喇惕の阿勒赤古喇堅の子、德薛禪の孫にして、元史特薛禪の傳にその名見えたり。拙赤解は、兀嚕兀惕の主兒扯歹なり。薄利は、即薄察なり。孛囉忽勒の從孫塔察兒一名侖蓋は、薄察と音近きに由り、沈曾植は、薄察は塔察兒ならんと疑ひたれどもいかゞにや。太祖紀は、この三道の軍を叙べて、右軍は「取保遂安肅安定邢洛磁相衛輝懷孟掠澤潞遼沁平陽太原吉陽拔汾石嵐忻代武等州而還」左軍は「取薊州平灤遼西諸郡而還」中軍は「取雄霸莫安河開滄景獻深祁蠡冀恩濮開滑博濟泰安濟南濱棗益都淄維登萊沂等郡復命木華黎攻密州屠之云云。帝至中都三道兵還、合屯大口。是歲河北郡縣盡拔。唯中都通順真定清沃大名東平德鄆海州十一城不下」とありて、親征錄より委し。金史宣宗紀を案するに、貞祐元年太祖八年癸酉十一月大元の兵觀州を徇へ、金の觀州は即元の景州なり。又河開府滄州を徇へ、二年太祖九年甲戌正月辛未、彰德府を徇へ、(金元の彰德府は、即古の相州なり)又益都府を徇へ、乙未、懷州を徇へ、二月壬辰、嵐州を徇へたること見えて、末に「時山東河北諸郡失守、惟真定清沃大名東平徐鄆海數城僅存而已。河東州縣亦多殘燼」とあれば、三道の侵掠は、癸酉の十一月に始まりて、甲戌の二月に終りたるなり。親征錄元史にその時月を明にせざるに由り、金史に據りて考へ見たり。又金史李英の傳に「貞祐三年三月、英自清州督糧運、救中都。宣宗紀にも、その年七月、詔河

東昌の不意打ち

元の初に無かり東昌

修正秘史の東京

開孤城、移其軍民就粟清州」とあれば、清州は未殘破せられざりき。親征錄中軍の破れる諸城の中に清州あるは非なり。清は、滑の誤ならん。元史は「十一城不下」の中に、金史は「數城僅存」の者別をば東昌の城を攻めさせに遣りたり。東昌の城に到りて、攻めて取りかねて、回りに六宿の地に到りて、油斷せさせて、さて回り奮ひ、馬を手に牽き(語)合兒闊脫勒壇、(明)每人牽一匹從馬、夜兼行して、油斷居る處に到りて、東昌の城を取りき。(山東)東昌府は、元史地理志に「唐博州、宋隸河北東路金隸大名府、元初隸東平路、至元四年析爲博州路、十三年改東昌路」とありて、東昌の名は、元の世祖の時より始まれば、太祖の時その名なきのみならず、太宗の史臣もその名を書くべき由なく、然らばこの東昌の字は、明の史官の音譯を誤れるなるべし。親征錄には、辛未太祖六年(秋)西京路の諸州を破れる次に「又遣哲別率眾取東京、哲別知其中堅、難以眾墮城、即引退五百里、金人謂我軍已還、不復設備、哲別戒軍中、一騎牽一馬、一晝夜馳還、急攻、大掠之以歸」と云ひ、喇失惕もこれに同じければ、修正秘史には東京とありくなり。太祖紀には、七年壬申の末に月日まで掲げて「冬十二月甲申、遮別



東京を攻むる暇なき者別

遼東を経略せる按陳

東京を取れる木華黎

東勝の奇功

攻東京不拔、即引去、夜馳還、襲克之」と云ひ、吾也而の傳には、逸早くも太祖五年に「吾也而與折不那演克金東京有功」と云ひ、年月は合はざれども、その東京とくたるは、いづれも親征録に本づきたるなり、然れども東京を取れる人は、實は者別に非ず、耶律阿海の傳に、者別の先鋒となりて、烏沙堡宣平滄河の戰より「拔宣德德興諸郡、乘勝次北口、攻下紫荆關」まで、阿海は常に者別と共に働きたる由見ゆれば、者別は常に大軍に先だちて轉戦したるなり、者別はいかに戰馬の如く駿速なりとも、阿の暇ありてか北京路を踰えて徑に東京を攻めらるべき、耶律雷哥の傳に「歲壬申（太祖七年）太祖命按陳那衍行軍至遼東、雷哥率所部降之、共破金軍、帝召按陳還、而以可特哥副雷哥屯其地、癸酉（八年）春、眾推雷哥爲遼王、云云」とあれば、始めて遼東を経略したる者は、阿勒赤那顔と可特哥とにして、者別は與らず、八年甲戌に至り、木華黎は命を受けて、諸軍を統べて遼東を征し、九年乙亥に神將蕭也先は計を以て東京を平定したること、木華黎の傳に見え、蕭也先即石抹也先の傳にも、木華黎に従ひて先鋒となり、奇計を用ひて東京を降したることを委しく叙べたれば、東京を取れる者は、木華黎也先にして、者別に非ず、然らば者別の取れるは、東昌にも非ず、東京にも非ず、いづこなりけん、太祖六年に取れる西京路諸州の内に東勝州あり、その地は、金の西京今の山西大同府の西北に在りき、者別の奇功を立てたるは、疑はくはその地ならん、蓋秘史の原本には東勝とありしを、明人は誤りて東昌と音譯して元の初に東昌なきことに心附かざりしなり、修正秘史は誤りて東京とく、親征録集史元史みなそれに依りて、いづれも東京を取れるは者別に非ざること、に心附かざりしなり、

完顏承暉の請和の建議

者別は、東昌の城を取りて回りて來て、成吉思合罕に合へり、（親征録に據れば、者別の奇功を立てたるは、太祖六年西京路の諸州に合へり、）（を取れる時なれば、回りて太祖に合へるは、西京路の或地にて合へるなり、）中都を攻められて、阿勒壇罕の大官人王京丞相、（阿勒壇罕は、金の宣宗なり、太祖八年癸酉の八月、金帝衛の紹王永濟は、紇石烈執中に弑せられ、章宗の庶兄豊王珣立てられたり、これを宣宗と云ふ、王京は、完顏の轉なり、王京丞相は、親征録元史に丞相完顏福興とあり、金史に完顏承暉とて傳あり、承暉、本の名は福興にして、この時平章政事兼都元帥となり、尋で右丞相に進みたり、）阿勒壇罕に建議しけらく、天地の命ある時、大位の代る時、至れり、忙豁勒甚力あり、來て我等の雄雄しく猛き合喇乞塔惕主兒扯惕主因の緊要なる軍を取りて、盡くるまで殺しけり、頼ある察卜赤牙勒をも奪ひて取りけり、今我等再軍を整へて出さば、再忙豁勒に敗られ



ば、必城城にて潰えん、彼等。却て我等に收めば肯かず、我等に敵となりて、伴とならざらん、彼等。阿勒壇罕恩賜せば、忙豁勒罕に今の内に降らんと相談せん。相談に入りて、忙豁勒を退けば、退けたる後に、復別に考へ、我等そこに議り合はんぞ。忙豁勒の人驕馬も、地合はずして疫病し居ると云はれたり。彼等の罕に女子を與へん。金銀緞子財を軍の人に重くいだして與へん。我等の此の相談に入らざるをいかで知られんと建議しければ、阿勒壇罕は、王京丞相の此の言を善しとて、「かく便爲れ」とて、降らんと、成吉思合罕に公主の號ある女子を

金の宣宗の  
屈服

出して、金銀緞子財もて軍の人に力に知らしむべく、力限中都より出して、成吉思合罕の處に王京丞相致して來ぬ。降りに来られて、成吉思合罕は、彼等の相談に入りて、郡郡に攻め下りたる軍どもを回らしめて退きたり。王京丞相は、莫州撫州の名ある背(鼻)に到るまで成吉思合罕を送りて回れり。緞子財を我等の軍士ども力限荷に駄けて、熟絹にてその荷を縛りて行きたり。

太祖九年甲  
戌の凱旋

(これは、太祖九年甲戌の三月の事なり。親征録には「甲戌、上駐營於中都北壬甸、金丞相高琪與其主謀曰「聞彼人馬瘦病乘此決戰、可乎」丞相完顔福興曰「不可、我軍身在都城家屬多居諸路、其心向背未可知、戰敗必散、荷勝亦思妻子而去、祖宗社稷安危、在此舉矣、當熟思之、今莫若遣使議和、待彼主還軍、更爲之計、如何」金主然之、遣使求和、因獻衛紹王公主、令福興來送、上至野麻池而還」とあり。丞相高琪は、金史高琪の傳に據れば、この時平章政事にして、丞相に非ず。金の莫州は、河北



東路に隸し、今の直隸河開府任邱縣にして、中都より蒙古に赴く路にあらざれば、この二字誤あらん親征録の野麻池も、地志に見えず、これも池の名には非ずして、山の名又は地の名なるべし、二書の地名につきて考ふるに、莫州撫州は倒置にて、撫州の莫州と云ふ替とありてを誤り、その莫州は又野麻池の野を脱して麻池を州の諸將如く音譯したるには非ずや、元史太祖紀に「九年甲戌春三月、駐蹕中都北郊、名の請乘、勝破燕、帝不從、乃遣使諭金主曰、汝山東河北郡縣、悉爲我有、汝所守唯燕京耳、天既弱汝、我復迫汝於險、天其謂我何、我今還軍、汝不能犒師、以弭我諸將之怒耶耶、」金主遂遣使求和、奉衛紹王女岐國公主及金帛童男女五百馬、三千以獻、仍遣其丞相完顏福興、送帝出居庸とあるは、親征録と金史の紀傳とに依りて書けるなり、岐國公主は金史宣宗紀に公主皇后の稱あり、喇失惕の史に昆主哈屯とある昆主は、公主を訛れるなり、)

唐兀惕征伐

かく出征したるに依り、合申の民の處に去れり。指して到れば、合申の民の不見罕降らんと「爾の右の手となりて力を與へん」と云ひ、察合と云ふ女を成吉思合罕に出して獻れり。(不見罕は、蒙古語にては神また佛の義なれども、唐兀惕の國にては國主の稱號に用ひたりと見ゆ、この時の不

駱駝貢獻の願ひ

兒罕は、夏の桓宗李純佑の族弟にして、元の太祖元年に純佑を廢して篡立したる襄宗安全なり、察合は、親征録も集史も元史もみな名を略けり、后妃表第三韓耳朶の察兒皇后は、察合の誤りかとも思はる、しかれども喇失惕は、唐古惕の人にて名の知れざる哈屯を擧げて、自注に「速哈惕これを得んと願ひ、成吉思汗即贈れり」と附記したれば、后妃の列を脱したる故、) 又不見罕言く「成吉思合罕の名に、表には載せられざるならん、) 又「不見罕言く「成吉思合罕の名聲を聞きて畏れて居りき、我等、今威靈ある爾の身到りて來られて、威靈を畏れたり、畏れて、我等唐兀惕の民は、爾の右の手となりて力を與へん」と申せり。力を與へんにも、動かぬ營盤ある、築きたる城ある者なるぞ。伴なひて、疾き出征に出征する時、銳き戦ひを戦ふ時、疾き出征に追附くことぞ能はぬぞ。銳き戦ひに戦ふことぞ能はぬぞ、我等成吉思合罕恩賜せば、我等唐兀惕の民は、



三回の西夏征伐

高き迭喇孫（明語譯蕭棘草）の蔭に長けさせて、多き駱駝を合見合出して、係縮となして獻らん。毛段を織りて、段物となして獻らん。放つ鷹を馴らして、聚めてその好きを致さう合見合め居らん」と奏したり。「かく」言ひて、その言に遵ひ、唐兀惕の民より駱駝を取立てて、趕ふこと能はぬまで持ち來て獻れり。（この唐兀惕征伐は、親征錄に據れば、一回の役に非ず。既に太祖即位の前の年に乙丑、征西夏、攻破力吉里寨、經落思城、大掠人民、多獲橐駝以還とあり。元史も同ト。駱駝を獲たるは、西夏降服の後なるを、前に繰上げて分捕とせり。次に太祖二年丁卯には、秋、再征西夏、冬、克斡羅孩城。三年戊辰には、春、班師、至自西夏。元史も同じ。五年庚午には、秋、復征西夏、入于王廟、其主失都兒忽、出降、獻女爲好とあるを、元史は、一年前なる四年己巳に繰上げて、帝入河外、潰、遂撤圍、遣太傅訛答入中興、招諭夏主、夏主納女請和と委しく記せり。兀刺海城は即斡羅孩城なり。丁卯の年克ちて守らず、今再入りたるなり。また西夏書事

嘉定四年太祖六年辛未五月の處に「塔坦有黑白二種、時黑塔坦王白斡波強盛、兼併諸族、地起兵、攻夏河、西州郡、安全親率兵拒戰、大敗、失其公主、遣使請以臣禮事塔坦方退、自是國勢益衰」とあり。黑塔坦は、即黑韃韃にして蒙古なり。公主を失ふは、察合を興へたる事なり。白斡波は、白韃韃の阿刺兀思惕吉忽里の姪鎮國、蒙韃備錄の白四部、黑韃事略の白斡馬にして、鐵木眞と云ふべきを何故にか誤れり。又金國志にも大安三年辛未春、西夏始爲大軍所攻、遣使求援、金主新立、不能援、大軍至興靈而反、夏人恨之、遂叛」とあり。西夏の降服は、元史の己巳と親征錄集史の庚午と金國志西夏書事の辛未と三説ありて、いづれか是なるを知らず、いづれに於ても金の降服よりは前に在れば、秘史の記載の順序は違へるに似たり。

辛未の一舉に二國の降服

成吉思合罕は、かく出征したる時、乞塔惕の民の阿勒壇罕を降して、多き段物を取りて、合申の民の不見罕を降して、多き駱駝を取りて、成吉思合罕は、羊の年（この初にある太祖六年辛未の歲）かく出征したる時、乞塔惕の民の阿忽台と云へる阿勒壇罕を降して、唐兀惕の民の亦魯忽不見罕を



降して、回りて、撒阿哩客額兒に下馬せり。(阿忽台は、金の宣宗の名は、金史本紀に吾賭補とあれば、阿忽台は、國語の名にもあらず、蒙古人の附けたるあだなるべし。亦魯忽は、不兒罕李安全の國語の名なるべし。親征錄に失都兒忽とあるは、次の卷に見ゆる末帝李) 眼の一名を誤り書きたるに似たり。

太祖九年甲戌の再征

又その後趙官の處に(趙官は、宋の蒙語なり。趙家の轉)和親に遣りたる主卜罕を頭とせるあまたの使を乞塔惕の民の阿忽台なる阿勒壇罕に妨げられて、成吉思合罕は、狗の年(我が順德天皇建保二年甲戌、宋の嘉定七年、金の宣宗貞、祐二年、元の太祖九年、西紀一二一四年、太祖五十三歳の時)乞塔惕の民の處に再出馬せり。(主卜罕の拘へられたる事は、親征錄集史みな載せず。元史は、主卜罕を擄不罕と書きて、太宗紀に三年辛卯夏命拖雷出師寶鷄、遣擄不罕使宋假道宋殺之、復遣李國昌使宋需糧と云ひ、睿宗の傳に辛卯拖雷總右軍、自鳳翔渡渭水、過寶雞、入小潼關、涉宋人之境、沿漢水而下、遣擄不罕詣宋假道、且約合兵、宋殺使者、拖雷大怒曰、彼昔遣苟夢玉來通好、遽自食言背盟乎、乃分兵攻宋諸城堡、長驅入漢中、進入四川、陷閬州、過南部而還と

擄不罕の殺され

高寶銓の回護の説

云へり、然れば擄不罕即ち主卜罕は、金人に拘へられたるに非ずして、宋人に殺されたるなり、その殺されたるはこの年の事に非ずして、この年より十七年後なる太宗三年の事なり、されども元史は已に誤り多く、且陳樞の通鑑續編には、擄不罕至青野原、金統制張宣殺之とあるに據り、高寶銓は、秘史を誤れりとはせず、元史曰、宋殺蓋金殺之、而諉爲宋殺也と云ひ、又太宗紀に、擄不罕の事を載せたるをも、彼紀蓋因遣李國昌需糧、追溯太祖時遣使之事耳、不然、豈有假道被殺、復遣使需糧乎と云へり、この考も一説に備ふべし、但甲戌の再征は、太祖自ら出馬したるに非ず、太祖は塞外に駐り、諸將を遣して中都を攻めしめたるなり、太祖紀に、九年甲戌、太祖居庸關を出でたる後、夏五月、金主遷汴、以完顏福興及參政抹撚盡忠輔其太子守忠、留守中都、六月、金虬軍斫荅等殺其主帥、率眾來降、詔三摸合石抹明安與斫荅等圍中都、帝避暑魚兒濼、秋七月、金太子守忠走汴とあり、親征錄も略同トク、心、而特以和款我耳、復圖南侵とあり、いづれに據りても、甲戌の再征は、金の宣宗の通れたる後にあるを、秘史にこの再征に由りて金帝通れ出でたりと云へるは、誤れ、

遷都の後なる再征

潼關の戦

二降り畢へて、趙官の處に遣りたる使をいかでか妨げたる」と云ひ出馬するに、成吉思合罕は、潼關の口を指して、者別をば察卜赤牙勒に依り進ましめたり。(潼關は、河南陝)



拖雷出古の奮戦

西の間の關門にして、今の河南陝州閿鄉縣の西六十清里、陝西同州府華陰縣の東四十清里に在り。察ト赤牙勒は居庸關の蒙語前に見えたり。親征錄元史本紀に據るに、潼關を攻めたるは、撒兒只兀惕の撒木合巴阿秃兒にして、太祖自ら出でた。成吉思合罕を潼關の口に依り「進み」たりと阿勒壇罕知りて、亦列合答豁孛格秃兒三人に軍を統べさせて、軍塞りて、忽刺安迭格連（譯すれば赤き帽、金史の謂はゆる山東の花帽軍）を先鋒とて、潼關の口を争ひ、峠を勿越させそとて、亦列合答豁孛格秃兒三人を軍を急がし遣りき。潼關の口に到れば、乞塔惕の軍は、地を捲きて來ぬ。（地の下、原文に誤字あり譯し難し、意を以て語を作れり）成吉思合罕は、亦列合答豁孛格秃兒三人と立ち合ひ（對戰）て、亦列合答を動せり。拖雷、出古古哩堅（即ち卷八の赤古古哩堅）二人は、横

より衝きて、忽刺安迭格連を退けて到りて、亦列合答を動して取りて、乞塔惕を爛木の積れる如く殺せり。乞塔惕の軍どもを殺して畢はれたりと阿勒壇罕知りて、中都より出でて、遁れんと南京の城に入りき。（金の南京は、古梁今の河南開封府なり）残れる彼等の軍士どもは、瘦せて死ぬる時、己等の間にて人の肉を食ひ合ひけり。拖雷出古古哩堅二人は善き處に働けりとして、成吉思合罕は、拖雷出古古哩堅二人を大に恩賞せり。（金史元史親征錄に據るに、潼關の戦には、太祖親ら臨まざるのみに非ず、拖雷出古二人もそれに與りたりとは見えず。二人の相攜へて奮戦したるは、親征錄通鑑續編に據るに、太祖七年壬申德興府を攻むる時にありき。又潼關の守將は尼龐古蒲魯虎にして、亦列合答など云へる人も見えず。親征錄に、金の通州の元帥蒲察七斤來降、金史元史に據るに、太祖十年乙亥正月の後、丙子太祖十二年の前に上駐軍魚兒渾命



撒木合巴阿  
秃兒南侵の  
委しき事實

三合拔都帥蒙古軍萬騎、由西夏抵京兆、出潼關、破嵩汝等郡、直趨汴梁、至杏花營、大掠河南、回至陝州、適河冰合、遂渡而北」とあり、元史太祖紀は「十一年丙子秋、撒里知兀得三摸合拔都魯率師、由西夏趨關中、遂越潼關、獲金西安軍節度使尼龐古蒲魯虎拔汝州等郡、抵汴京而還」とありて、親征錄と年違へり、金史は、この戦の始末を叙ぶること最詳なり、今宣宗本紀、必闡阿魯帶完顏仲元、朮虎高琪、胥鼎、尼龐古蒲魯虎等の諸傳を合せ考ふるに、貞祐四年(太祖十一年)秋八月丙子、元兵攻延安、九月辛巳朔、元兵攻防州、以簽樞密院事永錫爲御史大夫、領兵赴陝西、便宜從事、冬十月癸未、招射生獵戶、練習武藝、知山徑者分屯陝饒要地、命遙授知歸德府事完顏仲元、率山東花帽軍、徙軍盧氏、改商州經略使、權元帥右都監、元兵攻潼關、由禁坑出、戍卒皆潰、西安軍節度使尼龐古蒲魯虎禦戰、兵敗死焉、禁坑は、一名禁谷、今の潼關の南にあり、元の兵は、この間道より遶り出でて、潼關を破れり、戊辰、元兵徇汝州、仲元軍趨商虢、復至嵩汝、皆弗及、河東南路行省胥鼎、聞元兵已越關、庚午、遣潞州元帥左監軍必闡阿魯帶領軍一萬、孟州經略使徒單百家、領兵五千、自便道濟河、趨關陝、自將平陽精兵赴援京師、十一月壬午、胥鼎入京師、拜尙書左丞、兼樞密副使、乙酉、元兵至河池、右副元帥蒲察阿里不孫軍潰而逃、阿魯帶亦被創、元兵過陝州、由三門集津北渡而去、戊戌、華州元帥府復潼關、十二月癸亥、元兵攻平陽、胥鼎遣兵拒戰、元兵不利乃去、金國志は、親征錄の如く、誤りてこの役を一年前の事とく、貞祐三年八月、大軍自河東渡河、攻潼關、不能下、乃由嵩山小路趨汝州、遇山澗、輒以鐵鎗相鎖、連接爲橋、以渡、于是潼關失守、金主急召花帽軍于山東、十月、大軍至杏花營、距汴京二十里、花帽軍擊敗之、大軍復取潼關、自三門析津、乘河

續綱目續資  
治通鑑の誤

失喇客額兒  
の駐蹕

冰合、布灰引兵而渡、自是不復出」とあり、年月は金史と違へれども、事實は大概合へり、攻潼關、不能下」と云へるは、竟に下らざるに非ず、禁坑より遶り出でられて、成卒潰えたる故に、下に「潼關失守」とあり、その「由嵩山小路」と云へるは、潼關を遶れる間道に非ず、潼關を越えたる後に汝州に趨ける山徑なり、「召花帽軍于山東」は、完顏仲元に命じて入り援はしめたることなり、金史元史に記せる丙子の役と一事なること、疑ふべきなき、然るに商輅の續綱目は、金國志親征錄に據り、乙亥の年に三合拔都南侵の事を記して、「潼關失守」自是不復出の二句を省き、又丙子の年に金史元史に據りて「冬十月、蒙古兵克潼關、次嵩汝、開云云」と書き、三合拔都の名を省きたるは、金國志の紀年の誤に因り、一事を兩事とすたるにて、謂はゆる誤に因りて更に誤れるなり、畢沅の續資治通鑑も、續綱目の誤に襲れり、この二史は、人の信用する書なるが故に、その誤をかく辨せ置くなり、さて又丙子の役は、金の腹地を荒したれども、さほどの大捷もなかりに、秘史には金軍の殲滅窮餓の状を事々しく叙ぶるを見れば、太宗三年拖雷の陝西より入りて汴京に迫りたる三峯山の捷、元史に「流血被道、資仗委積、金之精銳盡於此矣」とあるものと混じたるに似たり、然らば亦列合答は、三峯山の敗將移刺蒲阿完顏合達なるべし、裕季格秃兒に似たる名は見えず、忠孝軍の總領完顏陳和尚の稱號などにてやあらん、  
**成吉思合罕は、河西務を下すと、中都の失喇客額兒に**  
**下馬せり。**(河西務は、鎮の名、今の順天府武清縣の北、白河の支流なる新引河の西にあり、失喇客額兒は、黃なる原の義なれば、中都の近郊を呼べる



者別の關破

中都の留守  
合荅

蒙語なるべけれども、いづこを指せるか知らず、但この文誤れり。金の宣宗の遷れる頃は、親征錄元史に據るに、太祖は塞外に居りて、中都の邊に到らざりしなり。  
 者別は、察卜赤牙勒の關を破りて、察卜赤牙勒を守れる軍を動して來て、成吉思合罕に合へり。(この時居庸關には金の守兵なかりき)阿勒壇罕、中都より出づるに、中都の内に合荅を留守となし任せて去りたりき。(太祖紀に十年乙亥三月、金御史中丞李英等率師援中都、戰于霸州、敗之。五月庚申、金中都留守完顏福興、仰藥死、抹然、盡忠、葉城、走、明安、入守之。とあり。この時の事は、金史の承暉、即福興、抹然、盡忠、李英、烏古論、慶壽等の傳に甚委しけれども、合荅の名は見えず。親征錄には金の留守哈答國和等とあり。衛紹王紀大安三年に西北路招討使粘合合打、宣宗紀貞祐三年に陝西統軍使完顏合打あれども、この合荅なりとも見えず。)  
 成吉思合罕は、中都の金銀財段物何にても數へしめに、汪古兒厨官、阿兒孩合撒兒、失吉忽秃忽三人を遣りき。この三人を來ぬとて、合荅は迎へ接けんと、金あり紋

失吉忽秃忽  
の廉直

ある段物を取りて、中都の内より出でて、迎へに來ぬ。合荅に失吉忽秃忽言へらく「前にこの中都の物、即中都は、阿勒壇罕のなりしぞ。今中都は、成吉思合罕のなるぞ。成吉思合罕の物なる段物を背處にて柰何ぞ偷みて持ち來て與ふる、汝我取らず」と云ひて、失吉忽秃忽は取らざりき。汪古兒厨官、阿兒孩二人は取りたり。この三人は、中都の物皆を數へて來ぬ。そこに成吉思合罕は、汪古兒阿兒孩、失吉忽秃忽三人に「合荅は何をか與へたる」と問へり。失吉忽秃忽申さく「金あり紋ある段物を持ち來て與へき。我言く前にこの中都は、阿勒壇罕のなりし



ぞ。今は成吉思合罕のとなりたるぞ。汝合答は、成吉思合  
 罕の物を背處にて偷みて柰何ぞ與ふる、汝」と云ひて、  
 我は取らざりき。汪古兒阿兒孩二人は、彼の與へたるを  
 取りきと云へり。成吉思合罕は、そこに汪古兒阿兒孩二  
 人を甚く咎めたり。失吉忽秃忽を大なる道理を考へけ  
 り、汝」と云ひ、大に恩賞して、「視る我が目、聽く我が耳と  
 なりて居らずや、汝」と勅ありき。(親征錄に「明安太保入據之、遣使  
 獻捷、上時駐桓州、遂命忽都忽那  
 顏、與雍古兒、寶兒赤、阿兒海、哈撒兒三人、檢視中都帑藏、時金留守哈答國和等、奉金幣  
 爲拜見之禮、雍古兒、哈撒兒受之、獨忽都忽拒不受、將哈答及其物北來、上問忽都忽  
 曰、哈答等嘗與你物乎、對曰、有之、未敢受之、上問其故、對曰、臣嘗與哈答言、未陷城  
 時、寸帛尺縷、皆金主之物、今既城陷、悉我君物矣、汝又安得竊我君物爲私惠乎、  
 上正佳之、以爲知大體、而重責雍古兒、阿兒海、哈撒兒等、不珍也、哈答因見其孫榮山  
 而還」とあり、正佳不珍の二語は、字の誤りあらん、元史には、明安入守之の下に、た

金の質子

だ「是月、避暑桓州涼涇、遣忽都忽等籍中都帑藏」とあり、

阿勒壇罕は、南京に入りて、親降り頓首て、騰格哩と  
 云ふ子を百の從者にて「成吉思合罕の處に侍衛にな  
 れ」としておこせけり。(金史元史を考ふるに、金の宣宗は、質子を送りたるこ  
 となく、太宗四年(金の哀宗天興元年)三月、速不台等南  
 京を圍みたる時、金の哀宗は、弟荆王守純の子曹王訛可を出して、質たらくめ、太宗  
 は速不台を留めて還り、居庸を出でたることを、太祖宣宗の時の事と誤りたるに  
 非ず) 彼等に降られて、成吉思合罕は、退かんとて察卜赤牙  
 勒に依りそこに退く時、合撒兒を左手の軍にて海に  
 遣ひて遣る時、「北京の城に下馬せよ。北京の城を降し  
 て、彼方主兒扯惕の夫合訥を過ぎ去りて、夫合訥反かん  
 とせば、打取れ。降らば、彼の邊なる彼の城どもを過ぎ、

合撒兒東略の命



女眞の蒲鮮  
萬奴

兀刺河納兀  
河塔兀兒河

兀刺河納兀河に沿ひ去りて、塔兀兒河に沂り山越えて、大老營に會ひに來よと宣ひて遣りぬ。(金の北京大定府は、を建て、大定府と名づけ、金北京と改め、元の至元七年大寧路と改め、明大寧衛とせり。清一統志に「大甯故城在今內蒙古喀喇沁右翼南百里喜峯口東北四百八十里、老哈河之北、老哈河は、白狼河とも云ふ。水道提綱に「白狼河、經故大甯城南、俗稱巴爾漢城。」曰「察罕巴爾漢城」とあり。主兒扯惕は、女眞即主兒臣の複稱、金の本國の民なり。夫合訥は、蒲鮮の訛ならん。親征錄甲戌太祖九年四月の處に「金主之南遷也、以招討萬奴爲咸平路宣撫、復移治於忽必阿蘭。至是亦以眾來降、仍遣子鐵哥入質、既而復叛、自稱東夏王。」太祖紀に「十年乙亥冬十月、金宣撫蒲鮮萬奴據遼東、僭稱天王、國號大眞、改元天泰。十一年丙子冬十月、蒲鮮萬奴降、以其子帖哥入侍。既而復叛、僭稱東夏」とあり。兀刺は、女眞語、河なり。黑龍江を薩哈連烏刺と云ひ、松花江を吉林烏刺と云ふ。この兀刺は、松花江なり。清一統志に「打牲烏拉城、在吉林城北七十里、混同江東岸、烏拉之先布顏、築城於烏拉河上、洪尼地、國號烏拉」とある。混同江も烏拉河も、皆松花江なり。納兀河は、盛京通志の諾尼江、水道提綱の嫩泥江、龍沙紀略の腦溫江にして、今は嫩江と云ふ。高寶詮曰く「嫩泥江、古名難水、亦曰那河、元史地理志稱桃溫水、特薛禪傳曰「惱木連、忽憐傳曰「猓河、伯帖木兒傳曰「納兀河、洪萬傳曰「那兀河、王綽傳曰「那河、皆即納活對音。」塔兀兒河は、水道提綱に「洸兒河、亦曰桃爾河、源出西興安山東麓、云云、至札賴特旗南、匯爲納藍撒藍池、猶言日月池也。東流入

合撒兒に従  
へる三將

嫩泥江二黑龍江外紀に「唐書他漏河、即今拖爾河、一作洸兒河、其源流千里、並在蒙古境內、二高寶詮曰く「洸兒河、魏書稱太彌河、北史曰「太岳魯水、唐書曰「它漏河、遼史曰「他魯河、曰「撻魯河、金史曰「撻魯古河、皆即討活兒之對音、高氏は、元史の合撒兒と桃溫を納兀河といたれども、納兀にはあらずして塔兀兒なるべし。合撒兒と共に、官人より主兒扯歹、阿勒赤、脫命、扯兒必、三人を遣りたり。(この東征の軍は、太祖八年癸酉九年甲戌に涉れる三道侵掠の左軍なり、親征錄に「哈撒兒及斡津那顏、拙赤、薄利爲左軍、沿東海、破濼、薊等城、而還」と云ひ、太祖紀に「皇弟哈撒兒及斡陳那顏、拙赤、薄利爲左軍、遵海而東、取薊州、平濼、遼西諸郡、而還」と云へり。哈撒兒は、即合撒兒なり。斡陳那顏、即斡陳那顏は、按陳那顏の子なり。然るに、祕史の阿勒赤は、斡陳に非ずして、即按陳なれば、斡陳は、按陳の誤なるべし。拙赤、解は、喇失惕の集史に主兒赤歹と云ひて、成吉思汗の幼子と注し、陳樞の通鑑續編に太祖の六子を擧げて庶子朮兒徹歹あるに由り、洪鈞は、集史と蒙韃備錄とを引きて、太祖の皇子なることを考證したれども、祕史に「官人主兒扯歹と云へるを見れば、やはり兀魯兀惕の主兒扯歹なりけり。元史親征錄には、薄利ありて、脫命、扯兒必、脱命、扯兒必は、親征錄乙亥太祖十年北京降服の續に「上遣脱脱藥閣兒必、帥蒙古契丹漢軍南征、木華黎の傳、乙亥北京與中降服、錦州の張鯨來降の續に「詔木華黎以鯨總北京十提控兵、從援忽闌南征、未附州郡、石抹也先の傳にも「命也先、副脱忽闌里必、監張鯨等軍、征燕南、未下州郡、石抹孛迭兒の傳にも「從春忽闌里必、徇地山東大名などあれば、脱命は合撒兒に従はず、又は從へりとも、途よ



合撒兒の東略

り還りて、木華黎の部下に屬したるなりけん。合撒兒は、北京の城を取りて、主兒扯惕

の夫合訥を降して、路にある城を取ると、合撒兒は、塔

兀兒河に沂り來て、大老營に下馬して來ぬ。(北京の降服は、

木華黎に降れる北京

木華黎の功なり。親征録には、三合拔都黃河を渡りて北に還れる後「金元帥尹答忽監軍斜烈以北京來降」とありて、誰に降れりとも云はず。喇失惕の史に「撒兒主惕の

撤木哈黃河を渡り、西京に趨きたれば、西京の守將因答兒、罕撒兒撒列迎へ降れり」とあるに由り、洪鈞は「錄作北京係誤」と云ひたれども、太祖紀には「十年乙亥二月、木

華黎攻北京、金元帥寅答虎、烏古倫以城降。以寅答虎爲留守、吾也而權兵馬都元帥鎮之」と云ひ、木華黎吾也而石抹也先の傳に、その事詳なれば、北京は誤らずして、西

史の西京は却て誤れり。但石抹也先の傳には、北京を降す前に、奇計を用ひて東京を降したることを載せたるに、東京の守將を寅答虎としたりは誤れり。又太祖紀の

寅答虎の僚屬なる烏古倫

寅答虎、烏古倫を殿本は烏庫哩伊勒都呼と改め、その考證に「考烏庫哩爲金之著姓。若是兩人不當一稱名而一舉姓。此事宣宗本紀未載。蘇天爵名臣事略載木華黎攻

北京、金守將銀青嬰城自守。其將高德玉等殺銀青、推烏古倫寅答虎爲帥。未幾以城降。覈之續通鑑亦同。爲太祖九年事。年月雖不符、而姓名則合。且以下文寅答虎爲

留守文義考之、其爲名氏顛倒無疑。今據改」と云ひ、畢沅の續資治通鑑の考異に「疑載筆者未知烏古倫爲姓、寅答虎爲名、文有顛倒耳」。錢大昕の諸史拾遺にも「東平王

銀青奧屯襄

合撒兒の東略につきての疑ひ

世家作烏古倫寅答虎、烏古倫者、寅答虎之氏、非兩人也。史臣不辨姓名、顛倒其文、遂若別有二人矣」と嘲りたり。然れども史天祥の傳に「乙亥、與大帥烏野兒降其北京

留守銀答忽、同知烏古倫」とあり。烏野兒は即吾也而、銀答忽は即寅答虎なり。烏古倫は、寅答虎の僚屬なるを、寅答虎はその姓を略し、烏古倫はその名を佚して、本紀は

又烏古倫の官名を脱したる故に、遂に一人ならんと疑はしむるに至れり。明の史臣いかに史事に昧くとも、烏古倫の姓なることを知らざらんや。又續綱目甲戌九月の

條に「木華黎攻金北京、北京裨將完顏昔烈、高德玉等、殺守將銀青云云。木華黎の傳にも、其下殺銀青」とあり。錢大昕の考異に「銀青蓋舉其官名、謂銀青光祿大夫、非

人姓名也」と云へり。今金史奧屯襄の傳を見るに「貞祐三年正月、襄爲北京宣差提控完顏習烈所害」とあり。習烈は、即續綱目の昔烈、又即親征録の斜烈、奧屯襄は、即

謂はゆる銀青なり。北京の降れるは、元史紀傳みな乙亥の年なるを、續綱目に甲戌の年としたるは、名臣事略に因りて誤れるなり。さて合撒兒の東征は、元史に據れば、

遼西諸郡を取れるのみにして、北京を取れるは、木華黎なるを、祕史に合撒兒北京を取ると云へるは、傳聞の異辭なり。むしろ祕史の誤ならん。又遼東の經路も、耶律留哥

の傳に「歲壬申(太祖七年)太祖命按陳那衍行軍至遼東、留哥率所部降之云云」とあれば、この按陳即阿勒赤の東略は、即合撒兒に従ひて行きたるにやとも思はるれ

ども、その年(七年壬申)は、三道侵掠の年(八年癸酉)の前なれば、強ひて牽き合はせ難し。又夫合訥を蒲鮮の訛とすれば、蒲鮮萬如の降りたるは、親征録は九年甲戌の四

月とし、太祖紀は十一年丙子の十月とし、相去ること二年半にして、いづれも合撒兒に降ると云はず、その詳なることは、今考ふべからず。



西域征伐の  
始まり

その後成吉思合罕は、撒兒塔兀勒の民に兀忽納が頭  
たる百の使を拘へて殺されて、成吉思合罕宣はく「金の  
縻繩を撒兒塔兀勒の民にいかでか斷たしめたりし」と  
て「兀忽納が頭たる百の使の爲」に、讎復し怨報いに、  
撒兒塔兀勒の民の處に出馬せん」として出馬する時、(この撒兒

闊喇自姆の  
異稱

塔兀勒は、闊喇自姆朝を云へるなり。闊喇自姆朝の管内には撒兒惕人即抹哈篋惕教  
徒多きが故に、蒙古人は撒兒塔兀勒の國と云へり。親征錄元史本紀には西域の汎  
稱を用ひ、列傳には回紇回鶻又は回回と云ふ。回回も、回紇の轉なり。唐の回紇の遺  
種は、實に畏兀兒にして、畏兀兒も回紇の轉なり。元人は回紇の遺種を呼ぶに畏兀  
兒の新名を用ふるは善けれども、回紇の舊名を闊喇自姆朝に當てたるは誤れり。長  
春の西游記には、畏兀兒をも撒兒塔兀勒をも皆回紇と云へり。闊喇自姆朝の本土は、  
鹹海の南、裏海の東に在り、今の希哇の地にして、玄奘の西域記に貨利習彌伽、隋書  
西域傳に穆國、新唐書西域傳に火尋或曰貨利習彌、曰過利、元史地理志に花刺子模と  
云ひ、西人は合喇自姆とも闊哇喇自姆とも忽哇喇自姆とも云ふ。闊喇自姆朝の興亡  
と蒙古西征の事蹟とは、主吠尼喇失惕の記載甚詳かなり。北宋の時、薛勒主克王馬里

闊喇自姆朝  
の興り

克沙の僕努施特勤始めて闊喇自姆部の酋長となり、その子庫惕別丁抹哈篋惕は、闊  
喇自姆沙と稱し、西遼興りて庫惕別丁の子阿次思は、その屬國となれり。阿次思の子  
亦牙勒阿兒思闊は、闊喇散を取り、その嗣子塔喀施は、宋の光宗紹熙五年(西紀一一九  
四年)薛勒主克朝を滅し、亦喇克阿者姆を取り、巴固答惕の合里發より冊封を受けた  
り。宋の寧宗慶元六年(西紀一二〇〇年)塔喀施の子阿刺額丁抹哈篋惕嗣ぎ立ち、巴勒  
黑赫喇惕馬贊迭喇乞兒曼を并せ、乞魄察克を打破り、元の太祖四年(一二〇九年)西遼に  
叛き、その西境を奪ひ、八年一二一三年河間の國(西回紇)を滅し、撒馬兒罕に新都を建  
て、闊喇自姆の兀兒堅只城を舊都と云へり。又、誥兒の國を并せ、その後、曠自納の地  
を定めたる時、合里發納資兒より誥兒の君に與へて闊喇自姆を圖らうむる密書を  
得て、大に怒り、納資兒を廢せんと欲し、大軍を率ゐて西征し、路にて發兒思阿在兒拜  
展を降し、太祖十三年(戊寅一二一八年)合里發の領地に入りたれども、大雪に遭ひ、又  
土兵に襲はれ、利あらずして退けり。還りて李合喇に到れば、西域の商侶蒙古より歸  
り、太祖の贈物を上り、通商を求むる辭を傳へ、阿刺額丁はいやいやながらそれを許  
せり。既にして太祖は諸王官人に命じて各賫を出さしめ、畏兀兒人四百餘人を發し  
て、西域の商侶に従ひ往きて、その産物を求めしめたり。然るに幹惕喇兒城に到れる  
時、城將亦納勒主克該兒罕は悉く拘へて、蒙古より細作を遣せりと王に告げられたれば、  
王は命じて悉く殺さしめ、惟一人逃げ歸りたり。捏撒腓はその中四人は使にて、外  
は皆商人なり。それらを殺せるは、亦納勒主克の意にして、王の命に非ず」と云へり。  
耶律楚材の西游錄に「苦蓋西北五百里、有訛打刺城。此城渠會、嘗殺命吏數人、商賈  
百數、盡掠其財貨。西伐之舉、由是也」とあり。命吏數人は、捏撒腓の使四人と云へる

兩大國の覺  
端



也遂合屯の建議

に近く、商賈百數は、秘史の百の使と數は合へり。喇失惕の四百餘人は、おまけあるに似たり。洪鈞の西域補傳に多遜を譯して「太祖聞逸者歸報驚怒而憫、免冠解帶、跪騎於天、誓必雪恨、其時古出魯克餘孽猶未靖、乃先遣西域人巴固喇爲使、借蒙古官二人往詰責云云。王篋死、巴固喇薙髮、蒙古官鬚釋歸、以辱之、自聚兵於撒馬兒罕」と云ひ、この下に蒙古の兵篋兒乞惕の餘眾を逐へるもの、合米赤河にて闊喇自姆の兵と衝突せる小戦あり。太祖紀には只十四年己卯夏六月、西域殺使者帝率師親征り。とあり。そこに也遂合敦は、成吉思合罕に建議して奏さく

「合罕は、高き峠を越え、廣き河を渡り、長き出征に出征し、多き國を平げんと思ひ給へり。生れたる只命あるものに長生なるは無かりき。大木の如き爾が身傾き去らば、麻穰の如き國民を誰にか委ねん。柱の如き爾が身倒れ去らば、羣鳥の如き國民を誰にか委ねん。生れたる四人の駿れたる子だちを、彼等の誰をとか宣ふらん。」

太祖の嘉納

子だちに弟だちにあまたの民草に我儕小人にも心附けてあらまほし。心附きたることを建議したるなり。聖旨知しめせ(明)皇帝涉歴山川、遠去征戰。若一日倘有不諱、四子内命誰爲王。可令眾人先知」と奏したれば、成吉思合罕勅あるには「合敦の人にもあれど(婦人なれども)、也遂の言は、善きよりも善し。誰も弟ども子ども汝等も孛斡兒出木合里等も、かくは建議せざりき。我も先祖の大業を承繼がざるに(承繼ぐべき人)、忘れて居りき。死ぬることを得られざるに、睡りて居りき」と宣ひて「我が子ども兄は、拙赤なるぞ。何をか云ふ。汝言へ」と宣へり。



拙赤を察阿  
歹の罵り

拙赤聲を出す前に、察阿歹言く「拙赤に言へと宣ふは、拙赤にや委ねんと宣ふならん。この篋兒乞惕より出でたるものにかんぞ知らしめん、我等」と云ふと等しく(拙赤)

拙赤の怒り

の生れたる時の事は、秘史に載せざれども、孛兒帖兀眞の篋兒乞惕に掠められ、太祖王罕札木合三人の征伐に乗じて逃げ歸りたる後に生れたる故に、拙赤と名づけられたり。拙赤は、蒙古語客なり。洪鈞の朮赤補傳は、喇失惕阿不勒噶資に據り、「孛兒台有姊爲汪罕妃、烈祖又嘗有德於汪罕、故聞太祖之訴、即脅蔑兒乞歸、孛兒台未被掠時、孕已數月、比在歸途、朮赤生、倉卒無襁兒具、乃搏麪如籃形、置於騎以載歸。太祖喜曰、此不速之客也、故名曰朮赤」と云へり。この事情に依りて、篋兒乞惕のおみやげなりとの疑ひも、拙赤は起ちて、察阿歹の領にしがみつきて言く「罕額赤格には取分けて言はれざるに、汝は我をいかでか揀分けたる。いかなる技能にて勝れたる、汝。たゞ剛情にてのみ蓋勝れたり、汝。遠箭を射て汝に勝たれ

剛情にてのみ蓋勝れたり、汝。遠箭を射て汝に勝たれ

剛情にてのみ蓋勝れたり、汝。遠箭を射て汝に勝たれ

剛情にてのみ蓋勝れたり、汝。遠箭を射て汝に勝たれ

喧嘩の引き  
分け

闊闊搠思の  
懸なる訓諭

ば、親指を断ちて去てん。搏ち合ひて汝に勝たれば、倒れたる地に起きざらん。罕額赤格の聖旨知しめせ」と云へり。拙赤察阿歹二人領を執り合ひて立ち居る時、拙赤の手を孛幹兒出扯きて、察阿歹の手を木合黎扯きて居る時、成吉思合罕聽きて、噤みて在せり。そこに闊闊搠思は、左の邊に立ちて言く「察阿歹は、何ぞ遽てたる、爾。爾の罕額赤格は、子だちの内にて爾に望を掛けて居給ひき。爾だち生る、前は、星ある天は、廻り(變動)てありき。多き國民は、反き居りき。臥處にも入らず、掠め合ひたりき。地皮ある地は、翻りてありき。普き國民は、反き居り



き。衾フスマにも臥フさず、攻セめ合アひたりき。かゝる時トキには、「互タガヒに」  
 用心ヨウジンして、「外ソトに」行ユかさりぞ。「行ユけば」出イデ遇アふこととな  
 りぞ。「家イヘに」躲カクれて、「外ソトに」行ユかさりぞ。「行ユけば」鬪タカふ  
 こととなりぞ。「一イチ族ソク親シタシみて、「外ソトに」行ユかさりぞ。「行ユけば」鬪タカふ  
 げば「殺コロ」合アふこととなりぞ。賢サトシき合カ敦トシなる母ハハを、蘇ソ油ウ  
 に心ココロ凝コらゝめて、馬ウマ乳チに心ココロ解トけゝめて、物モノ言イへり、爾シム（醉ヒ  
都）  
 て妄マダシ語コトせりと）温オン處ショよりひよこりとその腹ハラより生ウれざり  
 か、爾シム等ト。熱ネツ處トコロよりむくと獨ヒトリ胞エナ衣イより出イでざりぞか、爾  
 等ト。心ココロより生ウれたるその母ハハを怒イカらせば、彼カレの德トクを歌ウタひ  
 て怒イカリ息イまゝむとも能アはじ。腹ハラより生ウれたるその母ハハを怨ウラ  
札里喇兀魯

創業の艱難  
 鞠育の劬勞  
 みさせば、彼カレの悔クサシみを消キすとも能アはじ。（明チヤウ察アツ阿ア歹イ你ニ爲ニ甚  
哩兀魯）  
 忙マシ。皇クワン帝タイ見ミ。指シ望バウ。你ニ當アタリ。您ニ未ウマレ生トキニ時トキニ。天テン下ゲ擾ヤウ攘ヤウ。互ヒト相ヒト攻セ  
劫人カン不カン安セ生ハ。所ソ以ニ你ニ賢サトシ明サトシ的ニ母ハハ、不フ幸クニ被レ擄ト。若モシ你ニ如カ此ク說イハ、  
豈不ア傷シ著シ你ニ母ハハ親ニ的ニ心ニ。爾ニだちの罕カン額エ赤チ格グは、帝テイ國クニを立タ  
 つるに、黑クロき頭カシラを馬ウマに載ノせて、黑クロき血チを皮カ桶バケに入イれて、  
 黑クロき眼メを瞬マユもせず、匾ヒラタき耳ミミを枕マクラにも置オかず、袖ソデを枕マ  
 きて、襟エリを鋪シきて、涎ヨダシを飲ノみ（涎ヨダシに渴カ）て、失シ吉キ（齒ハの間に挿シ）を  
 食クひ（宿シュク食シに）て、額ヒタの汗アセは脚アシノ底ウラに到イるまで、脚アシノ底ウラの汗アセは額  
 に到イるまで、進スみ慎ツシみ行ユく時トキに、爾シムだちの母ハハは、諸モロ共トモに苦クシ  
 み合アふに、さつぱりと髮カミ結ユひて、裾スツ紮カラげ帶オビ締シめて、つつか  
裕味塔刺 字黑塔刺周 裕幹只塔刺 不薛列周 亦台塔刺



りと髮結ひて、身を堅め帶締めて、爾だちを育つるに、  
字黒塔刺周 不詳列周  
 嚙む間に半を與へて、喉に咽びて都てを與へて、空  
札勒吉 札勒  
 くて行きたりき。爾だちの肩を扯きて、男と齊等に誰  
額格木  
 にならせん。爾だちの頸を扯きて、人と齊等に誰にな  
古温  
 らせん」と云ひて、爾だちの不亦(譯義を知らず)を淨めて、爾だち  
不見備 額明 額甘 阿黑塔 合兒甘  
 の踵を擡げさせて、男の肩に駟馬の臀に達かゝめて、  
今爾 今爾だちを好く見んと思ひて居給はずや。賢明なる  
 我等の合敦は、日の如く明なる湖の如く寛き心坐しま  
納編 納兀兒  
 ーき(明譯) 你父初立國時、與你母一同辛苦、將您兒子每養  
大望 大望 你成人、你的母如日般明海般深。這等賢明、你

太祖の論し

察阿歹の讓

如何可這般說」と云へり。

それより成吉思合罕宣はく「拙赤をいかんぞかく云へ  
 る、汝等。我が子どもは、兄は、拙赤に非ずや。後はかく勿  
 云ひそ」と勅ありき。この言につき、察阿歹微笑みて言  
 く「拙赤の力ある技能の答は言ふまじ。口にて殺した  
 るは、馱すべからず。言にて死なしめたるは、剝取るべか  
阿赤 兀格額兒 兀忽兀魯克先 兀ト赤  
 らず。(悪く言はれても滅りは)子どもは、兄は拙赤、我等二人なる  
 ぞ。罕額赤格に並行き、力を與へん。逃げたるをば、劈き斫  
答勒各哩黑三 答勒巴魯  
 り合はん。後れたるをば、踵を斷ち斫り合はん。斫歌歹の  
斫只答黑三 斫古魯  
 みは、敦厚なり。斫歌歹を云ひ合はん。(勸進)斫歌歹は、罕額



拙赤の譲り

赤格の前に居て、形影大なる皮帽の訓を奉けしめば、  
 可からんぞ」と云へり。この言につき成吉思合罕宣はく  
 「拙赤は、何をか云ふ。言へ」と宣へり。拙赤言く「察阿歹已に  
 言へり。察阿歹我等二人[罕額赤格に]並行き、力を與へん。  
 幹歌歹を云ひ合はん(明譯)教幹歌歹承繼者」と云へり。成吉  
 思合罕勅あるには「並行きつゝ、何ぞあらん(明譯)你二人不  
 必並行。土地なる母は、廣くあり。河ども水どもは多く  
 あり。分つべき營盤を廣げ、外國を鎮めさせ分たんと宣  
 ひて、「拙赤察阿歹二人は、言に遵ひ合へ。民に勿笑はせ  
 そ。人に勿嘲らせそ。前に阿勒壇忽察兒二人は、かくの如  
 合朝 合ト合理兀魯惕

諸子分封の端

幹歌歹相續のうけがひ

き言を定め合ひて、却てその言に遵はざる故に、いか  
 にか爲られし。何をか爲されし。今阿勒壇忽察兒二人の  
 子孫より汝等と共に分け合はん。彼等を見ては、いかん  
 ぞ慢られん、汝等(明譯)如今他子孫見在。教隨您每、以爲鑑  
 戒」と宣ひて、「幹歌歹は、何をか云ふ。言へ」と宣へり。幹  
 歌歹言く「合罕額赤格恩賜して言へと云はるれども、何  
 をか申さん、我。能はずといかでか申さん。出来る限慎ま  
 んとも申さんぞ。久後若我が子孫に、青草に裏むとも、  
 牛に喫はれざる、膏に裏むとも、狗に喫はれざる[もの]生  
 れば、麋の如く跳越え、鼠の如く順ひ去らめんか。(辭  
 額速 罕答孩 客禿思 忽魯合納 那孩 兀魯亦迭克迭古 幹耶突兒 忽赤阿速 脫喇



拖雷翼衛の志

太祖の兄弟五人各一人

まゝに譯したれども、さつぱり分らず、善く讀む人の判斷又は改譯を俟つ。明の譯官も困りたりと見えて、**不能承繼**（と約めて、大意）これだけをぞ申さん。別に何をか申さん、**我**と云へり。この言につき**成吉思合罕**勅あるには**斡歌歹**かゝる言を言ふならば、可きぞと宣へり。又**拖雷**は何をか云ふ言へ」と宣へり。拖雷言く「我は、**合罕額赤格**の名ざりたる兄に、前に居て、**忘れたるを心附けて、睡りたるを喚覺して、然諾の伴、赤馬の鞭**となりて、**然諾**より後れず、**班列**より缺けず、**長き出征**に出征して、**短き**（劇）**戰**を戦ひて與へん」と言へば、**成吉思合罕**は善しとし、勅あるには「**合撒兒**の子孫一人に」その位を知

相續の約

唐兀惕の徴

らゝめ、**阿勒赤歹**の子孫一人に知らゝめ、**斡惕赤斤**の子孫一人に知らゝめ、**別勒古台**の子孫一人に知らゝめ。かく思ひて、我が子孫一人に知らゝめて、我が勅は、別に爲さず（變へ）**毀らざれば、違はざれ、失はざれ、汝等、斡歌歹の子孫に、青草に裏むとも牛に喫はれざる、膏に裏むとも狗に喫はれざる**「もの」生れば、我が子孫の内に一人も善きもの生れずやばあらん」と勅ありて、**合撒兒阿**惕赤斤、**別勒古台**四人の子孫の相續の事と太祖の子孫即元帝金帳罕察合台罕亦勒罕の相續の事とは、編末の附録に述ぶべし。

**成吉思合罕**出馬するに、**唐兀惕**の民の**不見罕**の處に使を遣り、「汝の右の手と爲らんと云ひたりき、汝、**撒兒**



阿沙敢不の大言

塔兀勒の民に金の糜繩を斷たれて折證せんと出馬せり。我右の手となりて出馬せよと云ひ遣りたれば、不兒罕聲を出さざるに、まづ阿沙敢不言く「力足らざる内に罕と爲りつゝ、何と云ひて、軍を添へず、大なる言を言ひて遣りき。そこに成吉思合罕宣はく「阿沙敢不にかでかかく言はれたり」と考へ、彼等の處に便翻りて指して往かば、何の難きことかあらん。別に即人の處に向ひて居る時なるぞ。「罷めん」その事を。長生の上帝に祐護せられれば、金の牽賀堅固なるを扯きて來ば、そこに即成就せよ、その事を」と宣ひて、

(この時の不兒罕は、夏の神宗李遵項なり。襄宗安全)

忽蘭合屯の隨行斡惕赤斤の留守

諸書異辭なき己卯の西征

は太祖六年に殂し、族人なる遵項位を嗣げり。元史太祖紀には、十三年戊寅、即西域征伐の前年、是歲伐西夏、圍其王城、夏主李遵項出走西涼とあれども、秘史の趣にては、豐隙開けたるのみにて、征伐は無かりし様なり。親征錄集史にも、その年西夏を伐ちたることを載せず。

兔の年(我が順德天皇承久元年己卯、宋の嘉定十二年、金の宣宗興定三年、元の太祖十四年、西紀一三一九年、太祖五十八歳の時)、撒

兒塔兀勒の民の處に阿喇亦に依り越え出馬するに、成吉思合罕は、合屯より忽蘭合屯を伴れ進み、弟たちより斡惕赤斤那顔を大老營に留守せしめて出馬せり。(耶律楚材)

の西游録に「戊寅春三月、出雲中、抵天山、涉大磧、踰沙漠、達行在所、明年、大舉西伐、元史耶律楚材の傳にも己卯夏六月、帝西討、回國、親征錄己卯上總兵征西域、太祖紀十四年己卯夏六月、西域殺使者、帝率師親征、使者の殺されたるは戊寅の年にして、己卯の年に出征したるなり。多遜の史は、主吠尼に本づきて、一二一八年に使者殺され、その冬成吉思汗は斡兒朶を發し、弟兀主堅(斡惕赤斤)に國の政を委ね、一二一九年の夏、亦兒的失の河邊に駐りて馬を養ひ軍を整へ、委古兒の君巴兒主克、阿勒馬里克の君昔固納克帖勤、合兒魯克の阿兒思蘭罕みな會し、秋、師進み、六十萬と云はれたり。闊喇自姆王懼れて、何の計もえせず、蒙古の軍昔渾河に至るまで、抗



修正秘史の紀年の一年後

西征の路順

敵するもの無かりき」と云へり。一二二九年は、即己卯の年なり。丘長春の西游記に、宣使劉仲祿己卯の五月在乃滿國兀里朶得旨」とあるは、太祖親發の前月なり。乃滿國兀里朶は、太祖の四斡兒朶の一なる乃蠻の斡兒朶、辛巳の六月長春の立寄りたる處にして下文に「窩里朶漢語行宮也。其車輿亭帳望之儼然古之大單于未有若此之盛也」と云へり。耶律楚材の雲中より至りたる行在所も、この斡兒朶なり。一二二八年（戊寅）の冬斡兒朶を發したる（多遜の史）は、客魯噠河の大斡兒朶にして、乃蠻の斡兒朶を發したるは、己卯の六月なり。翌年庚辰の二月長春燕京に入りて行宮漸西」と聞けるは、己卯の秋軍を進めたることなり。己卯の西征は、諸書殆ど異辭なし。然るに喇失惕の史には、免の年諸皇子將帥を集めて西伐の事を議り、軍中の法度を定め、龍の年亦兒的失河に駐夏し、秋軍を進めて、斡惕喇兒城に至る」とあり。諸書に較ぶれば、一年後れたり。親征録は「己卯上總兵征西域」とは書き出たれども、次に「庚辰上至也兒的沙河住夏秋進兵所過城皆克至斡脫羅兒城」と云へるは、全く喇失惕に同じ。蓋修正秘史の紀年に一年の後れありしと見えて、己卯より癸未まで五年の間の事蹟は、親征録も集史も皆一年づつ後れたり。洪鈞曰く帝駐也兒的沙河應是己卯夏而西域史辰年方至也兒的沙河與親征録同由是而見脫必赤顏之叙西伐誤始龍年元史既本之而又考知他書始於己卯據以增入於是攻取蒲華薛迷思干兩城一事兩記譯西域史乃知其病在此」この一事兩記は、錢大昕より疑ひ始めたる難題なり。が、洪鈞の解説にてその病の根本明になれり。阿喇亦は卷八なる阿喇嶺にして、乃蠻の地より不黑都兒麻河の源に赴くに越ゆる所なり。然るに太祖西征の路は、不黑都兒麻河に向はずして、乃蠻の地より阿勒台山の東南幹山を

額帖兒河の邊なる乃蠻の斡兒朶

阿勒台山の東南幹山

越えて、合喇額兒的失河に出でたれば、阿喇亦を越ゆと云へるは、いかゞあらん。耶律楚材丘長春の經たる路は、蓋大軍のに異ならざる故に、楚材の西游録と長春の西游記とに依り、太祖の進軍を跡附くるは、頗る興味ある事なれば、語長けれども、こゝに補叙せん。まづ西游記に、辛巳五月中旬陸局河（客魯噠河）を離れてより西に行き、六月十四日長松嶺を越え、西北に行き、平地に出で、石河を見、高嶺に登り、海子に臨み、二十八日泊窩里朶之東、宣使往奏稟皇后奉旨請師渡河、其水東北流。玻璃切は、長松嶺を康該山の東の枝なる温都兒沙納高き松山に當て、石河を薛連噶河の南の渾水なる赤羅禿石ある河に當て、高嶺の下なる海子を赤羅禿河の流れ出づる察罕諾兒（白き湖）に當て、乃蠻の斡兒朶を薛連噶河の源なる額帖兒河の邊に置けり。次に七月九日、同宣使西南行五六日云云、又三二日歷一山高峰如削、松杉鬱茂、而有海子、南出大峽、則一水西流、玻璃切曰く尖れる峰は、烏里雅蘇台の東なる康該の雪峰の一なる斡惕桓孩兒罕山なり。その麓、孛固丁河の源に一の湖あり。峽より出でたる後、西に流る、河は、烏里雅蘇台河なり」と云へり。長春は、それより西南に行き、沙場を過ぎ、又五六日嶺を踰えて南し、田鎮海の城の北を過ぎ、二十六日阿不罕山の北に鎮海來謁し、八月八日、大山に傍ひて西に行き、又西南約行三日、復東南過大山、經大峽、中秋日、抵金山東北少駐、復南行、其山高、深谷長坂、車不可行。三太子出軍、始開其路、約行四程、連度五嶺、南出山前、臨河止泊、從官連幕爲營、因水草便、以待鋪牛驛騎、數日乃行、渡河而南、卜喇惕施乃迭兒曰く長春の過ぎたる山口にて大軍の過ぐる爲に路の開かれたるを見れば、長春は、成吉思汗耶律楚材と同一路を行きたることうつなし。若必思騰答班の山口は、阿勒台山脈を越ゆ



必什巴里克

る峠の内にて困難少き所なれば、長春等はその山口を過ぎたるならん。然れども又上文の水草の便と河を渡るとの二語に據れば、兀蘭答班を越えて不勒昆河(兀命古河の上流)に下れりとも考へらる。これより長春は、直に南に進み、白骨甸を度り、沙陀を過ぎ、委兀兒の國に向ひたれども、西征の軍は、金山を越えたる後、馬力を養はんが爲に、西に轉りて合喇額兒的失河に一夏を過たりき。合喇額兒的失河の谷とその源水なる克喇河の谷とは、今も善き牧場として名高くと云ふ。西游録に「道過金山云云、金山而西、水皆西流入海」とあるは、兀命古河の乞失勒巴什湖に入り、合喇額兒的失河の齋桑湖に入るの類を云ふ。次に其南有回鶻城、名別石把云云。城西二百里、有輪臺縣。西游記に、八月二十七日、抵陰山(天山)後、翌日、沿川西行、歷二小城、西即鼈思馬大城云云。此大唐時北庭端府、其西三百餘里、有縣曰輪臺。九月二日、西行、四日、宿輪臺之東、又歷二城、重九日至回紇昌八刺城。二記の鼈思馬は、即錄の別石把、元史の別失八里、喇失惕の必什巴里克にて、委兀兒の都なり。克刺普囉惕は、必什巴里克を今の烏魯木齊に當てて、洪鈞もそれに從ひたれども、かくては昌八刺に接近して、輪臺を置くべき所なし。徐松曰く、唐北庭大都護府治在今濟木薩之北端、即都護字之合音、輪臺縣治約在阜康縣西五六十里」と云へる。從ふべし。昌八刺は、元史地理志に彰八里、耶律希亮の傳に昌八里と書けり。程同文曰く、中統元年、阿里不哥反、希亮踰天山、至北庭都護府、二年、至昌八里城、夏、踰馬納思河、則昌八里在今瑪納斯河之東也。一錄に、瀚海去(別石把)城數百里、過瀚海千餘里、有不刺城、不刺南有陰山、山頂有池、周圍七八十里、出陰山、有阿里馬城。二記に、翌日(九月十日)、並陰山而西、約十程、又度沙場五日、宿陰山北、詰朝南行、長坂七八十里、抵暮乃宿。晨

賽喇姆諾兒

起、西南行約二十里、忽有大池、方圓幾二百里、師名之曰天池、沿池正南下、左右峯巒峭拔、眾流入、峽奔騰洶湧、曲折彎環、可六七十里、二太子扈從西征、始鑿石理道、刊木爲四十八橋、橋可並車、薄暮宿峽中、翌日方出、入東西大川、次及一程、九月二十七日至阿里馬城。二錄の瀚海は、即記の沙場なり。徐松曰く、晶河城東、至托多克、積沙成山、浮澀難行、東距阜康縣、二千一百里、故云十餘程。不刺は、地理志に普刺、耶律希亮の傳に布拉と書き、喇失惕は普刺惕と云へり。洪鈞曰く、今城已廢、當在博羅

阿勤馬里克

塔拉河左近、南臨賽喇木淖爾。徐松曰く、自托多克過晶河、山行五百五十里、至賽喇木淖爾東岸、淖爾正圓、周百餘里、雪山環之、所謂天池海。並淖爾南行五十里、入塔勤奇山峽。諺曰、果子溝、溝水南流、勢甚湍急、架木橋、以度車馬。峽長六十里、爲四十二橋、即四十八橋遺趾。一記の東西大川は、伊犁河の谷を云へるなり。阿里馬城は、元史の阿力麻里、珀兒沙人の阿勤馬里克なり。嚕西亞の薛篋諾甫は、阿勤馬里克は、庫勒札の西北四十嚕里、伊犁河の谷にありき」と云ひ、嚕西亞の庫勒札領事たりし、教授咱合囉甫は、綏定より七嚕里の所に古城の大なる廢墟あることを聞き、知れり」と云ひ、又錄に、又西有大河、曰伊犁」とあるは、即伊犁河なるを、記には、又西行四日、至蒼刺速沒董、水勢深闊、抵西北流。十月二日、乘舟以濟」とあり。塔刺思河は、伊犁河より遙に西にあり、記を書きたる人ふと誤りたるなれば、これは伊犁河として見るべし。長春の歸路に、癸未三月二十三日、吹沒董の南岸に至り、又十日、至阿里馬城西百餘里、濟大河」とある大河は、この伊犁河なり。錄に、其西有城、曰虎司窩魯朵、即西遼之都。附庸城數十。一記に、十月二日、乘舟以濟、南下至一大山、(阿刺套嶺か)又西行五日、云云、西行七日、度西南一山、(喀思帖克山口か)明日、至回紇小城、十有六日、

西遼の故都



塔刺思城

西南過板橋渡河、晚至南山(阿列克散迭兒山脈)下、即大石林牙、其國王、遼後也云云。板橋にて渡れる河は、即吹沒葦、今の楚河に於て、合喇乞塔惕の都は、楚河と阿列克散迭兒山脈との間にありたりなり。録に「又西數百里、有塔刺思城」記に「十有八日、沿山而西七八日、山忽南去、一石城當途、石色盡赤、有駐軍古跡、西有大塚、若斗星相聯、又渡石橋、並西南山、行五程、至塞藍城」記を書ける人、伊犁河を荅刺速沒葦と誤りたる故に、こゝには塔刺思河の名を擧げず。然れども渡れる石橋は、塔刺思河の橋なるべし。ト喇惕施乃迭兒曰く「長春は、今の庫勒札に近き阿勒馬里克を發したる後、伊犁河を庫勒札より遠からぬ所に渡りたりと見ゆ。それより蓋今の威兒尼のある所に進みたり。阿刺套連山に沿ひ西に行き、蓋舊き驛路に由り、喀思帖克山口にて連山を越えたり。原注、威兒尼より塔什肯篤に車の通らる、新き驛路は、北に廻り路して、關什珀克にて舊路に合ふ。楚河をば必ず今の脱克馬克にて渡り、阿列克散迭兒山脈の麓に達したるならん。それより今驛路あるこの山脈の麓を西に行き、塔刺思河に到り、今の奥列阿塔の邊にて河を渡りき。賽喇姆城は、沁肯惕の東十三英里に今も猶あり。奥列阿塔より塔什肯篤に至る驛路は、賽喇姆に近く通るなり。録に「又西南四百餘里、有苦蓋城、八普城、可傘城、芭攪城、苦蓋西北五百里、有訛打刺城」苦蓋は、失兒荅哩牙の南岸なる關氈篤なり。八普は、地理志に「巴補」と書き、經世大典の圖は、柯散の南に置けり。嚕西亞の地圖に、納曼千の西失兒荅哩牙の北に帕魄とあるは、それなり。可傘は、地理志の柯散、曷思麥里の傳の可散に於て、納曼千の西北三十嚕里、喀散小河の傍にあり。芭攪城は、速勒壇巴別兒の記録に見えたる康底巴擔に於て、關氈篤の東にありき。康底は、城邑、巴擔は、巴旦杏に於て、巴旦杏の名高

巴擔城

關氈篤河

き所なり。この果は、支那に無かりし故に、珀兒沙語をその儘に用ひたり。本草綱目には「巴旦杏」と書き、本草正要には「八擔杏」と書けり。録に「芭攪城邊皆芭攪園、故以名其花如杏而微淡、葉如桃而差小、冬季而花、夏盛而實」と云ひ、記にも「正月把攪始華、類小桃、俟秋採其實、食之味如胡桃」と云へり。芭攪も把攪も、巴擔を聞き誤りたるなるべし。嚕西亞の地圖に、浩罕篤と關氈篤との間に康亦巴擔と云ふ所あるは、即その地なり。訛打刺は、名高き幹惕喇兒なり。後に言ふべし。記に十一月五日塞藍にて病死したる門人趙九古を葬り、即行西南、復三日至一城、明日又歷一城、復行二日有河、是爲霍爾沒葦、由浮橋渡。霍爾沒葦は、中世の阿喇必亞地理家の昔渾河、今の失兒荅哩牙なり。常德の西使記に「忽牽河、元史郭寶玉の傳に「忽章河、明史の西域傳に「火站河」と云ひ、赫兒別羅惕は「阿喇必亞人は、昔渾河を通俗には「納哈兒關展篤」關展篤の河と呼びたり」と云ひ、速勒壇巴別兒も、この河を「か呼べり」と云ふ。ト喇惕施乃迭兒曰く「長春の歴たる二城の一は、沙什即塔什肯篤なるべし。失兒荅哩牙を渡れる所は、蓋撒馬兒罕に至る驛路の通る赤納思なりけん。蒙古の軍は、幹惕喇兒指して西に進みたりと云ひ、長春は、賽喇姆より直に西南に行きたれば、賽喇姆以往の行程は、大軍と同ト者別を先鋒に遣りぬ。者別の後援に速別額台を遣りぬ。速別額台の後援に脱忽察兒を遣りぬ。(脱忽察兒は、多遜の史に「脱嚙察兒」とありて、太祖の婿なりと云へり。元史世系表なる鐵木哥幹赤斤の孫塔察兒國王を集史に「脱嚙察兒」と云へるに依れば、この脱嚙察兒は、博爾忽

者別等三將の派遣